

平成12—14年度科学研究費補助金

名古屋大学図書

基盤研究 (C) (2)



20106764

自然言語における文法的機能の表示を
支配する原理の研究

(課題番号 12610554)

平成15年3月

研究代表者 町田 健

(名古屋大学大学院文学研究科・教授)

はしがき

自然言語の最も重要な機能は、話し手から聞き手への事態の伝達であり、したがって自然言語の本質を解明するためには、言語普遍的な事態表示がまず可能な限り達成される必要がある。事態を構成する要素のうち、最も普遍性が高いと判断されるのは、意味役割、時制、モダリティー、定性などの、いわゆる文法的機能を表示する統語的および形態的手段である。本研究においては、かかる文法的機能がいかなる手段によって事態表示に関係してくるのかを、できるだけ多様な種類の言語を分析することによって明らかにしている。分析の対象としてとりあげたのは、膠着語である、日本語、ツングース系のヘツェン語、ウラル系のフィンランド語、複統合語であるアプハズ語、屈折語であるゲルマン語、そして典型的には孤立語に分類することができる英語である。異なった類型に属する諸言語の文法的機能の表示手段を詳細に検討することにより、より言語普遍的な事態表示の様態が解明されたと考える。

名古屋大学図書



20106764

研究題目 自然言語における文法的機能の表示を支配する原理の研究

研究種目 基盤研究(C) (2)

研究組織

研究代表者

町田 健 名古屋大学大学院文学研究科・教授

研究分担者

柳沢民雄 名古屋大学大学院国際言語文化研究科・助教授

田村建一 愛知教育大学教育学部・助教授

佐久間淳一 名古屋大学大学院文学研究科・助教授

櫻井 健 愛知県立大学外国語学部・助教授

研究経費

平成12年度 1, 500千円

平成13年度 1, 100千円

平成14年度 1, 000千円

総計 3, 600千円

研究発表

町田 健 2000. 「形態素列の表示する事態の個数と形態素配列規則」

『名古屋大学言語学論集』16:263-280.

町田 健 2001. 外国語との対照から時制をとらえる」『言語』30-13:18-25.

町田 健 2001. Word order of nouns and relative clauses.

『名古屋大学言語学論集』17:157-170.

町田 健 2002. Quantitative approach to semantico-syntax.. 『エネルギー』27:68-91.

町田 健 2002. 「文の中での動詞の役割」『言語』31-11:32-39.

柳沢民雄 2000. 「アブハズ語の動詞形態論」『名古屋大学言語文化論集』22-2:225-260.

柳沢民雄 2001. 「印欧語における他動性について」『名古屋大学言語文化論集』
23:201-240.

柳沢民雄 2002. Abkhaz Texts 『名古屋大学言語文化部・国際言語文化研究科言語文化論
集』24-2:275-295.

田村建一 2003. 「ヘジェン語の格接辞と再帰所有接辞—公刊された民話テキストの分
析—」『愛知教育大学研究報告（人文・社会科学）』52（発表予定）

- 佐久間淳一 2000. On the case marking of the theme-argument of the negative existential sentence in the Finnish language. 『名古屋大学文学部研究論集』 16:1-11.
- 佐久間淳一 2000. 「フィンランド語における主格および属格の付与とその条件について」『名古屋大学言語学論集』 16:281-295.
- 佐久間淳一 2001. The nominative and the genitive in the Finnish language. Proceedings of the Ninth International Congress of Finno-Ugric Studies. Pars VI:113-121.
- 佐久間淳一 2002. On the so-called status construction in the Finnish language. 『名古屋大学文学部研究論集』 142:1-10.
- 佐久間淳一 2002. Non-lexical case assignment in the Finnish language. 『名古屋大学文学部研究論集』 145:1-11.
- 佐久間淳一 2003. Semantic macroroles and case marking in the Finnish language. 『名古屋大学言語学論集』 18 (発表予定)
- 櫻井 健 2001. 「複合形式の文法化プロセス」『愛知県立大学外国語学部紀要 (言語・文学)』 33: 369-393.

目 次

はしがき

研究組織・研究経費・発表論文

町田健

自然言語における文法的機能の表示を支配する原理..... 1

柳沢民雄

アブハズ語の疑問文の形態..... 20

Kenichi TAMURA (田村建一)

The Story of Antu (1) — A Hezhen Folktale Text with English and Japanese

Translations —..... 49

佐久間淳一

文法関係に関わる格付与の原理について

—フィンランド語における主格表示の分析を通して—..... 75

櫻井健

北ゲルマン語後置定冠詞の分布について..... 87

CONTENTS

Introduction

Organization of research, amount of grants per year, research results

MACHIDA, Ken

On the principles governing the denotations of grammatical functions
in natural language.....1

YANAGISAWA, Tamio

The interrogative morphology in Abkhaz.....20

TAMURA, Kenichi

The Story of Antu (1) — A Hezhen Folktale Text with English and
Japanese Translations49

SAKUMA, Jun'ichi

On the principle of the case assignment of the grammatical functions
— an analysis of the nominative marking in the Finnish language —75

SAKURAI, Takeshi

The distribution of the postposed definite articles in the Germanic
languages87

自然言語における文法的機能の表示を支配する原理

町田 健(研究代表者)

名古屋大学大学院文学研究科

0. 序論

自然言語の本質的機能は事態の伝達である。事態を表示する言語単位を「文」と呼ぶ。Wittgenstein(1922)の主張する通り、事態の認識は言語を通してのみ行われるのであるから、事態の構造は自然言語の与える文の構造をもとにすることにより得られる。言語を媒介としない事態の直接的認識があり得ないとすると、言語が表面的には多様であることは自明の事実であるから、異なった言語を使用する人間が認識する事態には共通性がないということになる。

事実、言語相対論においてはかかる事態認識の様態が主張されているのであるが、これを反駁する根拠はある。それは、異なった言語間での相互翻訳が適切に達成されているという誰にでも知られた事実である。翻訳とは、ある言語で作られた文が表示する事態と同一の事態を、それとは別の言語の文によって表示する過程である。同一の事態を異なった言語によって表現することが可能であるのだとすれば、異なった言語を使用する人間であっても同一の事態認識が達成されていると結論できることになる。

しかも翻訳は任意の複数の言語間において可能であるのだから、この結果として、同一の事態を任意の言語によって表示することができると考えてよい。すなわち、使用する言語が何であれ、人間の事態認識には普遍性があり得るということである。

当然のことながら、翻訳によって果たして同一の事態が表示されているのかという疑問は残る。異なった言語の文によって表示された事態が、もとの言語で表示されていた事態と同一であることを確認するための厳密な手続きは、現在のところ未だ提案されていない。しかしながら、翻訳の一種である通訳の実態を観察してみると、起点言語において表示されていた事態が正しく理解されたとすれば実現するはずの行動が、目標言語の文のみを理解することによっても実現していることが分かる。たとえば、起点言語において何らかの命令が行われたとする。この命令を表示するはずの目標言語の文を聞いた人間は、確かに命令が行われた場合に期待される行動をとるのが通常である。

Bloomfield(1935)における意味と、それに対する反応の同一視に見られる誤謬をここで犯すわけにはいかないが、通訳を介した翻訳の場面で、異なった言語によって同一の事態が表示されて理解されているのは、恐らく疑うことのできない事実である。さらにまた、文書の翻訳であったとしても、翻訳文が原文と同一の事態を表示していることを疑わしめる事実は確認されない。ヨーロッパ共同体や国際連合のような、多言語が日常的に使用される機関においては、大量の文書が日

々複数の言語に翻訳されることによって業務が遂行されているのであるが、これらの機関においては、翻訳の達成する同一の事態表示の実現は当然の前提である。そして、この前提を覆す事実は知られていない。

以上より、同一の事態が、任意の言語のよって表示され得ると見なすことに不合理は認められないとしてよい。ただし、翻訳が効果的に達成されている事実によってのみ、任意の言語による同一の事態表示が可能であることを検証したとするのは、当然不十分である。翻訳が効果的に達成されていることを確認する手段の厳密化が必要であることは言うまでもないし、翻訳以外に、任意の言語による同一の事態表示がなされることを検証する事実を求める必要もある。

さらに、言語学が経験科学であるとするれば、多様な言語の文が表示する事態を分析することによって、帰納的に同一事態の表示が達成されていることを確認する方法もとられるべきである。本論は、異なった類型に属するいくつかの言語を取り上げて、事態がいかなる形式で表示されているのかを分析し、普遍的な事態表示を提示することを目標とする。文は形態素の列であり、文が表示する事態は、形態素が表示する集合^{*1}を合成することによって得られる。Saussure(1916)が主張しているように、名詞や動詞などの内容形態素に関しては、それらが表示する集合が体系をなすため、あらかじめ厳密な定義が与えられている専門用語などの場合を除いては、異なった言語で全く同一の集合に対応している二つの形態素は存在しない。^{*2}しかし一方で、意味役割や時制、法などの、いわゆる文法的な機能を表示する形態素群に関しては、異なった言語で機能の同一性が広く確認されている。このことから、異なった言語における同一の事態表示をまず保証するのは、機能形態素であると考えることができる。何より、事態の成分としての個体や事態集合の機能が明示されなければ、事態表示は完成しないのであるから、形態素の文法的機能の普遍性を探求することは、事態の普遍的特性を適切に捉えるためには重要である。

したがって本論では、文法的機能の表示を中心に、任意の言語において表示される事態の普遍的特性を解明していくことにする。

1. 日本語による事態表示

1.1. 文の構造

日本語は膠着語の代表であって、基本的な文の構造は以下のように表される(風間他1994、町田2002)。

^{*1} 本論では、形態素は個体や事態の集合を表示すると考える。名詞は個体集合または事態集合を表示し、動詞は、主体や対象などが不定の事態集合を表示する。これは、Montague (1974)などの形式意味論で採用されている、形態素の意味を集合として捉える方法と同じである。

^{*2} ただし、経験的にも観察されるように、言語が異なれば内容形態素の意味が似ても似つかぬものになることもない。内容形態素の体系によって設定される集合の性質には、かなりの共通点が見られることも確かである。

(1)文＝主題＋名詞群1＋…＋名詞群n＋述語群

主題、名詞群および述語群の構造は、以下のような形態素配列規則に従う。^{*3}

(2)主題＝名詞句＋主題助詞

名詞句＝(指示詞)＋(形容詞)＋名詞

名詞群＝名詞句＋格助詞

述語群＝動詞語幹＋助動詞1＋…助動詞n＋アスペクト辞＋時制辞＋モダリティ辞群^{*4}

述語群＝形容詞語幹＋時制辞＋モダリティ辞群

述語群＝名詞句＋断定辞＋時制辞

モダリティ辞群＝法助動詞語幹＋時制辞＋モダリティ助詞

1.2. 事態の構成要素

文は形態素の列であって、形態素は何らかの集合を表示する。形態素は、その表示する集合が事態中で果たす機能によって分類される。

1.2.1 実体集合

名詞は、個体または事態の集合を表示する(以下、「個体または事態の集合」を「実体集合」と総称する)。個体の集合を表示する名詞が「普通名詞」と呼ばれるものであり、事態の集合を表示する名詞が「抽象名詞」と呼ばれるものである。「固有名詞」は、通常は一個の個体を表示するが、これは要素の数が一個の集合であると見なすことができる。

名詞の表示する集合を、何らかの属性に基づいて限定する働きをするのが、名詞句の要素である場合の形容詞である。この機能をもつ形容詞を「限定形容詞」と呼ぶことにする。限定形容詞も、ある属性をもつ個体または事態の集合を表示するのだが、色彩を表したり、個体の成分を表したりする一部の形容詞を除いては、形容詞のみではそれが表示する集合を与えることはできない。形容詞の機能は、並列する名詞が表示する集合の部分集合を表示させることである(町田1997)。

^{*3} ここでは、従属節を含まない単純な構造の文(単文)を対象とする。従属節の表示するのは何らかの事態であって、すなわち単文と同じであるから、文法的機能の表示を考察する場合には、単文のみを対象としても一般性が失われることはない。

^{*4} ここで、添字の n の値は1であってもよい。日本語の場合、助動詞の連続は最大3個であると考えられる。モダリティ辞群としては、モダリティを表示する助動詞と、事態に対する発話者の判断を表す助詞(終助詞)がある。

1.2.2. 意味役割

名詞が表示する集合が事態中でもつ機能(意味役割)を表示するのが格助詞である。事態中の実体集合がもつ機能が適切に理解されてはじめて、事態の個別化が可能になる。したがって、いかなる言語であれ、実体集合の機能は何らかの形で表示されなければならない。

意味役割として最も重要なのは「主体」である。主体は述語群に属する語幹そして／あるいは助動詞の一部を決定する機能をもつ。^{*5}後述のように、述語群によって事態の枠組みが与えられるから、主体を表示する実体集合が選択されなければ、事態の個別化は完成しない。言語が伝達するのは個別的な事態なのであるから、事態の個別化を決定する意味役割である主体は、事態に属する実体集合の中では最も重要な位置にあると言ってよい。

主体と同様に重要であるのが、主体から何らかの作用を受ける「対象」を表示する集合である。「作用」という概念は定義が不明確であって、今後さらに厳密な観点から特性を記述する必要がある。いずれにしろ、事態の性質によっては、主体と並んで重要な役割を果たす実体集合が含まれることがあり、その集合が主体に代わって自らが主体となることにより、述語群の形式に決定的に関与する可能性をもつ。次の例を見てみよう。

(3)太郎が次郎を棒でなぐった。

この(3)においては、「太郎」が主体であり、このことは格助詞の「が」によって表示されている。この文で、「次郎」は主体である「太郎」から「なぐる」という作用を受けており、したがって「次郎」の表示する個体のもつ意味役割は「対象」といわれる。ここで、「太郎」に代わって「次郎」を主体とすると、次の文が出来上がる。

(4)次郎が太郎に棒でなぐられた。

すなわち(4)においては、「次郎」が主体としての地位を占めることで、同一の {nagur-} という動詞語幹を共有しながらも、さらに {rare} という助動詞語幹が付加されている。つまり、「次郎」が主体となることで、述語群の中核となる動詞語幹は保持しながらも、新たな形態素の付加を要請したということである。

他方で、(3)に含まれている名詞である「棒」の表示する実体集合を主体としても、同一の動詞語幹を使用することによって適格な文を作ることはいできない。

(5)*棒が太郎から次郎をなぐった／なぐられた／なぐらせた。

^{*5} 主体が選択する助動詞は、「(ら)れる」「(さ)せる」という、受動、使役を意味するものである。

以上の例を見ると、「対象」という意味役割は、主体と並んで述語幹の選択に関与しながらも、異なった述語群の形式を与える機能を指すと考えることができる。この機能が、何故に主体からの「作用」を受けることと同一視される傾向にあるのか、という点に関しては、今後さらなる分析を進める必要がある。

「主体」と「対象」以外の意味役割に関しては、格助詞に分類される形態素の機能を観察することにより、以下のようなものが設定されうる。

(6) に:受容者(～に与える)、関与者(～に教わる)、場所(～にある)、目的地(～に行く)

へ:目的地(～へ向かう)

と:同伴者(～と遊ぶ)、関与者(～と会う、～と戦う)

から:起点(～から来る)

で:道具(～で切る)、場所(～で行われる)

より:比較対象(～より大きい)

これらの意味役割は、実体集合が事態中でもつ機能に対応する。しかしさらに、実体集合間の関係を表示する機能としての意味役割もある。

(7) の:所有者(～の本)、関与者(人類の誕生、橋の建設)

や:並列者(イヌやネコ)

意味役割のうち「関与者」と名付けたものは、実体集合間に認められうる何らかの関係を表示するものである。「関係」は極めて広範な概念であるから、これを果たして単一の意味役割と見なすことが妥当かという問題はある。しかしながら、関係に属する要素は、具体的な状況を勘案すれば、無限に設定される可能性がある(Dowty 1991)。こうなると、有限個の形態素によって表示され、かつ理解される意味役割には離散的な特性がなくなることになる。意味役割が連続的な特性をもつとすると、言語によって保証されるべき同一の事態の伝達が保証されないことになるから、やはり意味役割にも離散性が与えられるべきであると考えなければならない。したがって、「関与者」がさらにいくつかの意味役割に細分される可能性はあるにせよ、境界をもたない無限個の意味役割的特性が設定されることは、言語の本質としてあり得ないと思われる。

1.2.3. 事態基

事態の枠組みを、本論では「事態基」と称することにする。事態基は、主体や対象など、事態の要素である実体集合とその機能が特定化されていない事態の集合を表示する。例えば、「見た」という動詞群が事態基である場合、その事態基は、基準時点よりも前に不特定の主体が不特定の

対象を不特定の時区間^{*6}において見た、という内容の事態の集合を表示する。事態基が要求する主体や対象が、事態基に組み込まれてはじめて文が完成し、単一の事態が表示されるようになる。

事態基そのものの特性を限定するのは、アスペクト辞、時制辞、モダリティー辞、断定辞である。

日本語において、アスペクトを表示する形態素としては、「走っている」「走っていた」などの形式中に見られる {i} があるだけである。この形態素を含まない動詞形式として「走る」「走った」があり、{i} を含む形式とそうでない形式が、アスペクトに関して対立している。

アスペクトは、事態の全体または部分のいずれかが提示されたものであり(Comrie 1977, 町田 2001)、事態に関しては全体と部分の二種類しかあり得ない。したがって、日本語におけるアスペクト表示も、「全体相」と「部分相」の二種類だということになる。^{*7}

時制を表示する形態素としては、日本語には {ru} と {ta} がある。{ta} は事態が基準となる時点よりも前に成立したことを表示し、{ru} は事態が基準時点と同時かそれよりも後に成立したことを表示する。^{*8}したがって、日本語において事態の成立時点に関して、時制辞によって表示されるのは、「過去」と「非過去」の二種類となる。

ただし、先行研究によってすでに明らかにされているように(町田1989、工藤1995 など)、動詞語幹の時間的特性(動作態)と時制辞の機能を合成することにより、たとえ非過去時制であっても、基準時点と同時か、それとも後かを区別することは可能である。したがって、日本語の事態基の時制的特性としては、「過去」「現在」「未来」の三種が区別されとしても、大きく合理性が損なわれることはない。

モダリティーは、第一には事態の成立可能性に関する話者の判断を表示する(Palmer1986)。事態の成立可能性は、本質的に連続性をもつものであるが、先述の意味役割の場合と同様に、自然言語においては何らかの形態素を使用して表示される以上、離散的な性質をもつものでなければならない。

日本語においては、他の言語と同様に、モダリティー表示の形態素が述語群に付加されない時には、事態が完全に真であることが表示される。「～にちがいない」「～(の)はずだ」という形式

^{*6} 事態の成立のためには、通常は時間を要する。したがって、事態は時点において成立するというよりも、むしろ長さのある「時区間」において成立するというのが正確である。

^{*7} 「～始める」「～終わる」「～かける」などの、いわゆる「補助動詞」によって表示される事態の局面もあることは確かである。しかし、「～始める」などについても、「～始めている」のような形式をとることが可能なのであるから、これらの補助動詞によって表示される事態についても、さらに全体と部分があり得ることになる。このことから、最も基本的なアスペクトは、やはり全体と部分だと結論することができる。

^{*8} 基準時点は、本論で分析の対象としている単文については、発話時点であるのが原則である。従属節の場合に基準時点を与えるのは、主節の述語群が与える時点となる。

が付加されれば、事態の成立可能性が高いことを、「だろう」という形式が付加されれば、事態に単なる成立可能性があることを(益岡・田窪1992、町田2002)、「かもしれない」という形式が付加されれば、事態の成立可能性が低いことを表示する。そして、否定辞の「ない」が付加されれば、事態が完全に不成立(偽)であることが表示される。したがって、日本語の場合には、表示される事態成立の可能性の程度としては、完全に成立、可能性高、可能性中、可能性低、完全に不成立の5段階があることになる。

さらに日本語では、事態の単なる成立可能性を表示する形式として、「だろう」に加えて「ようだ」と「らしい」がある。いずれの形式も、事態の成立可能性を話者が推論するための根拠となる事態が与えられていることが特徴であるが、「らしい」の場合は、その根拠となる事態が、話者が直接的に経験したものでないのに対し、「ようだ」に関してはそのような制限がない(木下1998、町田2002)。

なお、事態の成立可能性が高いことを表示する「はずだ」についても、話者がこう推論する根拠となる事態が与えられていなければならない。ただし、成立可能性が高いことを表示する形式に関しては、根拠となる事態が直接的な経験で得られたかどうかに基づく形式の区別はない。

「ようだ」「らしい」「はずだ」のようなモダリティ表示形式は、成立可能性を判断する根拠となる事態が与えられているという点で、一個ではなく複数の事態を表示するという特徴をもつ。

これらのモダリティ表示形式が表示する複数の事態のうちの一つは、成立可能性があると判断される事態の根拠だという性質があるに過ぎないから、事態としての構造は不明瞭である。この点で、副助詞の「も」を含む次のような文が、構造も明確な複数の事態を表示することができるのは異なる。

(8)花子も来た。

(9)「花子が来た」+「花子以外の人間が来た」

上の文(8)は単文であるが、(9)で与えられた内容を示す複数の事態を表示している。しかしながら、単文であっても複数の事態を表示させる機能をもつという点で、「ようだ」などのモダリティ表示形式も、「も」などの副助詞と同様の性質をもつと言える。

1.2.4. 主題

日本語の事態表示に関する重要な特徴は、文が使用される状況中に与えられている実体集合が、文の表示する事態の要素として含まれることを表示するための形態的手段があることである。この機能をもつ実体集合を「主題」と呼び、主題を表示する形態素は、名詞に後接する助詞の「は」である(野田1996、町田1999)。

主題である実体集合はまた、事態基が表示する集合の性質を限定するという機能をもつ。すなわち、主題である実体集合の性質に適合するように、事態基に対応する集合の性質が決定され

るということである。次の例を見てみよう。

(10)a.花子は美しい。

b.花子が美しい。

上の(10a)においては、「花子」が表示する1個の個体が主題である。一方で、事態基を表示する述語としての形容詞「美しい」は、主体が不定である事態の集合を表示する。主体が不定であるから、表示される事態の個数は無限個である。ここで、主題である「花子」が1個の個体を表示していて、これが事態基の集合の性質を決定するから、文として合成される時には、事態基の集合の個数も1個に限定されることが、「花子」が主題として与えられた段階ですでに聞き手には分かっている。

これに対して(10b)においては、「花子」が与えられた段階では、この形態素が表示する個体が、後続する述語群によって与えられる事態基の中で、主体としての機能をもつことが理解されるのみである。そして「美しい」が与えられた段階で、ようやく事態基がいかなる特性のものであるかが分かる。上述のように、述語群としての「美しい」は主体が不定の無限個の事態を表示する。「花子」は主題ではないから、事態基に対応する集合の性質を単独で限定することはできない。

この時、主体が1個の個体であるのに対して、事態基は無限個の事態であるから、両者は明らかに適合しない。このことから、主体の個数に適合するように、事態基の表示する事態も1個に限定されることになり、最終的に(10b)は1個の事態を表示する。事態基の表示するはずの事態集合の残りの要素は、この過程で不成立だったものとして排除されるのだから、この文においては、花子である個体以外の個体は事態の主体ではない、言い換えれば花子以外の個体は美しくないという「排他性」(野田1996)の意味が生じることになる。

1.2.5. 事態の構造

日本語の文が表示する事態の要素としての実体集合、意味役割、事態基、主題の特性が以上のようなものであるとすれば、日本語において表示される事態の構造は以下のような形で表される。ただし、 e_i は実体集合を表す。

(11)日本語の文が表示する事態の構造

主題= e_t

事態基

アスペクト{全体、部分}

成立時区間{過去、現在、未来}

成立可能性{完全、高、中、低、不成立}

事態基の要素

主体= e_1 、対象= e_2 、受容者= e_3 、関与者= e_4 、同伴者= e_5

道具 = e_6 、場所 = e_7 、目的地 = e_8 、起点 = e_9 、比較対象 = e_{10}

同時的に表示される事態

事態をE、事態基をB、アスペクトをA、成立時区間をT、成立可能性をM、同時的に表示される事態をE'で表すとする、日本語の文が表示する事態は、一般的には次のように表示される。

(12) E: $e_i \parallel B\langle A, T, M \rangle [e_1 \dots e_{10}] + E'$

例えば、次の(13)が表示する事態は、(14)のように表される。

(13) 太郎は花子に数学を教えているようだ。

(14) E: 主題 = 太郎 \parallel 教える < 部分、現在、可能性中 > [主体 = 太郎、対象 = 数学、受容者 = 花子] + E'

E'で表される、同時的に表示される事態の構造は、状況によって与えられる、Eを推論する根拠として適切な事態である。

2. 英語による事態表示

2.1. 英語の文の構造

英語は起源的には屈折語であるが、音韻変化に由来する形態的変化の結果、現在では孤立語的な類型に属する言語となっている。したがって英語においては、意味役割のうち主体と対象は必ず語順によって表示されるし、受容者も、統語的制約はあるものの、語順によって表示されることができる。^{*9}

英語には、日本語と異なり、主題を表示する統語的、形態的手段はないが、疑問詞が文頭に位置するという特徴がある。この配列特徴は、英語が属するインド・ヨーロッパ語に共通であり、ギリシア語やラテン語のような屈折語であるインド・ヨーロッパ語も、同様に疑問詞が文頭に位置する構造を示す。英語と同様の孤立語的特徴を示す中国語は、日本語と同じく、疑問詞であっても、

^{*9} He gave it to me.は適格でも、He gave me it. が適格でないように、人称代名詞が2個連続して、最初のものが受容者を表すような構造は、英語では許されない。

その意味役割に応じて、他の名詞と同様の位置に配置される。^{*10}

英語の文の基本的構造は、以下のような形で与えられる。

(15) 文 = 名詞句 + 動詞群 + (名詞句) + (名詞句) + (名詞群)^{*11}

名詞句 + 動詞群 + 形容詞 + (名詞群)

疑問詞 + 動詞群 + (名詞句) + (名詞群)

疑問詞 + 動詞群 + 形容詞 + (名詞群)

疑問詞 + 助動詞 + 名詞句 + 動詞 + (名詞句) + (名詞群)

名詞句 = (限定詞) + (形容詞) + 名詞

名詞 = 名詞語幹 + 接辞

名詞群 = 前置詞 + 名詞句

動詞群 = (助動詞) + (助動詞) + 動詞

動詞 = 動詞語幹 + 接辞

2.2. 事態の構成要素

事態に必須の構成要素である実体集合や事態基そのものは、すべての言語に共通である。したがって以下では、先に考察した日本語の事態表示とは異なる特徴についてのみ検討する。¹

2.2.1. 実体集合

a. 数の区別

英語の名詞には、単数形と複数形の区別がある。単数形は無標の形式であって、名詞に接辞が付加されていない時、名詞が個体集合を表示するものであれば、その集合に属する1個の個体を表示する。ただし、液体や不定形の個体のように、個体としての認識が困難な物質を表示する名詞の場合には、単数形は物質全体の部分を表示する。

名詞が事態集合を表示するものである場合には、単数形は事態集合の全体を表示する。物質を表示する名詞の場合に、単数形が部分集合を表示し、事態を表示する名詞の場合には、これとは異なって集合の全体を表示するのは、表示の規則に一見統一性がないように思われる。しか

^{*10} インド・ヨーロッパ語において、疑問詞が文頭に配置される理由は、今後意味論的な観点から解決されなければならない問題である。

疑問詞が文頭にあれば、その疑問詞が与えられることで、文が疑問文であることがただちに理解されるという利点がある。一方で、英語のように疑問詞が基本的には語形変化を行わない言語では、疑問詞の意味役割が、語順によって表示されないという不便もある。

したがって、文が表示する事態の理解の効率性という観点からすると、疑問詞が文頭にあることは、必ずしも効率性を高めることにはならない。

^{*11} 「名詞群」は、従来「前置詞句」と呼ばれる単位である。すなわち、前置詞の後に名詞句が後続して作られる単位を意味する。

しながら、事態集合の性質を考慮するならば、このような表示状態の相違は、特に不思議なものではない。

物質の集合は、それに属する部分としての各要素がそれぞれ異なっているのは当然であるにしても、要素間に大きな同一性がある。たとえば water(水)によって表示される物質であれば、その部分としての液体は、少なくとも通常感覚では、どれもが同じに見える。cat(ネコ)によって表示される個体に関しては、それぞれの個体に相違を認めるのは容易であるが、同時に外見のあるいは行動的な同一性を認めることも困難ではない。すなわち、物質の集合については、その任意の部分集合が、すべて同一の性質をもっていると言うことができる。

一方、事態集合の場合、たとえば love(愛情)という名詞を考えてみると、この名詞が表示することのできる個々の事態は、極めて多様である。「ある母親が自分の子供をやさしく抱きしめる」、「ある宗教家が信徒たちに困難を克服する方法を教える」、「ある為政者が自分の支配する人民たちの貧困を救う努力をする」など、この名詞が表示すると見なされる個々の事態は、それぞれ事態として見てみれば、全く共通性はない。これらの多種多様な、無限個の事態を包括する集合としてloveという名詞が与える集合が設定されているのである。したがって、このような事態集合に関しては、それに属するすべての事態が全体として一つの特性を表示しているのであり、その任意の部分を取り出したとしても、その部分が他の部分と同じ性質をもっているという保証はない。したがって、事態集合に関しては、その部分集合を抽出して表示することは、集合の性質を変更することになりかねない。このことから、事態集合は常にその全体が提示されなければならないのだと考えることができる。

名詞の複数形は、個体集合の部分集合のうち、要素が2個以上のものを表示する。個体の場合には、その間の境界が明確であり、1個の個体と2個以上の個体を区別して認識するのは容易である。集合に属する個体の個数は無限であるから、2個以上の個体に関しては、さらにそれ以上の個数を形態的に区別すると、無限個の形式が必要になるし、個数を明示するには特別の形態素(数量詞)を使用すればよいのだから、名詞そのものの形式としては、単数と複数を区別すれば十分である。言語によっては、「目」や「手」など通常は対になったものとして認識される個体を表示するために、「両数」または「双数」と呼ばれる形式を区別するものもある(古典ギリシア語やサンスクリット語など)。ただし、両数で表示することのできる個体集合の数は極めて少数であるので、両数形の形式としての効率性は低い。

単数形と複数形の形態的区別があることにより、英語の名詞が表示する実体集合の表示に関しては、「単数」と「複数」を区別する必要がある。さらに、同じ単数形であっても、名詞が表示する実体集合の性質によって、その部分または全体が表示されるという違いが生じるため、実体集合が物質から成るのか、それとも事態から成るのかを区別する必要もある。

b. 定性

英語には冠詞があるため、実体集合の特性として「定」と「不定」の区別が表示される。「定」は、

任意の集合に関して、その集合が属する全体集合の他の要素と明確に区別される根拠が、状況によって与えられていることを表す。一方で「不定」は、全体集合に属する他の要素と区別される根拠が、状況によって与えられていないことを表す。

例として、次の各文を見てみよう。

(16) a. I met a girl near my house.

b. I met the girl you spoke of the other day.

(16a)の girl は、girl(少女)が表示する個体集合の要素である1個の個体を表示する。この状況中には、この個体を同じ集合に属する他の個体と区別するための根拠は与えられていない。この性質を表示するのが不定冠詞のaである。一方、(16b)では、girl に後続する関係節 you spoke of the other day によって、この名詞が表示する個体が、他のgirlである個体とは明確に区別されることが示されている。この性質を表示するのが定冠詞のtheである。

集合中の他の要素と区別されるということは、別の言い方をすれば、聞き手が理解する要素と、話し手が意図している要素が同一であることが文の伝達によって達成されるということである。すなわち、集合が定である場合には、話し手が事態の要素として選択した実体集合と、聞き手がその事態表示によって同定する実体集合が同一である。一方で、集合が不定である場合には、話し手が選択した事態集合と聞き手が同定する事態集合の同一性が保証されない。

話し手が不定である実体集合を事態の要素として選択するのは、聞き手が同一の集合を同定する必要性がないと判断するからである。他方、定である実体集合が選択された場合には、聞き手が同一の集合を正しく理解することが要求されていると判断される。

「定」または「不定」の特性を「定性」(definiteness)と呼ぶ。実体集合の定性は、冠詞をもたない言語も、日本語、中国語、ロシア語、ラテン語、スワヒリ語など数多くあることから分かるように、文が使われる状況によって理解することが可能である。実際、(16)を日本語に置き換えた(17)を見れば、定性が状況によって与えられることが分かる。

(17) a. 私は自分の家の近くで女の子に会った。

b. 私は先日君が言っていた女の子に会った。

(17a)の「女の子」は、この文が表示する事態が聞き手に与えられる前には、状況中に登場していないし、この事態の他の成分によって、この名詞が表示する集合の要素である他の個体と属性が異なることが明示されることもない。したがって、話し手と聞き手の間で、事態の要素として選択される実体集合の同一性は保証されない。このことから、この「女の子」が表示する個体は「不定」として理解される。一方で、(17b)の「女の子」は、「先日君が言っていた」という関係節が先行していることから、この名詞が与えられた段階ですぐに「定」であることが理解される。

定性が状況によって与えられることは確かであるにしても、定性を表示する機能をもつ形態素によって、実体集合の定性を直接的に聞き手に理解させるほうが、言語による事態理解の効率性を高めることも、同様に確かである。同じ事態を表示することができるのであれば、形態素の数が少ないほうが、文の意味を理解する過程は、第一次的には効率性が高いと言える。しかしながら、実体集合の定性は、冠詞がない場合には状況を用いて間接的に理解するしか方法がないのに対し、冠詞があれば直接的に表示される。したがって結局のところ、冠詞の有無は集合の定性を理解する効率性を変化させることがない。この理由で、冠詞を発達させる言語とそうでない言語の二種が存在するのだと考えられる。^{*12}

なお、英語の不定冠詞はあらゆる名詞に付加されるのではない。複数形の名詞と、事態集合または不定形の物質の集合を表示する名詞が「不定」であることを表示する機能をもつ不定冠詞はない。複数の要素をもつ個体集合、事態および不定形の物質の集合を表示する名詞に関しては、名詞の前に冠詞が付加されていないこと(無冠詞)が、これらの特性をもつ集合が不定であることを表示する。

2.2.2.意味役割

英語では、上述のように、主体と対象という最も重要な意味役割は、語順(動詞群との位置関係)によって表示される。また受容者も、対象を表示する名詞の直前に位置する名詞によって表示されることができる。

それ以外の意味役割は前置詞によって表示される。英語の各前置詞が表示する意味役割は概ね以下の通りである。

(18)

for:受容者、関与者

by:近接場所、道具

with:同伴者、道具

at:点的(無次元)場所

along:線的(一次元的)場所

on:面的(二次元的)場所

in:空間的(三次元的)場所

around:周辺の場所

^{*12} ただし、歴史的に見れば、冠詞をもたなかった言語が冠詞をもつようになった例はあっても、その逆は観察されない。このことは、集合の定性を、冠詞によって直接的に表示する方法のほうが、理解の際には効率性がたかいのではないかと予想させる。

across:線的(一次元的)通過場所
through:面的・空間的(二・三次元的)通過場所
before:先行場所
after:後行場所
to:目的地(一般的)
into:空間的目的地
onto:面的目的地
from:起点
over:面的上方場所
above:点的上方場所
under:面的下方場所
below:点的下方場所
of:所有者、関与者

英語の前置詞は、日本語の格助詞よりも数が多い。このため、表示される意味役割も日本語よりも細かく分類されている。これらの意味役割を、すべて言語普遍的な意味役割として認定することができるかどうかは、さらに検討すべき問題である。特に、「場所」という意味役割に関しては、空間の次元、基準空間との関係が、役割の設定に関与しており、これらの関係は、言語によっては、前置詞あるいは助詞以外の形態素によって表示されるか^{*13}、状況によって間接的に理解されることもある。

このことから、普遍的な意味役割としては「場所」のみを設定しておいて、場所のより詳細な特性については、空間が必然的にもつ特性として、二次的な位置に据えるという可能性もある。これは、意味役割「目的地」についても同様である。ただし、英語のように場所や目的地に関して、その空間的属性の区別に応じた機能をもつ異なった形態素を使用する言語がある以上、普遍的な意味表示には、これらの属性が含まれるようにしておく必要はある。

2.2.3. 事態基

a. アスペクト

英語の動詞には、単純形(非進行形)と「be動詞＋現在分詞」の構造をもつ複合形(進行形)があつて、両者はアスペクトに関して対立している。このアスペクト対立は日本語と同様であつて、非進行形は事態の全体が成立したこと(全体相)を、進行形は事態の部分が成立したこと(部分相)

^{*13} 日本語では、over や under は「上に」「下に」のように、名詞と格助詞を用いて表示されるし、along は「に沿って」のように、格助詞と動詞を用いて表示される。

を表示する。

アスペクト形式を含む動詞群の意味は、動詞語幹の表示する事態(集合)の性質(動作態)とアスペクト形式の機能を合成することによって得られる。このことから、reach(到着する)、die(死ぬ)などの、瞬間的に生起する事態を表示する動詞語幹に関しては、瞬間には部分がありえないため、本来的に部分相のアスペクト形式を付加することはできないはずである。

しかしながら、瞬間的に成立する事態を、その成立の時点で確実に認識することは、通常の認識能力をもつ人間には甚だ困難である。^{*14}たとえば、「太郎がゴールに到着する」という事態を知るときには、まず太郎がゴールに接近しつつあることを知り、次に同じ太郎がゴールの向こう側にいることを知るという二つの事態が関与してくる。すなわち、瞬間的に成立する事態に関しては、その事態に先行する事態(前事態)と、その事態の結果生じる事態(後事態)の両方を含めて我々は認識しているものと考えてよい。

瞬間的に成立する事態を、このような複合的な事態として捉えたとするならば、前事態と後事態は長さのある時区間において成立するから、いずれの事態にも部分がありうる。したがって、瞬間的事態を表示する動詞語幹に部分相のアスペクト形式を付加することができて、この時には、前事態もしくは後事態の部分が表示されることになる。

この場合、日本語では、以下の例に見るように、後事態の部分が表示される。

- (19)a. 列車は駅に到着している。
b. 道ばたで鳥が死んでいる。

一方英語では、同じ条件で前事態の部分が表示される。

- (20)a. Your train is reaching the station.
b. The patient is dying.

b. 時間関係

基準時点と事態成立時点の時間的な関係を表示する形式が時制であるが、英語の時制体系は日本語よりもはるかに複雑である。図示すると次のようになる。

^{*14} さらに、瞬間的な事態が発話時点において成立する時、その成立を言語によって成立と同時に伝達することもできない。なぜならば、たとえ成立と同時に事態の認識が起こったとしても、それを文によって表示するためには、必ず時間が必要だからである。

(21)

過去	現在	未来
過去完了	現在完了	未来完了

現在完了形を時制形式と見なすことができるかどうかについては議論があるが(町田2001)、過去完了と未来完了は、過去もしくは未来の基準時点よりも前に成立する事態を表示するのだから、明らかに時制としての機能をもっている。現在完了も、基準時点としての現在(発話時点)よりも前に成立する事態を表示するのだから、機能としては通常の時制形式と同様である。

問題となるのは、現在完了と同様に過去も、発話時点よりも前に成立した事態を表示するため、現在完了と過去の機能が、これだけでは正しく区別されないということである。しかし、過去時制形式の機能を、「発話時点より前の基準時点と同時」のように、基準時点の発話時点との関係と、事態そのものの基準時点との関係という、2個の成分によって定義することにすれば、機能の区別が可能になる。この方式を適用すれば、現在完了形式の機能は、「発話時点と同時の基準時点よりも前」となる。^{*15}

同様に英語の各時制形式の機能を構成する成分的特徴をあげるならば、以下のようになる。

(22) 時制形式	基準時点	基準時点との関係
現在	発話時点と同時	基準時点と同時
現在完了	発話時点と同時	基準時点より前
過去	発話時点より前	基準時点と同時
過去完了	発話時点より前	基準時点より前
未来	発話時点より後	基準時点と同時
未来完了	発話時点より後	基準時点より前

c. モダリティ

英語のモダリティ表示のための形式は、大きく2種類に分類される。1つは、直説法と仮定法(接続法)という動詞そのものの形態的対立であり、もう1つは、法助動詞を動詞不定形(原形不定詞)の前に配置するものである。

動詞の法形式によるモダリティ表示に関しては、直説法によって事態が完全に真であることが、仮定法によって事態に成立可能性があることが表示される。すなわち、法形式は、事態が真

^{*15} 時制形式の機能のこのような定義の方法は、すでに Reichenbach(1947)において提示されている。ただし、この論考においては、基準時点の性格が明確にされていない。

であるかそうでないかという、二種類の可能性表示を区別するのみである(町田2002)。しかも、仮定法が主節で使用されるための条件は極めて限られているため、法形式による事態成立可能性の表示は、可能性の程度が離散的であることを考えると、必ずしも十分であるとは言えない。

これを補完するのが、法助動詞による可能性表示である。英語で事態の成立可能性を表示する形式としての法助動詞には、will, shall, may, must, should, ought to があり、willとmay にはそれぞれ would と mightという、起源的には過去時制を表示する形式があつて、可能性の程度を低める働きをしている。それぞれの法助動詞形式が表示する成立可能性の程度は異なるから、全体としては8段階の成立可能性の程度が英語では区別されることになる。

2.2.4. 事態の構造

以上の考察をもとにして、英語の文が表示する事態の構造をまとめると、次のようになる。

(23)英語の文が表示する事態の構造

事態基

アスペクト{全体、部分}

成立時間区間{基準時点:発話時点と同時・前・後、基準時点との関係:同時・前・後}

成立可能性{完全、可能性の程度8～1、不成立}

事態基の要素

主体、対象、受容者、関与者、同伴者、道具

場所{点、線、空間、先行、後行、近接、周辺、点的上方・下方、空間的上方・下方}

通過場所{点、線・空間}、目的地{一般、面、空間}、起点

3. 結論

日本語および英語が表示する事態の構造は、事態基が作る枠組みに実体集合が組み込まれるという、言語普遍的な特質を共有している。しかし一方で、文を構成するためにそれぞれの言語で用意されている形態素の種類の違いに由来する事態構造の違いも観察される。あらゆる言語の文が表示する事態を不足なく表示するためには、できるだけ多くの言語を分析する必要があるが、本論で考察した2つの言語に関する事態表示の構造を比較するだけでも、普遍的な事態表示の基礎とすべき項目の重要な候補はかなりの程度明らかになったと考えられる。

文を構成する形態素あるいは形態素群(時には文法的機能をもつ形態素配列規則)がもつ機能は言語ごとに異なるから、最終的に得られるはずの普遍的事態構造を構成する要素のすべてが、ある1つの言語によって表示されることはない。しかし、本論の冒頭でも述べたように、任意の言語から任意の別の言語への翻訳が可能であるという事実を考えるならば、明示的に観察される

形態素(群)だけでなく、形態素の間に見られる意味的關係、そしてとりわけ文が発話される状況を参照することにより、普遍的事態構造に近い事態構造が、任意の言語において表示されているものと考えてよい。

本論の結論として、日本語と英語の各言語で表示される事態構造を組み合わせたものを、普遍的事態構造を求めるための基礎として掲げる。

(24)英語と日本語が表示する事態構造

主題

事態基

アスペクト{全体、部分}

成立時区間{基準時点:発話時点と同時・前・後、基準時点との関係:同時・前・後}

成立可能性{完全、可能性の程度8～1、不成立}

事態基の要素

主体、対象、受容者、関与者、同伴者、道具

場所{点、線、空間、先行、後行、近接、周辺、点的上方・下方、空間的上方・下方}

通過場所{点、線・空間}、目的地{一般、面、空間}、起点

成立時区間{過去、現在、未来}

同時的に表示される事態

参考文献

- BLOOMFIELD, Leonard. 1935. Language. London : G. Allen & Unwin
- COMRIE, Bernard. 1977. Aspect. Cambridge University Press
- DOWTY, David R. 1991. Thematic proto-roles and argument selection. Language 67-3: 547-619
- 飯田隆 1997. 『ワイトゲンシュタインー言語の限界』講談社
- 池上嘉彦 2000. 『日本語論への招待』講談社
- 風間喜代三他 1994. 『言語学』東京大学出版会
- 木下りか 1998. 「ヨウダ・ラシイー真偽判断のモダリティの体系における推論ー」『日本語教育』96
- 工藤真由美 1995. 『アスペクト・テンス体系とテキスト：現代日本語の時間の表現』ひつじ書房
- 町田健 1989. 『日本語の時制とアスペクト』アルク
- 町田健 1997. 「形容詞の意味について」『北海道大学文学部紀要』第45巻第3号: 247-272.
- 町田健 1999. 「主体を表す「は」と「が」の意味的機能について」『名古屋大学言語学論集』第15巻:197-245
- 町田健 2001. 「外国語との対照から時制をとらえる」『言語』30-13:18-25.
- 町田健 2002. 「文の中での動詞の役割」『言語』31-11:32-39.
- 益岡隆志, 田窪行則 1992. 『基礎日本語文法ー改訂版』くろしお出版
- MONTAGUE, Richard. 1974. Formal Philosophy. New Haven: Yale University Press
- 野田尚史 1996. 『「は」と「が」』くろしお出版
- PALMER, F.R. 1986. Mood and modality. Cambridge: Cambridge University Press
- ライヘンバッハ、H. (石本新訳)1982. 『記号論理学の原理』大修館書店
- SAUSSURE, Ferdinand de. 1916. Cours de linguistique generale. Paris: Payot
- WITTGENSTEIN, Ludwig. 1918. Tractatus logico-philosophicus. in Werkausgabe Band1(1988). Suhrkamp

アブハズ語の疑問文の形態

柳沢 民雄

名古屋大学大学院国際言語文化研究科

はじめに¹

アブハズ語は、様々な機能を有する形態素を動詞複合体の中を含める所謂「複統合的 polysynthesis」な言語であると言われる²。我々に馴染みのある印欧諸言語の単文がアブハズ語においては一語で表現され得る場合がある。疑問文もまたアブハズ語においては動詞複合体内の然るべき接辞を用いることによって表現される。本論の目的は、このような動詞複合体内部でのアブハズ語における疑問文の形態法を記述するものである。

1. アブハズ語動詞の一般的形態特徴

アブハズ語は、他の北西カフカース諸語³と同じく、主体・客体を表す人称マーカーだけでなく、否定、使役、相 version, 可能法 potentialis, 不付随法 unvolitionalis, テンス・アスペクト等の文法範疇を表現するマーカーを動詞内部に接辞化することによってかなり大きな動詞複合体を形成すること

¹ Приносим искреннюю благодарность госпоже Ана Цвинариа, оказавшей мне большую помощь в выяснении отдельных вопросов грамматического строя абхазского языка. 本論で用いたアブハズ語資料は、2000年、2001年、2002年の夏にグルジア共和国で行ったアブハズ語の調査資料に基づいている。この言語調査のインフォーマントはスフミ市南方の町オチャムチラ Ochamchira 生まれの Ana Tsvinaria さんである。彼女はアブハズで生まれ育ち、中等教育を受けた後、モスクワに勉学に行ったという。彼女は、アブジュイ Abzhuy 方言の話者である。この方言はアブハズ文章語の基になった方言であり、スフミ市から南部に拡がっている。本論で用いたアブハズ語の動詞活用形および文例は全てインフォーマントによって確かめられたものである。しかし調査の時間的制約と不十分な資料のために、これは今まで調査した資料ノートを基にしたアブハズ語の疑問の動詞構造の概略であり、中間発表の性格をもつものである。アブハズ語話者の Ana Tsvinaria さんには様々な質問に対する忍耐のいる調査に協力くださり感謝の意を表したい。なお記述の不十分さと不正確さは全て著者に帰せられる。

² Климов Г.А. Кавказские языки. - Советское языкознание за 50 лет. М., 1967. с. 319 参照。

³ 北西カフカース諸語（あるいはアブハズ・アディゲ諸語）に属する言語は、アブハズ語 Abkhaz, アバザ語 Abaza（アバジン語ともいう）、アディゲ語 Adyghe, カバルダ語 Kabardian（あるいはカバルジン語）そしてウビフ語 Ubykh である。この内、アブハズ語とアバジン語は一つの言語グループを形成し、他方、アディゲ語とカバルダ語は共通のチェルケス語 Circassian グループを形成する。この両グループの中間に位置するのがウビフ語である。ウビフ人は、1864年にトルコへの移住の後、トルコ語等と急速に同化し、現在ではウビフ語話者は存在しないのではないかと考えられている。これらの北西カフカース諸語は起源的な親縁関係があると仮定されるが、他のカフカース諸語であるカルトヴェリ語やナフ・ダゲスタン諸語との起源的關係は不明である。アブハズ語とアバジン語は、厳密な言語的意味では一つの言語単位を成すが、今日では二つの言語としている。アブハズ語は二つの下位方言、アブジュイ Abzhuy 方言（スフミ南方）とブジブ Bzyp 方言（スフミ北方）に分かれ、アバジン語はタバント方言とアシュハル方言に分かれる。アブハズ文章語の基礎になった方言は、アブジュイ方言であり、本論もまたアブジュイ方言の資料を用いている。アブハズ語の話者の数は、全部で9万1千人、アブハズ領内で8万3千人（1979年調査）である。またトルコやシリア等の外国に約10万人のアブハズ人がいるという。

が可能な言語である⁴。そのような文法範疇を表す接辞の大部分は、アブハズ語においては接頭辞によって表現される。接尾辞によって表現されるものは、動態性、テンス・アスペクト、また一部の場合にみられる否定及び疑問のマーカー等である。このようにアブハズ語は語根の前に多くの接辞的要素を置く所謂「スロット (slot) 型」言語である⁵。語根の前に置かれた人称・クラスを表す接頭辞を本論では「コラム column」⁶と呼ぶこととするが、アブハズ語はこのコラムの配置順序によって主体・客体関係を決定する。この配置順序は、動詞語根を起点にその動詞の種類（他動性）によってその役割が決まる。即ち、アブハズ語話者が発話されたアブハズ語を理解しようとするときには、線條的に流れる人称マーカーを語根まで記憶し、語根を確定し、そして語根の種類を認定した後、これを今度は逆方向に向かって語根部分から人称マーカーの確定に入ると考えられる。例えば、自動詞 á-s-ra “to hit”⁷を使った語形 d-bá-s-we-jt’ (<d-bá-s-wa-jt’)⁸ “he / she hits you (f.)” と他動詞 á-ta-ra “to give” を使った語形 d-bá-s-to-jt’ (<d-bá-s-ta-wa-jt’)⁹ “I give him / her to you (f.)” において、最初の三つの音は同じであるが、その機能は異なっている。語根は動態標識である -wa- の前にあるものとして確定され得る。従って、前者の語根は -s- であり、これは “to hit” という意味の自動詞語根である。アブハズ語の自動詞は一番目の人称マーカーは主語であり、二番目のマーカーは補語である（これを以下ではそれぞれ「コラム1」と「コラム2」と称する。以下では記号 C1, C2 をそれぞれ用いる）。従って、この語形はコラム1の -d-（これは3人称単数の人のクラス）からコラム2の -ba-（これは2人称単数の女性のクラス）に向けられた「打つ」という行為を表している。これに対して、後者の語根は -ta- であり、これは “to give” という意味の他動詞語根である。アブハズ語の他動詞は、自動詞とは逆に動詞語根に近い第三番目の人称マーカー（これを「コラム3」と称する。以下では記号 C3 を用いる）

⁴これらの文法範疇に関しては、柳沢民雄「アブハズ語動詞構造概説」、『ロシア・ソヴィエト言語類型論の研究』、平成12-平成13年度科学研究費補助金（基盤研究(C)(1)）研究成果報告書、2002。pp.1-128。を参照。

⁵宮岡伯人著『「語」とはなにか エスキモー語から日本語をみる』（三省堂、2002、pp.65-67）参照。この著書の中で宮岡伯人博士は次のように「スロット型言語」について述べておられる：「さて複統合語の性格についていま一つ大切なのは、上にも触れた統合度の上限である。上限が比較的明確な言語もあれば、かならずしもそうでない言語もある。両者は語の性格にも全体としての形態法的な性格にもかなりの違いがある。エスキモー語は後者のタイプだが、前者のタイプの複統合語の記述にはしばしば、語根・語基の前あるいは後ろに前後関係の定まった一定の「スロット (枠 slots)」あるいは「ポジション (位置 position)」がたてられる。そしてスロットの各々は、パラダイムをなす（派生・屈折）形態素集合から選ばれた一つの形態素で埋められることによって、語全体の形態素連続が定まってくる、つまり語が形成されるという形の記述になる。すなわち語は、その中心である語根・語基の前あるいは後に措定される一定数のスロットを埋める形態素をつなぎあわせて得られた一系的な連続体としてとらえられる。スロットはかならずしもその全部が埋められるわけではなく、ふつう多かれ少なかれ欠番を残す。しかし、ともかくもそのようなスロットがたてられるということは、語内部に生じうる形態素の数、つまり統合度に一定の上限が認められるということであり、あらかじめ語の全体的な結構を予想してかからなければならない窮屈さが語形成にともなうということでもある。このようなスロットがそれぞれにおいて選択された形態素で埋められていく「スロット型」言語は、（連辞的というよりむしろ）範例的、したがって全体としての（広義の）屈折語的だといえるかもしれない。」(ibid., pp.65-66)

⁶「コラム」"column"という術語は、Hewitt に拠る。Hewitt, G. *Abkhaz*. Routledge. 1989。参照。

⁷“á-s-ra”の形はマスダル masdar と呼ばれる形であり、これはカフカース諸語に見られる名詞と動詞の特徴をもつ文法範疇である。アブハズ語のマスダルは「a+ 語根+ra」の形をしている。状態動詞のマスダルはこの形に継続性を表す -zaa- が挿入されることがある。これは人称変化の際には現れない。このようなマスダルはアブハズ語において辞書の見出し語とされる。本論でも動詞を引用する際にはマスダル形で挙げ、英語の訳は「to 不定形」を付すこととする。なお á-s-ra “to hit”の動詞はアブハズ語では自動詞である。これについては註11を参照。

⁸母音 a は j の前で e に変わる。この wa は動態性 (DYN) のマーカーである。

⁹母音 a は wa と融合し o となる。

が行為者を表し、第一番目の人称マーカーは他動詞の目的語を表す。第二番目の人称マーカーはこの動詞の場合には間接目的語を表す。従って、コラム3の -s- (これは1人称単数) がコラム2の -be- (2人称単数の女性のクラス) に向けて、コラム1の -d- (3人称単数の人のクラス) を「与える」という行為を表している。これらの例からわかるようにアプハズ語においては、線條的に配列された形態素の意味は、最初から確定できるのではなく、ある段階に達して初めてその意味を理解することが可能となる。これらの例は最も基本的で単純な例であるが、アプハズ語においては先に触れたように様々な文法範疇を表す接辞が接頭辞化され、さらにこの文法範疇を表す接頭辞にそれを規定する人称・クラスマーカーが附くという構造を成している。アプハズ語話者はこれらの接頭辞の役割を語根確定まで記憶し、それからそれらの働きを決め、文構造を認識するのであるから、記憶の負担量の観点からも接頭辞 (あるいは人称・クラスの項) の数はある制限された数にならざるを得ない。

アプハズ語の疑問文の形態法を記述するに当たり、動詞形態法に関して次の二つの形を区別しておかなければならない。その第一は、アプハズ語動詞は「状態動詞 stative verbs」と「動態動詞 dynamic verbs」を区別することである。この区別は接尾辞要素の違いによって形態的に区別できる。例えば、状態動態 a-t'wá-ra "to sit" の現在時制肯定形 s-t'ó-wp' (< s-t'á-wp') " I am sitting " と動態動詞 á-yw-ra "to run" の現在肯定形 sá-yw-we-jt' (< sá-yw-wa-jt') " I run " は、各語根 -t'wá- と -yw- の後の接尾辞要素に違いが見られる。動態動詞の現在形にある -we- (< -wa-) は動態性を表す標識であり、状態動態にはない。第二の動詞形態法上の区別は、定形 finite forms と非定形 non-finite forms の区別である。定形とは動詞そのものによって文を完結できる形であり、それは肯定形の接尾辞 -jt' (動態動詞), -p' (状態動態) によって標示される。他方、非定形はその動詞だけでは文を完結することができない形であり、定形によって表される行為に依存した補充的な行為あるいは状態を表す形である。アプハズ語では様々な状況語的および位置的な接辞を動詞の非定形に挿入することによって、時間、場所、目的、様態、等の関係を表すことができる。例えば、接続詞的な「...のとき」の意味を表す接頭辞 -an- "when" を用いた動態動詞現在形

- (1) d-an-á-px̃o (< d-an-á-px̃a-wa)
 (s)he (C1)-when-it (C2)-read-DYN
 "when (s)he is reading , (...)"

は、定形を表す接尾辞 -jt' の欠如した非定形である。同様に、この接頭辞 -an- "when" を用いた状態動詞現在形

- (2) d-aná-cw̃o-w (< d-aná-cw̃a-w) ¹⁰
 (s)he (C1)-when-sleep-Non-Fin.
 "when (s)he is sleeping (...)"

は、定形を表す接尾辞 -p' が欠如した非定形である。これらの非定形は文を完結させるためには他の行為によって補完されねばならず、他の定形の動詞形を必要とする。例えば、

¹⁰d-aná-cw̃a-w の w の前にある母音 a は、w の前で o に変わる。

- (3) Lará d-ané-cʷo-w l-án d-wantó-jt' (< d-wanta-wa-jt').
 she she (C1)-when-sleep-Non.Fin her-mother she (C1)-iron-DYN-Fin.
 "When she is sleeping, her mother is ironing."

ここでは定形の d-wantó-jt' によって文が完結している。また非定形は、関係詞を欠いたアプハズ語において、関係代名詞の機能をもつ接頭辞と共に関係詞節をつくることができる。この接頭辞は、人称接頭辞のコラム 1 の機能に対応する j- と人称接頭辞のコラム 2, 3 に対応する -z- がある（この関係代名詞的機能を有する接頭辞の文法的な表記として、以下では記号 Rel. (= Relative) で標示する）。コラム 1 は自動詞の主語と他動詞の直接目的語の機能を果たすのであるから、この j- も関係詞節内では同様の機能を果たす。例えば、自動詞 a-ca-rá "to go" と他動詞 a-yʷ-rá "to write" を用いた例を参照：

- (4) jə-có (< jə-ca-wa) á-č'k'ʷn
 Rel. (C1)-go-DYN the-boy
 "the boy who is going"

- (5) jə-zə-yʷ-wa a-šʷq'ʷś
 Rel. (C1)-I (C3)-write-DYN the-book
 "the book which I am writing"

他方、コラム 3 は他動詞の行為者の機能を、コラム 2 は間接目的語の機能を果たすのであるから、-z- もまた関係節内ではこれら二つの機能を果たす。例えば、他動詞 a-ta-rá "to give" を用いたコラム 3 の例 (6) とコラム 2 の例 (7) を参照：

- (6) a-šʷq'ʷś [j]-sə-z-ta-z á-č'k'ʷn
 the-book [it](C1)-to me (C2)-Rel. (C3)-give-Non-fin.Past.Ind. the-boy
 "the boy who gave me the book"

- (7) a-šʷq'ʷś [j]-zə-l-tá-z á-č'k'ʷn
 the-book [it](C1)-Rel. (C2)-she (C3)-give-Non-fin.Past.Ind. the-boy
 "the boy to whom she gave the book"

なお上の例 (6), (7) の人称・クラスを表すコラム 1 の接頭辞 j- は、その直前にそれと呼応する名詞があるときにはその接頭辞が顕れない。以下ではそのような場合には [] あるいはゼロ記号 \emptyset によってそれを標示することにする。

この非定形はまた本論で記述する疑問文においても用いられる動詞形である。後に詳しく検討するようにアプハズ語の疑問文は、動詞の非定形語幹に疑問の接尾辞を附加して形成される。例えば、上に挙げた動態動詞 a-px̃-a-ra "to read" を用いた疑問形

- (8) a-šʷq'ʷś j-á-px̃-o-da ? (< j-á-px̃-a-wa-da)
 the-book Rel. (C1)-it (C2)-read-DYN-Qu.(who)
 "who is reading the book ?"

は、非定形語幹に人を表す疑間接尾辞 -da が附加されている。このアプハズ語の「読む」という動詞は自動詞であるので、接頭辞はコラム 1（主語）とコラム 2（補語）の順に配置されている¹¹。このコラム 2 の接頭辞 -a- は名詞 a-šwq'wə (the-book) に呼応する 3 人称単数の人以外のクラスを表すマーカーであり、コラム 1 の接頭辞 j- は関係詞の役割をする接頭辞である。即ち、文字通りにこの動詞形を解釈すれば、"(one) who-it-read-who?", lit. "who is one who is reading it?" となり、疑問文が動詞の非定形を用いる理由の一端が理解できると思われる。

2. アプハズ語の人称・クラス接頭辞

アプハズ語の人称・クラス接頭辞は以下のようである。

Column 1（他動詞の直接目的語，自動詞の主語）

人称	単数	複数
1	s(ə)-	h(a)-
2（男性）	w(ə)-	šw(ə)-
2（女性）	b(ə)-	šw(ə)-
3（人間）	d(ə)-	j(ə)- / ø-
3（人間以外）	j(ə)- / ø-	j(ə)- / ø-

Column 2（間接補語，間接目的語）

1	s(ə)-	ha- / ah-
2（男性）	w(ə)-	šw(ə)-
2（女性）	b(ə)-	šw(ə)-
3（人間・男）	j(ə)-	r(ə)- / d(ə)-
3（人間・女）	l(ə)-	r(ə)- / d(ə)-
3（人間以外）	a- / ø-	r(ə)- / d(ə)-

Column 3（他動詞の行為者）

1	s(ə)- / z-	ha- / ah- / aa-
2（男性）	w(ə)-	šw(ə)- / žw-
2（女性）	b(ə)-	šw(ə)- / žw-
3（人間・男）	j(ə)-	r(ə)- / d(ə)-
3（人間・女）	l(ə)-	r(ə)- / d(ə)-
3（人間以外）	a- / na-	r(ə)- / d(ə)-

括弧内のシュア ə は一般にアクセントと子音連続（三子音連続を避けるために三子音の内の最初の

¹¹ 「能格」言語と言われるアプハズ語の他動性の語彙特徴は、対格言語の他動性の語彙特徴とは若干異なっている。「読む」、「打つ」、「叩く」、「突く」、「掴む」、「引っ張る」、「つねる」、「引っ掻く」、「接吻する」、「舐める」、「噛む」、「頼む」、「呼ぶ」等は自動詞である。詳しくは、Климов, Г. А. *Принципы континентальной типологии*. Москва. 1983, с. 95-97. また柳沢民雄「アプハズ語動詞構造概説」pp. 24-30. を参照。

子音の後ろにシュアが顕れる) に係わって出現する¹²。コラム 3 の 1 人称と 2 人称の有声音のヴァリエント *z-*, *aa-*, *žw-* は、語根の頭子音が有声音のときに現れる。例えば, *a-ba-rá* " to see " のコラム 3 が 1 人称単数の形を参照：

- (9) *bə-z-bé-jt'* (< **bə-s-bá-jt'*)
 you (f.)(C1)-I (C3)-see-(AOR)
 " I saw you ".

このヴァリエントはコラム 3 にのみ起こる現象であるので、これが他動詞にのみ生じ、自動詞には生じないことに注意されたい。またコラム 2 とコラム 3 の 3 人称複数のヴァリエント *d(ə)* は、使役マーカ *r(ə)* が現れるとき (あるいは使役派生した語幹のとき) 現れる。例えば、

- (9-1) *d-də-rə-yw-we-jt'* (< **d-rə-rə-yw-wa-jt'*)
 him/her (C1)-they (C3)-CAUS-run-DYN-Fin.
 " they make him / her run "

またアブハズ語の動詞には、*preverb* (以下これを *PREV* によって記す) と呼ばれる副詞的要素が語根前に置かれることがある。この際、他動詞のコラム 3 の人称接頭辞は *preverb* と語根との間に配置される。しかし自動詞においてはコラム 2 の人称接頭辞が *preverb* と語根との間に配置されることはない。例えば、他動詞 *a-ná-ca-ra* " to drive thither " と自動詞 *á-x^wa-pš^ə-ra* " to look at " のアオリスト形を参照：

- (10) *j-ná-l-ce-jt'* (< *j-ná-l-ca-ø-jt'*)
 it / them (C1)-*PREV*(thither)-she (C3)-drive-(AOR)-Fin.
 " she drove it / them thither "

- (11) *s-bə-x^wa-pš^ə-ø-jt'*
 I (C1)-you (f.) (C2)-*PREV*(at)-look-(AOR)-Fin.
 " I looked at you "

アブハズ語の否定マーカ *m(ə)* は、アオリスト、完了、不定過去、過去完了の時制形において語根前に置かれる。その他の現在、未来、未完了の時制形ではこの否定マーカは接尾辞要素として置かれる。上で挙げた自動詞 *á-x^wa-pš^ə-ra* "to look at" のアオリスト否定形と現在否定形を参照：

- (12) *s-bə-x^wa-m-pš^ə-ø-jt'*
 I (C1)-you (f.) (C2)-*PREV*(at)-NEG-look-(AOR)-Fin.
 " I didn't look at you "

- (13) *s-bə-x^wa-pš^ə-wa-m*
 I (C1)-you (f.) (C2)-*PREV*(at)-look-DYN-NEG

¹²アブハズ語のシュア *ə* に関して詳しくは、柳沢民雄「アブハズ語動詞構造概説」 pp. 7-8. を参照。またアクセントは語形成において移動する。アクセントについても *ibid.* pp. 9-10. を参照。

" I don't look at you "

他動詞も同様に、アオリスト等の時制における否定マーカーは語根前に置かれ、その前にコラム 3 の人称接頭辞が置かれる。上で挙げた他動詞 a-ná-ca-ra "to drive thither" のアオリスト否定形を参照：

- (14) j-ná-lə-m-ce-jt' (<j-ná-lə-m-ca-ø-jt')
 it / them (C1)-PREV(thither)-she (C3)-NEG-drive-(AOR)-Fin.
 " she didn't drive it / them thither "

3. 動詞の非定形

上述したようにアブハズ語の疑問文は、非定形語幹から形成される。この非定形語幹のテンス・アスペクトと法の形は以下になる。例えば、コラム 1 に関係詞を表す接頭辞 j(ə)- をもつ状態動詞 a-góla-ra " to stand " の形：

状態動態

	肯定形	否定形
現在	j-gólo-w (<j-góla-w) Rel. (C1)-be standing-Non.Fin. "one who is standing"	j-góla-m Rel.-be standing-NEG "one who is not standing"
過去	j-góla-z Rel.-be standing-Past. Non. Fin. "one who was standing"	j-góla-mə-z Rel.-be standing-NEG-Past. Non. Fin. "one who was not standing"

コラム 1 に関係詞 j(ə)- をもつ動態動詞 a-y^w-rá " to write " の形：

	肯定形	否定形
動態動詞クラス 1		
現在	jə-l-y ^w -wa Rel. (C1)-she (C3)-write-DYN "that which she writes"	jə-l-m-y ^w -wa Rel.-she-NEG-write-DYN "that which she doesn't write"
アオリスト	jə-l-y ^w ə-ø Rel.-she-write-(AOR) "that which she wrote"	jə-l-m-y ^w ə-ø Rel.-she-NEG-write-(AOR) "that which didn't write"
未来 1	jə-l-y ^w -ra / -rə Rel.-she-write-Fut.1.Non.Fin. "that which she will write in that case"	jə-l-m-y ^w -ra / -rə Rel.-she-NEG-write-Fut.1.Non.Fin. "that which she won't write in that case"
未来 2	jə-l-y ^w ə-š ^ə a Rel.-she-write-Fut.2.Non.Fin. "that which she may probably write"	jə-l-m-y ^w ə-š ^ə a Rel.-she-NEG-write-Fut.2.Non.Fin. "that which she may not probably write"
完了	jə-lə-y ^w -x ^o -w (<jə-lə-y ^w -x ^o a-w) Rel.-she-write-Pefect-Non.Fin. "that she has written"	jə-l-mə-y ^w -x ^o -w (<jə-l-mə-y ^w -x ^o a-w) Rel.-she-NEG-write-Pefect-Non.Fin. "that she has not written"

or jǎ-lə-yʷ-x̃a(c) jǎ-l-mə-yʷ-x̃a(c)

動態動詞クラス 2

未完了	jǎ-l-yʷ-wa-z Rel.-she-write-DYN-Class 2. "that which she was writing"	jǎ-l-mə-yʷ-wa-z Rel.-she-NEG-write-DYN-Class 2. "that which she was not writing"
不定過去	jǎ-l-yʷə-ø-z Rel.-she-write-AOR-Class 2. "that which she wrote and ..."	jǎ-l-mə-yʷə-ø-z Rel.-she-NEG-write-AOR-Class 2. "that which she didn't write and ..."
条件法 1	jǎ-l-yʷ-rə-z Rel.-she-write-Cond 1.-Class 2. "that which she would write in that case"	jǎ-l-mə-yʷ-rə-z Rel.-she-NEG-write-Cond 1.-Class 2. "that which she would not write in that case"
条件法 2	jǎ-l-yʷə-š̌a-z Rel.-she-write-Cond 2.-Class 2. "that which she might write"	jǎ-l-mə-yʷə-š̌a-z Rel.-she-NEG-write-Cond 2.-Class 2. "that which she might not write"
過去完了	jǎ-lə-yʷ-x̃a-z Rel.-she-write-Perf.-Class 2. "that she had written"	jǎ-l-mə-yʷ-x̃a-z Rel.-she-NEG-write-Perf.-Class 2. "that she had not written"

ここで動態動詞を二つのクラス 1 とクラス 2 に分けているが、これは疑問文の所で触れるように形態法上の違いが認められるためである。上の例から分かるように動態動詞クラス 2 の語形は全て末尾要素 -z によって語が終わっている（これを以下 Class 2. と称する）。これは、例えば、疑問文の語形成においても変わらず、クラス 2 の時制と法の疑問文は全て末尾にある z の要素の前に疑問の接辞が置かれるのである。

コラム 2, コラム 3 に関係詞を表す接頭辞 z(ə) がある場合も接尾辞要素は上の例と変わることはない。一例としてしばしば見られる、コラム 3 に関係詞を表す接頭辞 z(ə) をもつ現在形の肯定形と否定形は次のようである：

	肯定形	否定形
現在	jǎ-z-yʷ-wa it / them (C1)-Rel. (C3)-write-DYN "one who writes it / them"	jǎ-zə-m-yʷ-wa it / them (C1)-Rel. (C3)-NEG-write-DYN "one who doesn't write it / them"

語根が母音 a で終わっている場合には、直接に接触する動態性マーカー wa との融合の結果として o となる。これは現在形と未完了にのみ生ずる。その他の形は上の例と同じである。例えば、a-ba-rá "to see" のコラム 1 に関係詞を表す接頭辞 j(ə)- をもつ例を参照：

	肯定形	否定形
現在	jǎ-l-bo (< jǎ-l-ba-wa) Rel. (C1)-she (C3)-see-DYN "that which she sees"	jǎ-lə-m-bo (< jǎ-lə-m-ba-wa) Rel. (C1)-she (C3)-NEG-see-DYN "that which she doesn't see"

未完了 jǎ-l-bo-z (<jǎ-l-ba-wa-z)
 Rel.-she-see-DYN-Class 2.
 "that which she was seeing"

jǎ-lə-m-bo-z (<jǎ-lə-m-ba-wa-z)
 Rel.-she-NEG-see-DYN-Class 2.
 "that which she was not seeing"

4. 疑問文の形態

4-1. "who?" 疑問文の形態

「誰が」、「誰を」、「誰に」等の人のクラスの疑問形は、疑問の接尾辞 da を非定形語幹に附加することによって形成される。da を附加する際に、状態動詞の非定形・肯定形と動態動詞の完了形の語幹末にある -w は欠如する。また動態動詞クラス2においては、疑問の接尾辞 da は -z (Class 2) の前に置かれる。人称・クラス接頭辞は、疑問とする人称・クラスの接頭辞に相当する関係詞接頭辞によって表示される。即ち、自動詞の主語（「誰が？」）、あるいは他動詞の目的語（「誰を？」）を疑問とする場合には、コラム1に接頭辞 j(ə)- を置く。他動詞の行為者（「誰が？」）、あるいは間接目的語（「誰に？」）を疑問とする場合には、コラム3あるいはコラム2に接頭辞 z(ə) を置く。次の例を参照：

a) コラム1に接頭辞 j (ə) を置く例：

自動詞の主語（状態動態 a-góla-ra "to stand"）

肯定形
 現在 j-góla-da ?
 Rel.(C1)-be standing-Qu.
 "who is standing ?"
 過去 j-góla-da-z ?
 Rel.-be standing-Qu.-Past
 "who was standing ?"

否定形
 j-góla-m-da ?
 Rel.-be standing-NEG-Qu.
 "who is not standing ?"
 jə-m-góla-da-z ?
 Rel.-NEG-be standing-Qu.-Past
 "who was not standing ?"

自動詞の主語（動態動詞 á-px̃-a-ra "to read"）

肯定形
 現在 j-á-px̃-o-da ? (<j-á-px̃-a-wa-da)
 Rel.(C1)-it (C2)-read-DYN-Qu.
 "who is reading it ?"
 アオリスト j-á-px̃-a-da ? (<j-á-px̃-a-ø-da)
 Rel.-it-read-(AOR)-Qu.
 "who read it ?"
 未来1 j-a-px̃-a-ré-da ?
 Rel.-it-read-Fut.1-Qu.
 "who will read it in that case?"
 完了 j-á-px̃-a-x̃-a-da ?
 Rel.-it-read-Perf.-Qu.
 "who has read it ?"
 未完了 j-á-px̃-o-da-z ? (<j-á-px̃-a-wa-da-z)

否定形
 j-a-mé-px̃-o-da ? (<j-a-mé-px̃-a-wa-da)
 Rel.-it-NEG-read-DYN-Qu.
 "who is not reading it ?"
 j-a-mé-px̃-a-da ? (<j-a-mé-px̃-a-ø-da)
 Rel.-it-NEG-read-(AOR)-Qu.
 "who didn't read it ?"
 j-a-mé-px̃-a-ré-da ?
 Rel.-it-NEG-read-Fut.1-Qu.
 "who won't read it in that case?"
 j-a-mé-px̃-a-ax̃-a-da ?
 Rel.-it-NEG-read-Perf.-Qu.
 "who has not read it ?"
 j-a-mé-px̃-o-da-z ? (<j-a-mé-px̃-a-wa-da-z)

	Rel.-it-read-DYN-Qu.-Class 2. "who was reading it ? "	Rel.-it-NEG-read-DYN-Qu.-Class 2. "who was not reading it ? "
条件法 1	j-a-px̃a-rə-da-z ? Rel.-it-read-Cond.1-Qu.-Class 2. "who would read it in that case ?"	j-a-mə-px̃a-rə-da-z ? Rel.-it-NEG-read-Cond.1-Qu.-Class 2. "who would not read it in that case ?"
過去完了	j-á-px̃a-x̃a-da-z ? Rel.-it-read-Perf.-Qu.-Class 2. "who had read it ?"	j-a-mə-px̃a-ax̃a-da-z ? Rel.-it-NEG-read-Perf.-Qu.-Class 2. "who had not read it ? "

他動詞の目的語（動態動詞 a-dér-ra "to know"）

	肯定形	否定形
現在	jə-l-dər-wa-da ? Rel.(C1)-she (C3)-know-DYN-Qu. "whom does she know ? "	jə-l-zə-m-dər-wa-da ? ¹³ Rel.(C1)-her(C2)-POTEN-NEG-know-DYN-Qu. "whom doesn't she know ? "
アオリスト	jə-l-dər-da ? (< jə-l-dər-ø-da) Rel.(C1)-she (C3)-know-(AOR)-Qu. "whom did she get to know ? "	jə-l-zə-m-dər-da ? (< jə-l-zə-m-dər-ø-da) Rel. (C1)-her (C2)-POTEN-NEG-know-(AOR)-Qu. "whom didn't she get to know ? "
未完了	jə-l-dər-wa-da-z ? Rel.(C1)-she (C3)-know-DYN-Qu.-Class 2. "whom did she know ? "	jə-l-zə-m-dər-wa-da-z ? Rel. (C1)-her (C2)-POTEN-NEG-know-DYN-Qu.-Cl. 2. "whom didn't she know ? "

b) コラム 2 に接頭辞 z (ə) を置く例：

状態動詞の間接補語（á-ma-zaa-ra "to be, to have"）¹⁴

	肯定形	否定形
現在	jə-z-má-da ? it (C1)-Rel. (C2)-be / have-Qu. "who has it ? " "y кого есть то ? "	jə-z-má-m-da ? it (C1)-Rel. (C2)-be / have-NEG-Qu. "who doesn't have it ? " "y кого нет того"
過去	jə-z-má-da-z ? it (C1)-Rel. (C2)-be / have-Qu.-Class 2. "who had it ? " "y кого было то ? "	jə-z-má-m-da-z ? it (C1)-Rel. (C2)-be / have-NEG-Qu.-Class 2. "who didn't have it ? " "y кого не было того"

動態自動詞の間接補語（a-cxáraa-ra "to help"）

肯定形

¹³ a-dér-ra "to know" の否定形は「可能法 Potentialis (= POTEN)」を使う。可能法とは北西カフカース諸語やカルトヴェリ語に見られる文法範疇であり、一般に行為の遂行が随意的に不可能なことを表す。この可能法を用いた文は倒置構造をしており、その動詞は自動詞である。詳しくは、柳沢民雄「アプハズ語動詞構造概説」pp. 95-103. を参照。

¹⁴ á-ma-zaa-ra "to be, to have" は倒置動詞 inersive verbs である。倒置動詞とは形態論的には自動詞であるが、統語・意味論的には他動詞と見なされる、一群の、自動詞と他動詞との中間的な動詞である。これに含まれる動詞には「感覚動詞 verba sentiendi」, 「情緒動詞 verba affectuum」, 「所有動詞 verba habendi」がある。倒置動詞についての詳細は、「アプハズ語動詞構造概説」pp.89-95 を参照。

現在 b-zá-cxraa-wa-da ?
 you (f.)(C1)-Rel. (C2)-help-DYN-Qu.
 "whom do you help ? "

アオリスト b-zá-cxraa-da ? (< b-zá-cxraa-ø-da)
 you (f.)-Rel.-help-(AOR)-Qu.
 "whom did you help ? "

動態他動詞の間接目的語 (á-ta-ra "to give")

肯定形	否定形
現在 j-zə-b-tó-da ? (< j-zə-b-tá-wa-da) it (C1)-Rel.(C2)-you (f.) (C3)-give-DYN-Qu. "to whom do you (f.) give it ? "	jə-z-bə-m-tó-da ? (< jə-zə-bə-m-tá-wa-da) it (C1)-Rel.(C2)-you (f.) (C3)-NEG-give-DYN-Qu. "to whom don't you (f.) give it ? "
アオリスト j-zə-b-tá-da ? (< j-zə-b-tá-ø-da) it (C1)-Rel.(C2)-you (f.) (C3)-give-(AOR)-Qu. "to whom did you (f.) give it ? "	jə-z-bə-m-tá-da ? (< jə-z-bə-m-tá-ø-da) it (C1)-Rel.(C2)-you (f.) (C3)-NEG-give-(AOR)-Qu. "to whom didn't you (f.) give it ? "

客体相 objective version (OV) に現れるコラム 2 の例 (a-y^w-rá "to write") ¹⁵

肯定形	否定形
アオリスト jə-z-zá-b-y ^w ə-da ? it (C1)-Rel. (C2)-OV-you (f.)(C3)-write-Qu. "to whom did you (f.) write it ? "	jə-z-zá-bə-m-y ^w ə-da ? it-Rel.-OV-you (f.)-write-Qu. "to whom didn't you (f.) write it ? "

接頭辞 c "with" とともに現れるコラム 2 の例 (á-təj-ra "to sell")

肯定形

現在 jə-z-cs +b-təj-wa-da ?
 it (C1)-Rel. (C2)+with-you (f.) (C3)-sell-DYN-Qu.
 "with whom are you (F) selling it ? "

c) コラム 3 に接頭辞 z (ə) を置く例 :

動態他動詞の行為者 (á-q'a-c'a-ra "to do", "to make")

肯定形	否定形
現在 j-q'a-z-c'ó-da ? (< j-q'a-z-c'á-wa-da) it (C1)-PREV-Rel. (C3)-do-DYN-Qu. "who is doing it ? "	j-q'a-zə-m-c'ó-da ? (< j-q'a-zə-m-c'á-wa-da) it (C1)-PREV-Rel. (C3)-NEG-do-DYN-Qu. "who is not doing it ? "
アオリスト j-q'a-z-c'á-da ? (< j-q'a-z-c'á-ø-da) it (C1)-PREV-Rel. (C3)-do-(AOR)-Qu. "who did it ? "	j-q'a-zə-m-c'á-da ? (< j-q'a-zə-m-c'á-ø-da) it (C1)-PREV-Rel. (C3)-NEG-do-(AOR)-Qu. "who didn't do it ? "

¹⁵ここで使われている客体相 objective version は、「書く」という動詞の間接目的語を表現するために用いられる。この客体相マーカーとそれに前置する人称・クラスを表す項によって、「誰々に(書く)」が表現される(以下の例文(20),(21)も参照)。多くの動詞の与格的な機能はこの客体相によって表現される(例外は、この客体相を使わない「与える」という意味の動詞 á-ta-ra である)。客体相に関しては、柳沢民雄「アプハズ語動詞構造概説」pp.53-59. を参照。

未完了	j-q'a-z-c'ó-da-z ? (<j-q'a-z-c'á-wa-da-z) j-q'a-zə-m-c'ó-da-z ? (<j-q'a-zə-m-c'á-wa-da-z)	it-PREV-Rel.-do-DYN-Qu.-Class 2.	it -PREV-Rel.-NEG-do-DYN-Qu.-Class 2.
	"who was doing it ? "		"who was not doing it ? "
過去完了	j-q'a-z-c'a-x'á-da-z ?	j-q'a-zə-m-c'a-x'á-da-z ?	
	it-PREV-Rel.-do-Perf.-Qu.-Class 2.	it-PREV-Rel.-NEG-do-Perf.-Qu.-Class 2.	
	"who has done it ? "	"who has not done it ? "	
文例 :	Jə-w-zá-q'a-z-c'o-da (<Jə-w-zá-q'a-z-c'a-wa-da)	wará	á-fat'w ?
	it (C1)-you (m.) (C2)-OV-PREV-Rel. (C3)-make-DYN-Qu.	you (m.)	the-food
	"Who is making a meal for your sake."		

使役形における行為者 (á-təj-ra "to sell")

肯定形

アオリスト jə-s-zá-r-təj-da ? (<jə-s-zá-r-təj-ø-da)
it (C1)-me (C2)-Rel. (C3)-CAUS-sell-(AOR)-Qu.
"who made me sell it ? "

4-1-1. 独立代名詞の疑問文

アブハズ語は、上で記述した疑問の接尾辞を動詞複合体内に含める疑問形の他に、疑問の独立代名詞 *dárban* "who" を用いた疑問文も可能である。この場合、動詞形は非定形語幹を用い、動詞接頭辞は相応する関係詞を表す接頭辞 *j(ə)* あるいは *z(ə)* を用いる。例えば、状態動詞 *a-t'wá-rá* "to sit" の現在形と過去形を参照（括弧内は動詞複合形に疑問の接頭辞がある形）：

	肯定形	
現在	<i>dárban aráq'a j-t'wó-w ? (<j-t'wá-w)</i> (cf. <i>aráq'a j-t'wá-da ?</i>)	
	who here Rel.-sit-Non.Fin.	
	" who is sitting here ? "	
過去	<i>dárban aráq'a j-t'wá-z ?</i> (cf. <i>aráq'a j-t'wá-da-z ?</i>)	
	who here Rel.-sit-Past. Non. Fin.	
	" who was sitting here ? "	

また他動詞 *a-p-q'a-rá* "to fell" を用いた例を参照：

	肯定形	
アオリスト	<i>dárban aráj á-c'la ø-pé-z-q'a-ø ?</i> (cf. <i>aráj á-c'la ø-pé-z-q'a-da ?</i>)	
	who this the-tree (it) (C1)-PREV-Rel. (C3)-fell-(AOR)	
	"who felled this tree ? "	

さらに "who am I ? ", "who are you ? " 等の表現は次のようである：

sará	sə-zəwsto-w ? / sə-zəwsta-da ?	"who am I ? "
wará	wə-zəwsto-w ? / wə-zəwsta-da ?	"who are you (m.) ? "

bará	bə-zəwsto-w ? / bə-zəwsta-da ?	"who are you (f.) ?"
lará	də-zəwsto-w ? / də-zəwsta-da ?	"who is she ?"
jará	də-zəwsto-w ? / də-zəwsta-da ?	"who is he ?"
hará	ha-zəwsto-w ? / ha-zəwsta-da ?	"who are we ?"
šwará	šwə-zəwsto-w ? / šwə-zəwsta-da ?	"who are you (pl.) ?"
dará	ø-zəwsto-w ? / ø-zəwsta-da ?	"who are they ?"

また疑問代名詞を用いて次のように表すこともできる：

sará	s-zak'wəze-j ?
I	I-who-Qu.
" who am I ? "	

4-1-2. "whose ?" の疑問文の形態

「誰の whose ?」の意味の疑問文は、状態動詞 a-t'wə-zaa-ra "to belong to" の非定形と人を表す疑問の接尾辞 -da によってつくることができる。この動詞 a-t'wə-zaa-ra は自動詞であり、動詞は主語としてのコラム 1 と間接補語としてのコラム 2 を要求し、平叙文は次のようである：

- (15) Aráj a-šwq'wə sará jə-s-t'wə-wp'.
 this the-book I it (C1)-me (C2)-belong to-STAT.PRES.
 " This book belongs to me. (This book is mine.) "

従って、「誰の」という疑問文は、コラム 2 に関係詞接頭辞 -z(ə)- を置き、接尾辞 -da を用いた上述の疑問文と同じ構造になる。次の例を参照（現在形では -da の前で非定形の語幹末の -w が欠如することに注意。4-1参照）：

- (16) Aráj a-šwq'wə ø-z-t'wə-da ?
 this the-book (it)-Rel.-belong to-Qu.
 lit. " To whom this book belongs ? " (= " Whose book is this ? ")

- (17) b-zə-px'ó a-šwq'wə ø-z-t'wə-da ?
 you (f.)-Rel.-read-DYN.Non.Fin. the-book (it)-Rel.-belong to-Qu.
 lit. " To whom does the book, which you are reading, belong ? "
 (= " Whose book are you reading ? ")

4-2. "what ?" 疑問文の形態

「何が」、「何を」等の人以外のクラスを表す疑問形は、非定形語幹によって形成される。動態動詞クラス 1 と状態動態現在形は、この非定形語幹に疑問の接尾辞 -j あるいは -zej を附加することによって形成される。なお我々のインフォーマントに拠れば、接尾辞が附加する際に、完了形と状態動態現在形の末尾の -w は消失する場合があるが、その場合にその直前にある母音 a は o に替わる。他方、動態動詞クラス 2 と状態動態過去形は、疑問の接尾辞を附加しない非定形から形成される。人称・クラス接頭辞は、上述した「誰が」等の疑問文と同様に、疑問とする人称・クラス接頭辞に相当する

関係詞接頭辞 j(ə) (C1) あるいは z(ə) (C2, C3) によって標示される。以下の例を参照：

a) コラム 1 に接頭辞 j(ə) を置く例：

1 項自動詞の主語（状態動態 a-góla-ra "to stand"）

	肯定形	否定形
現在	j-gólo-j ? (< *j-góla-wə-j) Rel.(C1)-be standing-Non.Fin.-Qu. "what is standing ?"	j-góla-mə-j ? Rel.-be standing-NEG-Qu. "what is not standing ?"
過去	j-góla-z ? Rel.-be standing-Past.Non.Fin. "what was standing ?"	j-góla-mə-z ? Rel.-be standing-NEG-Past.Non.Fin. "what was not standing ?"

2 項自動詞の主語（状態動態 á-ma-zaa-ra "to be, to have"）

	肯定形	否定形
現在	j-bó-mo-w-zej (< j-bó-ma-w-zej) Rel. (C1)-you (f.) (C2)-have-Non.Fin.-Qu. "what do you have ? "	j-bó-ma-m-zej Rel.-you (f.)-have-NEG-Qu. "what don't you have ? "
過去	j-bó-ma-z ? / j-bó-ma-zə-z ? Rel.-you (f.)-have-Past.Non.Fin. / Rel.-you (f.)-have-Qu.-Past.Non.Fin. "what did you have ? "	j-bó-ma-m-zə-z ? Rel.-you (f.)-have-NEG-Qu.-Past.Non.Fin. "what didn't you have ? "

b) コラム 2 に接頭辞 z(ə) を置く例：

動態自動詞の間接目的語（ á-px̃-a-ra "to read"）

動態動詞クラス 1

	肯定形	否定形
現在	d-zə-px̃-ó-j / -zej ? (< d-zə-px̃-á-wa-j / -zej) (s)he (C1)-Rel. (C2)-read-DYN-Qu. " what does (s)he read ? "	də-z-mə-px̃-o-j / -zej ? (s)he (C1)-Rel. (C2)-NEG-read-DYN-Qu. " what doesn't (s)he read ? "
アオリスト	d-zə-px̃-é-j / d-zə-px̃-á-zej ? (< d-zə-px̃-á-ø-j / -zej) (s)he-Rel.-read-(AOR)-Qu. " what did (s)he read ? "	də-z-mə-px̃-e-j / -px̃-a-zej ? (s)he -Rel.-NEG-read-(AOR)-Qu. " what didn't (s)he read ? "
未来 2	d-zə-px̃-á-š̌-e-j / -š̌-a-zej ? (s)he-Rel.-read-Fut. 2-Qu. " what may (s)he read ? "	də-z-mə-px̃-a-š̌-e-j / -š̌-a-zej ? (s)he-Rel.-NEG-read-Fut. 2-Qu. " what may not (s)he read ? "
完了	d-zə-px̃-a-x̃-ó-j / -zej ? (< d-zə-px̃-a-x̃-á-w-j / -zej)	də-z-mə-px̃-a-x̃-o-j ?

(s)he-Rel.-read-Perf.-Qu.
" what has (s)he read ? "

(s)he -Rel.-NEG-read-Perf.-Qu.
" what hasn't (s)he read ? "

動態動詞クラス 2

肯定形
未完了 d-zə-px̃-ó-z ? (< d-zə-px̃-á-wa-z)
(s)he-Rel.-read-DYN-Class 2.
" what was (s)he reading ? "

否定形
də-z-mə-px̃-o-z ?
(s)he -Rel.-NEG-read-DYN-Class 2.
" what wasn't (s)he reading ? "

動態他動詞の直接目的語 (á-q'a-c'a-ra "to do, to make")

動態動詞クラス 1

肯定形
現在 já-q'a-l-c'o-j ? (< já-q'a-l-c'a-wa-j)
Rel. (C1)-PREV-she (C3)-do-DYN-Qu.
" what does she do ? "

否定形
já-q'a-lə-m-c'o-j ? (< já-q'a-lə-m-c'a-o-j)
Rel.-PREV-she-NEG-do-DYN-Qu.
" what doesn't she do ? "

アオリスト já-q'a-l-c'e-j ? (< já-q'a-l-c'a-ø-j)
or já-q'a-l-c'a-zej ?
Rel.-PREV-she-do-(AOR)-Qu.
" what did she do ? "

já-q'a-lə-m-c'e-j ? (< já-q'a-lə-m-c'a-ø-j)
já-q'a-lə-m-c'a-zej ?
Rel.-PREV-she-NEG-do-(AOR)-Qu.
" what didn't she do ? "

動態動詞クラス 2

肯定形
未完了 já-q'a-l-c'o-z ? (< já-q'a-l-c'a-wa-z)
Rel.-PREV-she-do-DYN-Class.2.
" what was she doing ? "

否定形
já-q'a-lə-m-c'o-z ? (< já-q'a-lə-m-c'a-wa-z)
Rel.-PREV-she-NEG-do-DYN-Class.2.
" what wasn't she doing ? "

上記の動詞複合体内に接尾辞を附加する方法の他に、独立疑問代名詞 járban "what ?" を用いる方法もアプハズ語にはある。これは4-1で述べた dárban "who?" の場合と同様に、動詞は非定形を用いる。例えば、状態動詞 a-góla-ra "to stand" の現在形と過去形、及び他動詞 á-q'a-c'a-ra "to do, to make" のアオリスト形を参照（括弧内は動詞複合体内に疑問の接頭辞がある形）：

	肯定形	
現在	járban j-gólo-w ? (< j-góla-w) what Rel. (C1)-be standing-Non.Fin. " what is standing ? "	(cf. j-gólo-j ?)
過去	járban j-góla-z ? what Rel.-be standing-Past.Non.Fin. " what was standing ? "	(cf. j-góla-z ?)
アオリスト	járban já-q'a-l-c'a-ø ? what Rel. (C1)-PREV-she (C3)-do-(AOR)	(cf. já-q'a-l-c'e-j ?)

" what did she do ? "

さらに "what is this ?" の表現は疑問代名詞を用いて次のように表現できる :

arəj zak'wə-j ? / zak'ə-z(e)j ?
this what-Qu.

4-3. "yes-no" 疑問文の形態

アプハズ語の "yes-no" 疑問文は、肯定疑問と否定疑問ではその形成に用いられる接尾辞が異なる。肯定疑問文は、非定形語幹の末尾に疑問の接尾辞 -ma (稀に -w も) を附加してつくられる。この疑問文のイントネーションは動詞形の部分において下降調を特徴とする。例えば, Ašwq'wə bəmwma ? "Do you have the book ?" は、以下のようなイントネーションを特徴とする。

Ašwq'wə bəmwma ?

動態動詞クラス 2 においても -z (Class 2) の後ろに -ma を附加する (4-1 の -da- との違いを参照)。これに対して、否定疑問文は、非定形語幹の末尾に接尾辞 -j あるいは -za-j を附加してつくられる。否定の疑問文のイントネーションは、肯定疑問文ほど急激な下降調を特徴をしていないようである。例えば, Ašwq'wə bəma3aməj ? "Don't you have the book ?" のイントネーションは以下のようになり、肯定疑問文ほど急激な声の下降はみられない。

Ašwq'wə bəma3aməj ?

動態動詞の現在形と動態動詞クラス 2 (状態動詞の過去もまた) の形では -j は省略することが可能である。動詞の人称・クラス接頭辞は各人称・クラスに相応する接頭辞をとる。以下の例を参照 :

状態動態 (á-ma-zaa-ra "to be, to have")

	肯定形	否定形
現在	j-bə-mo-w-ma ? (< j-bə-ma-w-ma) it-you (f.)-have-Non.Fin.-Qu. " do you have it ? "	j-bə-ma-za-mə-j ? it-you (f.)-have-EMPH-NEG-Qu. " don't you have it ? "
過去	j-bə-ma-z-ma ? it-you (f.)-have-Past.Non.Fin.-Qu. " did you have it ? "	j-bə-ma-za-m-z ? it-you (f.)-have-EMPH-NEG-Past.Non.Fin. " didn't you have it ? "

2 項動態動詞 (a-dər-ra "to know")

	肯定形	否定形
動態動詞クラス 1		
現在	sə-l-dər-wa-ma ? me (C1)-she (C3)-know-DYN-Qu. " does she know me ? "	sə-l-zə-m-dər-3o ? (< sə-l-zə-m-dər-3a-wa) I (C1)-her (C2)-POTEN-NEG-know-EMPH-DYN " doesn't she know me ? "

アオリスト sə-l-dér-ø-ma ? sə-l-zə-m-dər-ø-3e-j ? (< sə-l-zə-m-dər-ø-3a-j)
 me (C1)-she (C3)-know-(AOR)-Qu. I (C1)-her (C2)-POTEN-NEG-know-(AOR)-EMPH-Qu.
 " did she get to know me ? " " didn't she get to know me ? "

未来 1 sə-l-dér-rə-w ? ¹⁶
 me-she-know-Fut.1-Qu.
 " will she know me in that case ? "

動態動詞クラス 2

未完了 sə-l-dér-wa-z-ma ? sə-l-zə-m-dər-3o-z ? (< sə-l-zə-m-dər-3a-wa-z)
 me-she-know-DYN-Class 2.-Qu. I-her-POTEN-NEG-know-EMPH-DYN-Class 2.
 " did she know me ? " " didn't she know me ? "

3 項他動詞 á-ta-ra "to give" を例にして "yes-no" 疑問文の文例を挙げる（時制はアオリスト）：

(18) J-sá-l-ta-ø-ma a-šwq'wá ?
 it (C1)-to me (C2)-she (C3)-give-(AOR)-Qu. the-book
 " Did she give me the book ? "

(19) J-sá-lə-m-ta-ø-3e-j (< J-sá-lə-m-ta-ø-3a-j) a-šwq'wá ?
 it-to me-she-NEG-give-(AOR)-EMPH-Qu. the-book
 " Didn't she give me the book ? "

また 2 項他動詞 a-yw-rá "to write" に客体相 objective version を含んだ "yes-no" 疑問文の文例は次のようである：

(20) Jə-s-zá-b-yw-ø-ma a-šwq'wá ?
 it (C1)-me (C2)-OV-you (f.)(C3)-write-(AOR)-Qu. the-letter
 " Did you (f.) write the letter to me ? "

(21) Jə-s-zá-b-mə-yw-ø-3e-j a-šwq'wá ?
 it-me-OV-you (f.)-write-(AOR)-EMPH-Qu. the-letter
 " Didn't you (f.) write the letter to me ? "

4-4. "where ?", "when ?", "why ?", "how ?", "whence ?" の疑問文の形態

「どこに(へ)」、「何時」、「何故」、「如何に」、「どこから」等の副詞の意味を表す疑問文は、それぞれの疑問の接頭辞を動詞複合体のコラム 1 の直後に挿入し、動詞語幹を非定形にすることにより形成される。接尾辞は疑問の副詞の接頭辞によって若干の変異をみせるが、それも接尾辞 -j を附加するかしないかの変異であり、概ねアオリストと未来形では -j を附加することが好まれるよ

¹⁶インフォーマントに拠れば、この未来 1 の否定形は現在時制の否定形と同形である。

うである。動詞の人称・クラス接頭辞は平叙文の配置に従う。

4-4-1. "where?" の疑問文

「どこで・に(場所)」あるいは「どこへ(方向)」の疑問の接頭辞は、どちらも同じく -aba- であり、コラム 1 の直後に置かれる。動詞語幹は非定形語幹を用いるが、動態動詞クラス 1 は完了形を除いて、接尾辞に -j を附加することもまた可能である。インフォーマントに拠れば、アオリストと未来形ではこの接尾辞 -j を附加することが好まれるようである。動態動詞クラス 2 では非定形の他に、接尾辞 -z (Class 2) の直前に -za- を挿入するヴァリエントも可能という。状態動詞は非定形のままである。

状態動態 (a-gəla-ra "to stand")

	肯定形	否定形
現在	d-abá-gəlo-w ? (< d-abá-gəla-w) (s)he (C1)-where-stand-Non.Fin. " where is (s)he standing ? "	d-abá-gəla-m (s)he-where-stand-NEG " where isn't (s)he standing ? "
過去	d-abá-gəla-z ? (s)he-where-stand-Past.Non.Fin. " where was (s)he standing ? "	d-abá-gəla-mə-z ? (s)he-where-stand-NEG-Past.Non.Fin. " where wasn't (s)he standing ? "

なお疑問の接頭辞 -aba- がコラム 1 とコラム 2 の間に置かれることは、次の 2 項状態動詞 á-ma-zaa-ra "to be, to have" の過去の例から分かる：

- (22) j-abá-bə-ma-z a-šwq'wə ?
it (C1)-where-you (f.)(C2)-have-Past.Non.Fin. the-book
" where did you have the book ? " lit. " где у тебя была книга ? "

1 項動態動詞 (a-ca-rá "to go")

	肯定形	否定形
現在	b-abá-co-(j) ? (< b-abá-ca-wa-(j)) you (f.) (C1)-where-go-DYN-(Qu.) " where do you (f.) go ? "	b-abá-m-co-(j) ? (< -ca-wa-(j)) you (f.)-where-NEG-go-DYN-(Qu.) " where don't you (f.) go ? "
アオリスト or	b-abá-ce-j ? (< b-abá-ca-ø-j) b-abá-ca-ø ? you (f.)-where-go-(AOR)-Qu. " where did you (f.) go ? "	b-abá-m-ca-ø ? you (f.)-where-NEG-go-(AOR) " where didn't you (f.) go ? "
完了	b-abá-ca-x̃o-w ? (< b-abá-ca-x̃a-w)	

you (f.)-where-go-Perfect-Non.Fin.
" where have you (f.) gone ? "

2 項動態他動詞 (á-təj-ra "to sell")

肯定形

現在 j-abá-l-təj-we-j ? (< j-abá-l-təj-wa-j)
it (C1)-where-she (C3)-sell-DYN-Qu.
" where does she sell it ? "

アオリスト j-abá-l-təj-ø ? (< *j-abá-l-təj-ø-j)
it-where-she-sell-(AOR)-(Qu.)
" where did she sell it ? "

動態動詞クラス 2

未完了 j-abá-l-təj-wa-z ?
it-where-she-sell-DYN-Class 2.
" where was she selling it ? "

2 項他動詞 a-w-rá " to do " と a-h^wa-rá "to say" を用いた疑問文の例を参照 :

(23) W-an a-wés ø-abá-l-w-e-j ? (< *ø-abá-l-w-wa-j)
your-mother the-work (it)-where-she-work-DYN-Qu
" Where is your mother working ? "

(24) A-c'ára-k^wa á-š^wa ø-abá-r-h^wo ? (< ø-abá-r-h^wa-wa)
the-bird-PL the-song it-where-they-say-DYN
" Where are the birds singing a song ? "

4-4-2. "when ?" の疑問文の形態

「いつ」の疑問文は、疑問の接頭辞 -anba- を動詞複合体のコラム 1 の直後に置き、動態動詞クラス 1 では非定形あるいは非定形 + j (アオリストと未来形では後者の形が好ましい) によって形成される。動態動詞クラス 2 と状態動詞に関しては、上で述べた "where ?" の疑問文と同じ語幹をとる。即ち、動態動詞クラス 2 では非定形の他に、接尾辞 -z (Class 2) の直前に -zə- を挿入するヴァリエーションも可能であり、状態動詞は非定形のままである。

状態動詞 (á-q'a-zaa-ra "to be")

肯定形

現在 j-anbá-q'o-w ? (< j-anbá-q'a-w)
it (C1)-when-be-Non.Fin.
" when is it ? "

過去 j-anbá-q'a-z

it- when-be-Past.Non.Fin.

" when was it ? "

1 項動態動詞 (a-ca-rá "to go")

肯定形

動態動詞クラス 1

現在 b-anbá-co-(j) ? (< b-anbá-ca-wa-(j))

you (f.)(C1)-when-go-DYN-(Qu.)

" when are you going ? "

アオリスト b-anbá-ca-ø ? / b-anbá-ce-j ? (< b-anbá-ca-ø-j)

you (f.)-when-go-(AOR)-Qu.

" when did you go ? "

完了 b-anbá-ca-x̃o-w ? (< b-anbá-ca-x̃a-w) / b-anbá-ca-x̃e-j (< *b-anbá-ca-x̃a-w-j)

you (f.)-when-go-Perfect-Non.Fin.-(Qu.)

" when did you go ? "

動態動詞クラス 2

未完了 b-anbá-co-z ? (< b-anbá-ca-wa-z) / b-anbá-co-zə-z ? (< b-anbá-ca-wa-zə-z)

you (f.)-when-go-DYN-(?)-Class 2.

" when were you going ? "

なお疑問の接頭辞 -anba- がコラム 1 の直後に置かれることは、次の 2 項他動詞 á-təj-ra "to sell" と 2 項自動詞 á-ma-zaa-ra "to have" の例から分かる :

(25) j-anbá-l-təj-wa-z ?

it (C1)-when-she (C3)-sell-DYN-Class 2.

" when was she selling it ? "

(26) j-anbá-bə-ma-z

it (C1)-when-you (f.)(C2)-have-Past.Non.Fin.

" when did you have the book ? " lit. " когда у тебя была книга ? "

a-šwq'wá ?

the-book

4-4-3. "why ?" の疑問文の形態

「何故」の疑問文は、疑問の接頭辞 z(ə)- を動詞複合体のコラム 1 の人称・クラス接頭辞の直後に置いてつくられる。この疑問形の語幹は、非定形語幹であるが、接尾辞に関しては前述した "what ?" の疑問形とほぼ同じことが言える。即ち、動態動詞クラス 1 と状態動態現在形は、この非定形語幹に疑問の接尾辞 -j あるいは -zej を附加することによって形成される。我々のインフォーマントに拠れば、接尾辞 -j が附加する際に、完了形と状態動態現在形の末尾の -w は消失するが、その直前にある

母音 a は o に替わる（なお完了形には接尾辞 -j のヴァリエントしかない）。他方、動態動詞クラス 2 と状態動態過去形には、接尾辞を附加しない。

状態動態 (a-gála-ra "to stand")

	肯定形	否定形
現在	bə-z-gálo-j ? (< bə-z-gála-w-j) you (f.) (C1)-why-be standing-DYN-Qu. " why are you (f.) standing ? "	bə-z-gála-mə-j ? you (f.)-why-be standing-NEG-Qu. " why aren't you (f.) standing ? "
過去	bə-z-gála-z ? you (f.)-why-be standing-Past.Non.Fin. " why were you (f.) standing ? "	bə-z-gála-mə-z ? you (f.)-why-be standing-NEG-Past.Non.Fin. " why weren't you (f.) standing ? "

動態自動詞 (á-px̃-a-ra "to read")

	肯定形	否定形
現在	d-z-á-px̃-o-j ? (< d-z-á-px̃-a-wa-j) (s)he (C1)-why-it (C2)-read-DYN-Qu. " why does (s)he read it ? "	d-z-a-má-px̃-o-j ? (< d-z-a-má-px̃-a-wa-j) (s)he-why-it-NEG-read-DYN-Qu. " why doesn't (s)he read it ? "
アオリスト	d-z-á-px̃-e-ø-j ? (< d-z-á-px̃-a-ø-j) (s)he (C1)-why-it (C2)-read-(AOR)-Qu. " why did (s)he read it ? "	d-z-a-má-px̃-e-ø-j ? (< d-z-a-má-px̃-a-ø-j) (s)he-why-it-NEG-read-(AOR)-Qu. " why didn't (s)he read it ? "

動態他動詞 (á-q'a-c'a-ra "to do, to make")

	肯定形	否定形
現在	j-zá-q'a-l-c'o-j ? (< j-zá-q'a-l-c'a-wa-j) it (C1)-why-PREV-she (C3)-do-DYN-Qu. " why does she do it ? "	j-zá-q'a-lə-m-c'o-j ? (< j-zá-q'a-lə-m-c'a-wa-j) it-why-PREV-she-NEG-do-DYN-Qu. " why doesn't she do it ? "
アオリスト	j-zá-q'a-l-c'e-j ? (< j-zá-q'a-l-c'a-ø-j) it-why-PREV-she-do-(AOR)-Qu. " why did she do it ? "	j-zá-q'a-lə-m-c'e-j ? (< j-zá-q'a-lə-m-c'a-ø-j) it-why-PREV-she-NEG-do-(AOR)-Qu. " why didn't she do it ? "

接尾辞 -j と -zej は交替可能である。状態動詞 á-ma-zaa-ra "to have" と動態動詞 áá-j-ra "to come" の現在形とアオリスト形の疑問文を参照：

- (27) Jə-z-bá-mo-j (<*Jə-z-bá-ma-w-j) / Jə-z-bá-mo-w-zej (<*Jə-z-bá-ma-w-zej) a-šwq'wá ?
it (C1)-why-you (f.)(C2)-have-Non.Fin.-Qu. the-book
" why do you (f.) have the book ? "

- (28) d-z-aá-j ? (< *d-z-aá-j-ø-j) / d-z-aá-j-zej ? (< d-z-aá-j-ø-zej)
 (s)he-why-PREV-come-(AOR)-(Qu.)
 " why did (s)he come here ? "
- (29) Məwrát jax˘á d-zá-m-aa-j ? / d-zá-m-aa-j-zej ?
 Murat today he-why-NEG-PREV-come-(AOR)-(Qu.)
 " Why didn't Murat come here today ? "

4-4-4. " how ? " の疑問文の形態

「どの様に」を表す疑問文は次の方法によって形成される：疑問の接頭辞 -s˘pa- を動詞複合体のコラム 1 の接頭辞の直後に置き，動態動詞クラス 1 では「非定形 + j」を，また動態動詞クラス 2 と状態動詞では非定形を動詞語幹とする。これは4-4-2 の所で述べた “when ? “ の疑問文の形成と類似している。おそらく “ how ? ” の疑問文でも動態動詞クラス 1 ではヴァリエーションとして接尾辞 -j のない形も可能かと思われるが，今回は調査ができなかった。インフォーマントは接頭辞 -j のある形を使っている（動態動詞現在形を参照）。

状態動態 (a-gəla-ra "to stand")

	肯定形	否定形
現在	də-s˘pá-gəlo-w ? (< də-s˘pá-gəla-w) (s)he (C1)-how-be standing-Non.Fin. “ how is (s)he standing ? “	də-s˘pá-gəla-m ? (s)he-how-be standing-NEG “ how isn't (s)he standing ? “
過去	də-s˘pá-gəla-z ? (s)he-how-be standing-Past.Non.Fin. “ how was (s)he standing ? “	də-s˘pá-gəla-mə-z ? (s)he-how-be standing-NEG-Past.Non.Fin. “ how wasn't (s)he standing ? “

2 項動態他動詞 (á-təj-ra "to sell")

	肯定形	否定形
動態動詞クラス 1		
現在	jə-s˘pá-l-təj-we-j ? (< jə-s˘pá-l-təj-wa-j) it (C1)-how-she (C3)-sell-DYN-Qu. “ how does she sell it ? “	jə-s˘pá-lə-m-təj-we-j ? (< jə-s˘pá-lə-m-təj-wa-j) it-how-she-NEG-sell-DYN-Qu. “ how doesn't she sell it ? “
アオリスト	jə-s˘pá-l-təj ? (< *jə-s˘pá-l-təj-ø-j) it-how-she-sell-(AOR)-(Qu.) “ how did she sell it ? “	ə-s˘pá-lə-m-təj ? (< * jə-s˘pá-lə-m-təj-ø-j) it-how-she-NEG-sell-(AOR)-(Qu.) “ how didn't she sell it ? “
動態動詞クラス 2		
未完了	jə-s˘pá-l-təj-wa-z ? it-how-she-sell-DYN-Class 2.	jə-s˘pá-lə-m-təj-wa-z ? it-how-she-NEG-sell-DYN-Class 2.

“ how was she selling it ? “

“ how wasn't she selling it ? “

3 項動態他動詞 (á-ta-ra "to give")

肯定形

現在 A-š^wq'wə ø-š^əpá-lə-s-to-j ? (< jə-š^əpá-lə-s-ta-wa-j)
the-book (it)(C1)-how-to her (C2)-I (C3)-give-DYN-Qu.
“ How do I give her the book ? “

アオリスト A-š^wq'wə ø-š^əpá-lə-s-te-j ? (< jə-š^əpá-lə-s-ta-ø-j)
the-book (it)-how-to her-I-give-(AOR)-Qu.
“ How did I give her the book ? “

未完了 A-š^wq'wə ø-š^əpá-lə-s-to-z ? (< jə-š^əpá-lə-s-ta-wa-z)
the-book (it)-how-to her-I-give-DYN-Class 2.
“ How was I giving her the book ? “

過去完了 A-š^wq'wə ø-š^əpá-lə-s-ta-x̃-a-z ? (< jə-š^əpá-lə-s-ta-x̃-a-z)
the-book (it)-how-to her-I-give-Perf.-Class 2.
“ How had I given her the book ? “

主体相 subjective version を用いる動詞 a-x-ga-rá “to spend (the time)” においても疑問の接頭辞 -š^əpa- はコラム 1 の直後に置かれる¹⁷。その動詞（アオリスト形）を用いた平叙文(30)と疑問文(31)を参照：

(30) Á-mš^ə ø-s-xá-z-ge-jt'. (< *jə-s-xá-s-ga-ø-jt')
the-day (it)(C1)-my (POSS)-SV (self)-I (C3)-take-(AOR)-Fin.
“ I spent the day.”

(31) Á-mš^ə ø-š^əpo-w-xá-w-ge-j ? (< *jə-š^əpa-w-xá-w-ga-ø-j)
the-day (it)-how-your (m.)-SV (self)-you (m.)-take-(AOR)-Qu.
“ How did you spend the day ? “

Preverb を有する動詞もまた疑問の接頭辞はコラム 1 の直後に置かれる（例は, á-q'a-c'a-ra "to do, to make"）：

(32) Jə-š^əpá-q'a-b-c'e-j (< Jə-š^əpá-q'a-b-c'a-ø-j) arəj ?
it (C1)-how-PREV-you (f.)(C3)-do-(AOR)-Qu. this
“ How did you (f.) do this ? “

4-4-5. その他の疑問文の形態

¹⁷ 主体相 subjective version については、柳沢民雄「アプハズ語動詞構造概説」 pp. 61-64. を参照。

「どこから whence ?」を表す疑問文は、接頭辞 -aba=nt'wəj- "where=from ?" をコラム 1 の直後に置き、動態動詞クラス 1 の語幹には接尾辞 j を附加する。aa-rá "to come" の現在形とアオリスト形, a-dár-ra "to know" のアオリスト形を参照 :

- (33) d-abá=nt'w-áa-we-j ?
 (s)he-where=from-come-DYN-Qu.
 " where is (s)he coming from ? "
- (34) b-abá=nt'wəj áa-ø-j ?
 you (f.)-where=from come-(AOR)-Qu.
 " where did you (f.) come ? "
- (35) s-abá=ntnt'wəj-l-dárə-ø-j ?
 me (C1)-where=from-she (C3)-know-(AOR)-Qu.
 “ откуда она узнала меня ? ”

インフォーマントに拠れば例 (34) は 2 語に分離され、両方の語形に接尾辞 -j が附加されている。

「幾つ how many ?」, 「どの程度 how much ?」を表す疑問文は、疑問詞 š'aq'á あるいは zaq'a をコラム 1 の直後に置く。疑問詞が修飾する名詞の数は、「名詞 + š'aq'á」の語順のとき名詞の複数形が¹⁸, 「š'aq'á + 名詞」の場合には単数形が用いられる傾向がある。動詞形は、疑問詞が修飾する名詞が人のクラスの場合には接尾辞 -da を、人以外のクラスの場合には接尾辞 -j (-zej) をとる。動詞の語幹の形は非定形であり、接尾辞の附加に関しては "who ?" 疑問文 (-da 附加) と "what ?" 疑問文 (-j (-zej) 附加) の場合と同様である。疑問詞が修飾する名詞が人以外のクラスと人のクラス (疑問詞に人のクラスを表す接尾辞 -y^w が附加する) の状態動詞 á-ma-zaa-ra "to have" と a-psa-rá "to cost" を用いた例を参照 :

- (36) š'aq'á c'w-a-ø ø-wé-mo-j ? (<j-wé-ma-wə-j)
 how many apple-sg. it (C1)-you (m.)(C2)-have-Non.Fin.-Qu.
 or a-c'w-a-q'wá š'aq'á ø-wé-mo-j ?
 the-apple-pl. how many it-you (m.)-have-Non.Fin.-Qu.
 " how many apples do you (m.) have ? "
- (37) W-árma šap'ə š'aq'á šac^wk'əs ø-a-mó-w-zej ? (<j-a-má-w-zej)
 your-left foot how many toe(s) (them)(C1)-(it)(C2)-have-Non.Fin.-Qu.
 lit. " How many toes does your left foot have ? "
- (38) a-x^wč'-k^wa š'aq'á-y^w ø-wé-ma-da ?
 the-child-pl. how many-human Class (them)(C1)-you (m.)(C2)-have-Qu.
 " how many children do you (m.) have ? "

¹⁸ アプハズ語の名詞の数は、名詞の後ろに数を表すマーカの附加によって標示される。複数マーカは、人のクラスのマーカ -c^wa と、動物あるいは物である人以外のクラスを表すマーカ -k^wa である。単数はゼロ標示である。

- (39) šʔaq'á j-a-psó-w-zej (< j-a-psó-w-zej) abráj a-c'k'á yʷéjž
 how much it(C1)-its (POSS / C2)-cost-DYN-Qu. this the-dress yellow
 " How much is this yellow dress ? "

動態自動詞 a-góla-ra "to get up" を用いた例を参照：

- (40) wará ášəž a-saát šʔaq'a r-zá w-gólo-j ? (< w-góla-wa-j)
 you morning the-o'clock how them-at you (m.)(C1)-get up-DYN-Qu.
 " What time do you (m.) get up in the morning ? "

4-5. 間接疑問文の形態

上述した疑問文は全て直接疑問文である。アプハズ語はまた間接疑問文もあり、その形成方法は直接疑問文のものとは異なっている¹⁹。例えば、副詞的疑問詞では直接疑問文で用いられていた疑問の接頭辞が異なるものを用いる。また代名詞的疑問詞では疑問を表す接尾辞が用いられずに関係代名詞的な非定形によって従属節の述部を形成する。以下では主節に動詞 a-dér-ra "to know" の肯定形あるいは否定形を用いて、間接疑問文を検討してみる。アプハズ語は英語のような「時制の一致」の現象を知らない（訳はそれを知らないロシア語も併記する）。

4-5-1. "I know what / who ..." の間接疑問文の形態

代名詞的疑問詞を用いる間接疑問文は、疑問の接尾辞を用いずに、関係代名詞的な形によってつくられる。例えば、á-q'a-c'a-ra "to do, to make" を使った "what" の直接疑問文 (41) と間接疑問文 (42) はそれぞれ次のようである（時制はアオリスト）：

- (41) jə-q'a-l-c'e-j ? (< jə-q'a-l-c'a-ø-j)
 Rel.-PREV-she-do-(AOR)-Qu.
 "what did she do ? "
- (42) Jacé bará jə-q'a-b-c'a-ø-z ø-z-dér-we-jt'. (< *jə-z-dér-wa-jt')
 yesterday you (f.) Rel.-PREV-you (f.)-do-(AOR)-Class 2. (that)-I-know-DYN-Fin.
 " I know what you (f.) did yesterday. " " Я знаю, что ты сделала вчера. "

上の例文 (42) の従属節の jə-q'a-b-c'a-ø-z の形は不定過去 past indefinite の非定形であり、インフォーマントに抛れば、(41) のような接尾辞 -j をもつ動詞形をここに用いることはできないという。即ち、間接疑問文は、「昨日、あなたが行ったそのことを私は知っている」として解釈できる。

直接疑問文が動態動詞クラス 2 に属する未完了の場合には、接尾辞 -j が無いために、間接疑問文と形態上は同じになる。しかしこれも上の例から類推できるように疑問文でない未完了 imperfect の非定形と見なし得るであろう。次の例を参照：

¹⁹ アプハズ語は直接話法を使って、被伝達部を直接疑問文にすることも可能である。その場合には、被伝達部の後ろに日本語の「...と」に類似した話法の小辞 hʷa (cf. a-hʷa-ra "to say") を置く：Bará b-abá-nxo-j ?, hʷa sará d-sə-zc'áa-jt' Amra. [you (f.) you-where-live-DYN-Qu., speech-particle I she-to me-ask-(AOR)-Fin. Amra.] (Amra said to me, "Where do you (f.) live ?").

- (43) jə-q'a-l-c'o-z ? (< jə-q'a-l-c'a-wa-z)
 Rel.-PREV-she-do-DYN-Class.2.
 " what was she doing ? "

- (44) Jacə bará jə-q'a-b-c'o-z (< jə-q'a-b-c'a-wa-z) ø-sə-z-dər-wa-m.
 yesterday you (f.) Rel.-PREV-you (f.)-do-DYN-Class 2. (that)-me-POTEN-know-DYN-NEG.
 " I don't know what you (f.) were doing yesterday. " Я не знаю, что ты делала вчера. "

"who" の直接疑問文と間接疑問文の関係もまた上の場合と同じである。直接疑問文で用いられている接尾辞 -da (4-1を参照) は、間接疑問文では用いられず、全ての機能は関係代名詞的な形によって伝えられる。次の á-ta-ra "to give" を使った直接疑問文と間接疑問文 (アオリスト) を参照 :

- (45) A-šwq'wə ø-zə-l-tá-da ? (< *j-zə-l-tá-ø-da)
 the-book (it)-Rel.-she-give-(AOR)-Qu.
 " To whom did she give the book ? "

- (46) A-šwq'wə ø-zə-l-tá-z (< *j-zə-l-tá-ø-z) ø-sə-z-dər-wa-m.
 the-book (it)-Rel.-she-give-(AOR)-Class 2. (that)-me-POTEN-know-DYN-NEG.
 " I don't know who she gave the book to. " Я не знаю, кому она дала книгу. "

上の例文 (46) の従属節の ø-zə-l-tá-z は不定過去・非定形であるが、インフォーマントに抛ればこの形を (45) の例文にある ø-zə-l-tá-da にすることはできない、という。

動詞複合体に疑問の接頭辞を含めないで疑問詞を用いる場合には、疑問詞はそのまま残る。次の dárban "who ?" を用いた例を参照 :

- (47) Bará b-y'əza dárban ø-sə-z-dər-wa-m.
 you (f.) your-friend who (that)-me-POTEN-know-DYN-NEG.
 " I don't know who your friend is. " Я не знаю, кто твоя подруга. "

同様に "whose ?" の疑問文も間接疑問文では接尾辞 -da のない非定形が使われる。例 (16) の Arəj a-šwq'wə ø-z-t'wə-da ? " Whose book is this ?" の間接疑問文は、次のようである :

- (48) Arəj a-šwq'wə ø-z-t'wə-w ø-sə-z-dər-wa-m.
 this the-book (it)-Rel.-belong to-Non.Fin. (that)-me-POTEN-know-DYN-NEG.
 " I don't know whose book this is. "

4-5-2. その他の間接疑問文の形態

"yes-no" 疑問文を間接疑問文にするには、疑問の接尾辞 -ma を取り、肯定形と否定形を含んだ非定形語幹を用いる。次の直接疑問文 (49) とその間接疑問文 (現在形) (50) の例を参照 :

- (49) Asábs'a-č'nə bə-psə ø-b-šó-ma ? (< b-ša-wa-ma)

Saturday-on your (f.)-soul (it)-you-rest-DYN-Qu.
 “ Do you (f.) take a rest on Saturday ? “

- (50) Asábṣ²a-č̣²nə bə-psə ø-b-šó-j-bə-m-šó (< ø-b-ša-wa-j-bə-m-ša-wa)
 Saturday-on your (f.)-soul (it)-you-rest-DYN-it-you-NEG-rest-DYN
 ø-sə-z-dér-wa-m. (cf. a-ps-šá-ra "to take a rest")
 (that)-me-POTEN-know-DYN-NEG
 “ I don’t know whether you (f.) take a rest on Saturday or not. “

しかしインフォーマントに拠れば、アオリスト形の間接疑問文には非定形語幹に疑問の接尾辞と思える -w を附加している (4-3参照) . その例を参照 :

- (51) A-ṣ̌²q’wə ø-l-y’wə-ø-ma ?
 the-letter (it)-she-write-(AOR)-Qu.
 “ Did she write the letter ? “
- (52) A-ṣ̌²q’wə ø-l-y’wə-ø-w-j-lə-m-y’wə-ø-w ø-sə-z-dér-wa-m.
 the-letter (it)-she-write-(AOR)-Qu-it-she-NEG-write-(AOR)-Qu. (that)-me-POTEN-know-DYN-NEG
 “ I don’t know whether she wrote the letter or not. “

”where ? “(「どこへ」あるいは「どこで」) の間接疑問文は、直接疑問文に用いられている接頭辞 -aba- を -ax̣- に替え、動詞語幹を非定形語幹にする (4-4-1 参照) . 接頭辞の位置はコラム 1 の直後に置かれる。例えば、アオリスト形の d-abá-ce-j ? (< d-abá-ca-ø-j ?) “where did (s)he go ? “ の間接疑問文は、以下のように直接疑問形を不定過去・非定形に替えてつくられる :

- (53) D-ax̣- cá-ø-z ø-sə-z-dér-wa-m.
 (s)he-where-go-(AOR)-Class 2. (that)-me-POTEN-know-DYN-NEG
 “ I don’t know where (s)he went. “

さらに「どこで」の意味を表す jacə d-abá-q’a-z “where was (s)he yesterday ?” の間接疑問文も同様に接頭辞 -ax̣- を用いて表現する。その例を参照 :

- (54) Jacə d-ax̣-ə-q’a-z ø-sə-z-dér-wa-m.
 yesterday (s)he-where-be-Past.Non.Fin. (that)-me-POTEN-know-DYN-NEG
 “ I don’t know where (s)he was yesterday.”

この動詞複合体の中の接頭辞 -ax̣- は、「(彼女が出かけた・彼女がいた) ところの場所」という場所を表す関係副詞的な機能をもっているものと思われる (英語の関係副詞 where を比較参照) . このことは従属部分が疑問文ではない、同じ接頭辞 -ax̣- をもつ文によっても確かめることができる。次の文を比較されたい :

- (55) Nas s-ánə-j saré-j á-fat’w ø-ax̣-ə-r-tej-wa-z

Then my-mother-and I-and the-food (it)-(the place) where-they-sell-DYN-Class 2.
 h-ne-jt' (< *h-na-j-ø-jt')
 we-PREV (thither)-go to-(AOR)-Fin.
 " Then my mother and I went to where they were selling the food."

"whence ?" 「どこから」の疑問文も上の "where ?" と同様に、接頭辞 abant'wəj- を ax̃ənt'wəj- に替える。(34) b-abá=nt'wəj áa-j ? " where did you (f.) come ? " の間接疑問文は、次のようである :

- (56) b-ax̃ə=nt'wəj áa-ø-z ø-sə-z-dér-wa-m.
 you (f.)-where=from come-(AOR)-Class 2. (that)-me-POTEN-know-DYN-NEG
 " I don't know where you (f.) came."

" when ? " の間接疑問文は、直接疑問文に用いられる接頭辞 -anba- を -an- に替えて²⁰、動詞語幹を非定形にする (4-4-2参照) . b-anbá-gəlo-(j) ? " when do you (f.) get up ? " の間接疑問文は、次のようになる :

- (57) Bará šəžlá b-an-gálo ø-z-dérə-rc s-taxə-wp'.
 you (f.) in the morning you-when-get up-DYN (it)-I-know-in order to I-want-STAT.PRES
 " I want to know when you (f.) get up in the morning. "

" how ? " の間接疑問文は、直接疑問文に用いられている接頭辞 -ṣ̌pa- を -ṣ̌ə- に替え、動詞語幹を非定形にする (4-4-4 参照) . 例えば、例文 (31) Á-mṣ̌ə ø-ṣ̌ə-po-w-xə-w-ge-j ? " How did you spend the day ? " の間接疑問文は以下である (時制はアオリストから不定過去に替わる) :

- (58) Á-mṣ̌ə ø-ṣ̌ə-w-xə-w-ga-ø-z s-a-lacwáẓw-o-jt'.
 the-day (it)-how-you (m.)-self-you (m.)-take-(AOR)-Class 2. I-that-talk about-DYN-Fin.
 " I talk about how you (m.) spent the day. "

この接頭辞 -ṣ̌ə- の位置は、直接疑問文の接頭辞の位置と同じくコラム 1 の直後にある。それは、例えば、自動詞 á-px̣-a-ra "to read" の不完了形によって分かる :

- (59) Sará a-ṣ̌wq'wə s-ṣ̌ə-á-px̣-o-z (< s-ṣ̌ə-á-px̣-a-wa-z) s-a-lacwáẓw-o-jt'.
 I the-book I (C1)-how-it (C2)-read-DYN-Class 2. I-that-talk-about-DYN-Fin.
 " I talk about how I was reading the book."

(2003年1月成稿)

²⁰この接頭辞 -an- はまた従位接続詞 (「である時」) としても用いられる。この場合も動詞語幹は非定形である。次の例を参照 : A-ṣ̌wq'wə s-an-á-px̣-o s-án d-wantó-jt'. [the-book I-when-it-read-DYN my-mother she-iron-DYN-Fin.] " When I am reading the book, my mother is ironing. "

参考文献

- Аристава Ш. К. и др. *Грамматика абхазского языка : фонетика и морфология*. Сухуми. 1968.
Генко А. Н. *Абхазско-русский словарь*. Сухуми. 1998.
Шьакрыл К. С., Концбариа В. Х. *Аҧсуа бызш аа ажәар*. 1. Сухуми. 1986;
Шьакрыл К. С., Концбариа В. Х. Чкадуа Л. П. *Аҧсуа бызш аа ажәар*. 2. Сухуми. 1987
Hewitt, G. *Abkhaz*. Routledge. 1989.
柳沢民雄「アブハズ語動詞構造概説」, pp. 1-128. : 研究代表者 柳沢民雄『ロシア・ソヴィエト言語類型論の研究』, 平成12-平成13年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(1))研究成果報告書, No.12610544. 2002年.

略号

- C = Column
AOR = Aorist
CAUS = Causative
Cond. = Conditional
DYN = Dynamic
EMPH = Emphasis
Fin. = Finite
NEG = Negative
Non.Fin.= Non-Finite
OV = Objective Version
PAST.INDEF = Past Indefinite
Perf. = Perfect
PLUPERF = Pluperfect
POTEN = Potentialis
PRES = Present
PREV = Preverb
Qu. = Question
Rel. = Relative
STAT = Stative
SV = Subjective Version
f. = feminine
m.= masculine
pl. = plural
sg. = singular
(s)he = he or she

The Story of Antu (1)
—A Hezhen Folktale Text with English
and Japanese Translations—

Kenichi TAMURA

Aichi University of Education

1. Introduction

Hezhen is a tungusic language spoken in northeastern China. The grammar of this language has been described in Sunik (1958), An (1986), Zhang et al. (1989), and Chaoke (1997), and among them An (1986) and Zhang et al. (1989) include a small lexicon.

In regard to Hezhen texts, three texts have been published in *Manyu Yanjiu* (滿語研究 = Journal of Manchu Studies, abbreviated as MY below), which is published by Heilongjiang Institute of Manchu Studies (黑龍江省滿語研究所) in China every half year. Each text includes word-to-word and free translations in Chinese. The three texts are as follows.

The Story of Antu: MY 1 (1985) - 4 (1987) transcribed by You Zhixian (尤志賢).

The Story of Shangseu: MY 5 (1987) to 15 (1992) transcribed by You Zhixian (尤志賢).

The Story of Shildaru: MY 1 (1985) to 3 (1986) transcribed by Chuan Wanjin (傅万金) and continued since MY 17 (1993) by You Zhixian (尤志賢).

In the present article the first part of The Story of Antu is republished with word-to-word translations in English and Japanese and free translations in English so that a Hezhen text could be known to more people in the world.

1.1. Transcription

The following letters in our text designate the phones in brackets. The other letters designate the same phones as in IPA.

sh [ʃ] ch [tʃ] zh [dʒ] ng [ŋ] e [ə]

It is a characteristic of the transcription in the original text by You that some vowel, in general, is inserted between the consonants which are always transcribed as double consonants by An (1986) and Zhang et al. (1989). Therefore, for example, *dilegan* 'voice' in our text corresponds to *dilgan* in Zhang et al. (1989).

1.2. Grammatical suffixes

Grammatical suffixes of Hezhen are as follows. To some suffixes the Japanese

equivalents are added in parentheses.

Personal possession suffixes

	singular	plural
1st person	-i/ -mi	-wu
2nd person	-shi	-su/ -so
3rd person	-ni/-n	-ti

Reflexive possession suffix -i/ -ji (singular and plural)

Contrary to the descriptions in the above-mentioned grammars, there is a reflexive possession suffix which is frequently used in our text.

Case suffixes*

(no suffix)	nominative	(〜が, 〜は)
-me/-we/-w/-u	accusative	(〜を)
-du	dative	(〜に)
-dula/-dule/-le	locative	(〜で, 〜に, 〜へ)
-tiki/-tki	directional-elative **	(〜へ, 〜から)
-zhi***	instrumental-comitative	(〜で, 〜といっしょに)

Note *) According to An (1986) and Chaoke (1997), Hezhen nouns have the genitive case which is designated with -i/-ji. This case suffix is, however, not found in our text.

**) In some nouns which mean spatial relations, for example *do* 'inside' and *zhule* 'foreground', the directional case is designated with -shiki and the elative case with -zhi. The suffix -zhi after the verb form with a personal ending also designates the elative case as in the sentence (95) in our text. On the function of the suffix -zhi in tungusic languages see Tamura (1996).

***) This suffix is also used in deriving an adverb from an adjective.

Verbal suffixes

Personal possession suffixes are also used as personal endings of verbs. But the 3rd person singular suffix -ni/-n is often used as the 3rd person plural ending and some verb forms of 3rd person (singular and plural) have the suffix -ren

-xe past tense

The verb form of future tense, which is described in Sunik (1958: 23) and Chaoke (1997: 302-3), is not found in our text.

-rshe-	negation of present tense
-rchi-	negation of past tense
-wu/ -u	passive voice (～される)
-kune(i)	causative (～させる)/ imperative of 3rd person (～するように)
-machi	reciprocal (～しあう)
-k(e)chi	volitional (～しようとする)
-ki	conditional (～ならば)
-ru/ -ro	imperative of 2nd person singular
-busu/ -buso	imperative of 2nd person plural
-mai	imperative of 1st person plural (～しましょう)

The verb stem is also used as the imperative of 2nd person (singular and plural). The negation of imperative is formed of *ezhe* + (verb stem) *-re* as in the sentence (16).

-mi*	converb of simultaneity (～しながら)
-re	converb of posteriority (～してから)

Note *) The suffix is also used in the following usages, as in Manchu.

-mi deri-	begin to do something (～し始める)
-mi mete-	can do something (～することができる)

Other suffixes

-keche	after doing something (～した後)
-kech(i)e	person who does something (～する人)
-mi-du	as soon as ... (～するとすぐ)
-de	too/ even (～も／～でも)

2. Text (MY 1, pp. 96-104)

- (1) zhule aren* jolugu mangme dulinba-du-ni eme chocho baldi-ren.
 early year yorugu river middle basin a youth lives
 むかし ヨルグ 川の 中流域に 一人の 若者が 暮らしていた。

- (2) gerbi-ni antu mergen. (3) ushkuli du-ni du
 name Antu mergen little when already
 その名は アントウ ムルグン (という)。(彼が) 小さい 時に すでに

- ami-ni eni-ni shaxu anchi da-xe-n. (4) xesui-ti,
 father mother all not be became they say
 父と 母は みな いなく なってしまった。 人が言うには、

ami-ni eni-ni nio-du zhaf-u-re axa odu-kune-xe-n.
 father mother by someone be captured slave made
 彼の父と 母は 人に 捕らえられ (人が) 奴隷に した (という) 。

(5) tuinere zho baledi baite shaxu mene nale-zhi uilei-ni.
 so house life thing all self hand does
 そこで 家や 生活の ことは すべて 自分の 手で している。

(6) inien inien imaxe bujuen-me wakechi ienkete enbi-we
 every day fish beast hunt wild fruits** wild vegetables**
 毎日 魚や 野獣を 捕り 野性の果実や 山菜を

gade-re nemi antu-we tatiu-xe-ni fakeshi-zhi uilei-ni.
 gather so to Antu instructed skillfully practices
 採り、 このように アントゥに 教えたことを (彼は) 上手に 行っている。

Once upon a time, there lived a youth in the middle basin of the Yolugu river.
 His name was Antu mergen. His father and mother disappeared when he was a little
 child. It is said that his father and mother were captured by someone and were
 made slaves. So he does all housework and everything for living by himself. Every
 day, catching fish, hunting beasts, and gathering wild fruits and wild vegetables,
 Antu practices skillfully what others have instructed him.

Note *) The form *aren* would seem to be a misprint of *arngen*.

**) *ienkete* designates a sort of cherry and *enbi* designates a sort of mugwort.
 Here these words are translated as their hypernyms as in Chinese translation.

(7) ekechi eme inin antu mangme zhiabukere-le-ni eme-xe-n.
 so one day Antu river bank came
 こうして ある 日 アントゥは 川 岸へ やって来た。

(8) iche-xe-n. eme diake mangme zhabukere-u-ni giauli-mi
 saw one ship river bank pull oars
 見ると、 一艘の 船が 川 岸を オールを漕いで

eme-ren. (9) mura agedene-ren, uki guida-mi nio xuliui-ni
 come very be glad how long people go
 やって来る。 (彼は) とても 喜ぶ、 どれだけ 久しく 人が 行くのを

iche-rchi-n. (10) diake eshdu giauli-mi kirale-n ishian-xe-n.
 not have seen ship soon pull oars before him reach
 見なかったか、と。 船は やがてオールを漕ぎつつ 彼の目の前に 至った。

(11) antu iche-ki-n, diake xorun-du-n giaulie-keche na-du
 Antu look at ship on persons pulling oars land
 アントウが 見ると、 船の 上で オールを漕ぐ者、 陸地で

jargunde-keche shiaxu asen xite.
 persons pulling hawser all female youth (girl)
 船の綱を引く者 みな 若い女性たち (であった) 。

One day Antu comes to the bank of the river. When he looks around, there comes a ship, being pulled by oarmen, alongside the bank of the river. He was very glad, for he has not seen people moving for a long time. The ship, being pulled by oarmen, soon comes before him. Antu sees that the persons pulling oars on the ship and the persons pulling hawsers on the land are all girls.

(12) niani mangme zhiabukere-du-ni chomuchi-re muke-we lantule-mi
 he river bank crouch water beat
 彼は 川 岸にしゃがんで 水を 叩いて

ukechi-mi ide-me ichie-kechi-ni. (13) asen xite
 play liveliness want to see (watch) female youth
 遊びながら 賑やかさを 見ようとする [野次馬で眺める]。 女の子 (たち)

antu-we iche-mi-du shiaxu giauli-rshe-n jargunde-rshe-n da-xe-n.
 Antu see all not pull oars not pull hawser became
 アントウを 見るや みな オールを漕がず、船の綱を引かなく なった。

(14) eiteni antu baldi-xe-ni mura guzhukuli du-ni, asen xile
 essentially Antu growth very handsome because girls
 もともと アントウの 成長ぶりは とても 美しい ので、 女の子たちは

eli ichie-ki eli taxe-le-mi ichie-kchi-ti, uili-de oungmu-xe-ti.
 more see more willingly want to see work forgot
 見ればみるほど ますます 喜んで 見ようとし、 仕事も 忘れた。

He crouches on the bank of the river and, beating water for fun, watches the liveliness (looks at them as a spectator). All the girls stop pulling oars and

pulling hawsers, as soon as they see Antu. Because Antu has grown very handsome, the more closely the girls see Antu, the more willingly they watch him, and they have forgotten to work.

(15) ei burgun-du-ni eme chocho diake do-zhi-ni dili-i niu-re*
 this time a male youth ship out of head put out
 この時 一人の若者が 船の 中から 頭を 出して

asen xile-we xachingelei-ni, unakemi giauli-rshe-n jargunde-rshe-n
 girls blame why not pull oars not pull hawser
 女の子たちを 責めののしる。 どうして オールを漕がず 船の綱を引かず、

ti chochou-le iche-kechei-su. (16) diake xorun-du-n bishi eme
 that youth want to see ship on be an
 あの 若者の方を 見ようとするのか、と。 船の 上に いる 一人の

mafa ei chocho-we tafulechi, asen xite-we ezhe xachengele-re,
 old man this young man reproves girl (don't) blame
 老人が この 若者を たしなめる。 女の子を 責めるな、

ezhe baite-u niu-u-re. (17) tuinemi diake
 (don't) thing put out so ship
 事を 出すな [騒ぎを起こすな]、と。 こうして 船は

delune-xe-n.

passed by
 通り過ぎて行った。

At this time, a young man puts his head out of the inside of the ship and blames the girls, "Why do you watch the boy, not pulling oars and hawsers?" An old man on board the ship reproves the young man, "Don't blame the girls and don't put out the thing (don't make a disturbance)." So the ship passed by.

Note *) This form would seem to be a misprint of *niu-u-re* as in the sentence (16) and (22).

(18) antu xai mangme zhiabukere-du-ni ili-re eiki iche-kechi-re
 Antu again river bank stand east watch
 アントウが また 川 岸に 立って 東を見、

soloki iche-kechi-re emachi bi-mi-du na eme diake
 west watch for some time being again a ship
 西を 見ると、 しばらく して すぐ また 一艘の 船が

eme-ren. (19) ei diake xorun-du-ni giauli-kechie jargunde-kechie
 comes this ship on who pulls an oar who pulls a hawser
 やって来る。 この 船の 上で オールを漕ぐ者、 船の綱を引く者、

shiaxu asen xite. (20) asen xite antu-e ichie-mi-du shaxu
 all girl girls Antu see all
 みな 若い女性 (であった) 。 女性たちは アントゥを 見るや みな

make-xe-ti. (21) shaxu giauli-rshe-n jargunde-rshe-n da-xe-ni.
 were amazed all not pull oars not pull hawsers became
 呆然とした。 みな オールを漕がず、 船の綱を引かなく なった。

Antu stands on the bank of the river again and looks eastward and westward.
 After a while, there comes a ship again. The persons pulling oars on this ship
 and the persons pulling hawsers are all girls. As soon as they see Antu, the
 girls are all amazed and stop pulling the oars and hawsers.

(22) ei burgun-du-ni eme chocho diake dou-zhi-ni dili-i niu-u-re
 this time a youth ship out of head put out
 この 時 一人の 若者が 船の 中から 頭を 出して、

asen xile-we xachengelei-ni, unakemi uile-r-su*.
 girls blame why not work
 女の子たちを 責めののしる。 どうして 働かないのか、と。

(23) tuinemi ei chocho ai-zhi iche-mi-du tagedergi-xe-ni.
 so this young man carefully see recognized
 そうしながら この 若者が よく 見ると、すぐ わかった。

(24) antu teni niani guchixin akin-i**, asen xile-dula-ni chikin
 Antu just he (elder male relative) girls most
 アントゥは まさに 彼の 表 兄であり、 女の子たち の中で 最も

guzhukuli dame antu guchixin xunazhi-ni.
 beautiful just Antu (younger female relative)
 美しいのが まさに アントゥの 表 妹 (であった) 。

At this time, a young man puts his head out of the inside of the ship and blames the girls, "Why don't you work?" Then the young man sees (Antu) closely and soon he recognizes that Antu is his elder relative. And the most beautiful among the girls turns out to be Antu's younger relative.

Note *) The form *uile-r-su* would seem to be a misprint of *uile-rshei-su* 'You (plural) don't work'.

**) The form *akin-i* would seem to be a misprint of *akin-ni*.

The word *guchixin akin* means an elder male person who is the son of a sister of the father, or who is the son of a brother/sister of the mother.

For convenience it is translated as an elder male relative. The words

guchixin xunazhi and *guchixin neu* below are translated likewise.

注) 表兄= 父の姉妹の息子、または母の兄弟姉妹の息子で自分より年長の者。

(25)	antu	mene	guchixin	neu-i	guchixin	xunazhi
	Antu	self	(younger male relative)	(younger female relative)		
	アントウは	自分の	表	弟と	表	妹だと

tagedirgi-xe-n,	ebuchukuli	agedenei-ni,	tigurun-me	shaxu	mene
recognized	very much	be glad	them	all	self
わかり、	たいへん	喜び、	彼らを	みな	自分の

zhogu-dule-i salirgi-xe-n.

house	invited
家に	招いた。

Antu is very glad to recognize that they are his relatives. He invites all of them to his house.

(26)	antu	zhogu-du-ni	emadan-du	ekechi	malxon	nio
	Antu	house	at a time	such	many	people
	アントウの	家に	一度に	こんなに	たくさんの	人が

eme-xe-ni.	(27)	men-du	ai	zhefuku	ulu-mi	ulixi-rshe-n,
came		for oneself	delicious food	cook	not can	
来たのだ。		自分で	御馳走を	作ることが	できない。	

oni	ne-ki	ai.	(28)	niani	emachi	goni-mi-du	xesu-ren.
how	do	good		he	for some time	think	say
どう	すれば	いいか。		彼は	しばらく	考え、すぐに	言う。

(29) "gege xunazhi, su mene buda ulu-busu. (30) taketu-dula-n
 sisters you for oneself meal cook fish cabin
 姉妹たちよ、自分たちで料理を作ってくれ。魚小屋に

ima jake bi-ki-n, ima jake-u ulu-mi zhefe-busu."
 something be something cook eat
 何かあれば、何かを[それを]調理して食べてくれ。

What a lot of people come to Antu's house at one time ! Antu cannot prepare
 a delicious dish for himself. What should he do ? He thinks for a while and
 says, "My sisters, prepare dishes for yourself. Cook and eat what is in the
 fish cabin.

(30) asen xite mo-we kolotelii-ni-de bi-ren, muke damzhilei-ni-de
 girl wood cut be water carry up
 女の子は木を伐る者もあり、水を担ぐ者も

bi-ren, zhekete-u silikii-ni-de bi-ren, soligi kerei-ni-de
 be millet wash be vegetable cut
 あり、粟を洗う者もあり、野菜を切る者も

bi-ren, imaxe takui-ni-de bi-ren, oleguchu gazhi-ni-de
 be fish prepare be dried fish bring
 あり、魚の用意をする者もあり、干し魚を持って来る者

bi-ren. (31) geren gurun gese tungkukute-mi eshitulu buda
 be all poeple together act for some time meals
 ある。すべての者が一緒に仕事をし、しばらくしてご飯と

soligi-we dere-le netan-xe-n. (32) geren gurun zhefu-re omi-re
 side dish table put all poeple eat drink
 おかずをテーブルに置いた。みんな食べたり飲んだり

nemi deriu-xe-n.
 so began
 し始めた。

(The girls share the work.) Some girls cut wood, some carry up water, some
 wash millet, some cut vegetables, some prepare fish, and some bring dried fish.

They all work together and after a while they put meals and side dishes on the table. Everybody begins to eat and drink.

(33) geren gurun antu zhogu-du-ni ilan inin ilan dolubu
all people Antu house three day three night
すべての者が アントウの 家に 三 日 三 晩

bi-xe-ti. (34) antu guchixin neu-zhi ilan inin ilan dolubu
stayed Antu (younger male relative) three day three night
いた。 アントウは 表 弟と 三 日 三 晩

arki omi-xe-ti. (35) tigurun xofur xofur sokutu-mi omi-xe-ti.
wine drank they (onomatopoeia) getting drunk drank
酒を 飲んだ。 彼らは 酔いながら 飲んだ。

All the people stay in Antu's house three nights and days. Antu drinks wine with his younger relative during the three nights and days. They drink, getting drunk.

(36) antu guchixin neu-ni edu ashichime guida-mi niadu-rshe-n,
Antu (elder male relative) here very much long time not stay
アントウの 表 弟は ここに それほど 長くは とどまらず、

tigurun gulene-kechi-ren. (37) antu-we xesuchi-mi, tigurun-zhi gese
they leave Antu say with them together
彼らは 出発しようとする。 アントウに 勧める。 彼らと ともに

eneu-kuchii-ni. (38) antu mura agedene-mi zharikete-xe-n,
want to go Antu very much be glad answered
行くようにと。 アントウは たいへん 喜んで 答えた。

tiaxe-le-mi tigurun-zhi gese ene-ren.
willingly with them together go
喜んで 彼らと ともに 行く、と。

Antu's younger relative stays here not so long. They want to leave here and ask Antu to go with them together. Antu answers very delightfully that he will willingly go with them.

(39) ei teni eme nio zhogu-du bii tiaxele-rshe-n,
 this just one person house be not wants
 これは すなわち、一人で 家に いることを 望まず、

tatikina ei dulibin-du-ni ami-i eni-i geletanggii kimu nio-we
 namely this occasion father mother seek enemy person
 つまり この 機会に 父と 母を 捜し、 仇を

wai. (40) antu zho-tiki delxei ei inin, ai-zhi eme erin
 kill Antu house leave this day much a time
 討つということ。 アントゥは 家から 出て行く この 日、 かなり 一 度に

arki omi-xe-ni arki xou-ni arki kutexan-me-ni shaxu nodu-xe-ni.
 wine drank wine bottle wine glass all threw away
 酒を 飲み、 酒 壺と 酒の 杯を すべて 投げ捨てた。

This means that he doesn't want to stay in his house alone, namely that on
 this occasion he seeks his father and mother and revenges himself on the enemy.
 This day when he leaves his house, Antu drinks much wine at a time and throws
 away all the wine bottles and wine glasses.

(41) antu zho-tiki delxei-du-i gonin exeleden zhogu-du-i bishi
 Antu house leave heart sad house be
 アントゥは 家から 出て行く時、 心が 重いまま 家に ある

zhiake-we bargirgi-xe-n. (42) xachin seun-me shaxu ai-zhi
 thing put in order each god (figure) all skillfully
 物を 片づけた。 各種の 神 (の像) を すべて 上手に

ilieu-kune-re xesu-ren;
 set up say
 立てて 言う。

(43) xerile xerilenani xerigeige
 (spell)
 (呪文)

(44) geren seun ai-zhi dolidi-buso.
 all god carefully listen to
 すべての 神よ、よく 聞いてください。

(45) edu ai-zhi zho-we etemachie bi.
 here well house keep be ?
 ここで よく 家を 守りますように。

(46) jadu-de mangge bake-ki geren seun mine-we belechian.
 wherever trouble meet all god me help
 どこであれ 困難に 出会ったなら すべての神が 私を 助けるように。

(47) doledi-xe-n echi-xe-n, arna arang ...
 heard memorized (spell)
 (神々は) 聞いたことを 覚えたであろうか。(呪文)

When he leaves his house, Antu puts the things in the house in order, with his heart being sad. He sets up the figures of all gods skillfully and says,
 Xerile xerilenani xerigeige.
 All gods, listen to me carefully.
 Keep my house well here.
 Wherever I am in difficulty, all gods shall help me !
 Have you memorized what you have heard ? Arna arang

(48) antu ai muxan, alide kimu nio-zhi nele-rshe-n.
 Antu good man any time enemy person not fear
 アントゥは 優れた 男であり、 どんな時でも 仇を 恐れない。

(49) tuinemi niani nati eiki zhulexi soluki ferxi duin
 so he again east south west north four
 そこで 彼は また 東 南 西 北の 四つの

erge-tiki sagedi dilegan-zhi kili-mi;
 direction big voice shout
 方向へ 大きな 声で 叫ぶ。

(50) xerile xerilenani xerigeige
 (spell)
 (呪文)

(51) oshi katen seun bi-ki-ni mini seun-me-i ete-ki-ni,
 somewhere powerful god be my god defeat
 どこかに 強い 神が いて、 私の 神を 打ち破り、

mini guzhukuli zho na-le-i ilian-ki, bi tiaxe-le-mi ilan
 my beautiful house land stay I willingly three
 私の 美しい 家と 土地に とどまるなら、私は あえて進んで 三

tauen ba oli-mi xuli, ei ba-le-de emergi-mi exele-u-su
 hundred li* go around walk this place come back fault
 百 里を 回り道して 歩き、 この 場所へ 戻って あなた方の過ちを

gelte-rshe-i, mene zho na-i berti ti-du bu-i. arang...
 not seek self house land permanently to him give (spell)
 捜したりはせず、自分の家と 土地を 永久に 彼に 与える。(呪文)

Antu is a good man. He never fears the enemy. So again he shouts in the four directions of east, south, west, and north.

Xerile xerilenani xerigeige.

If there is a powerful god somewhere and this god defeats my gods and stays in my beautiful house and land, I will not dare to come back here making a detour of three hundred li, will not find fault with you, but will give my own house and land to another god permanently. Arang ...

Note *) Li is a unit of distance. A li corresponds to about 4 kilometers.

(52) antu eiten baite-i odi-mi-du guchixin neu guchixin
 Antu every thing (younger male relative) (younger
 アントウは すべての ことを するや 表 弟や 表

xunazhi-zhi-i diake-le taketi-xe-n, nati zhuleshiki enei-ti.
 female relative) ship got on again forward go
 妹とともに 船に 乗り、(彼らは) 再び 前へ 進む。

(53) ekechi emadi inin ene-xe-ti.
 so for some days go
 こうして 何 日間か 行った。

As soon as he has done everything, Antu gets on the ship with his relatives. They go forward again. So they proceed for some days.

(54) eme inin antu diake dou-zhi-ni xuli-mi niu-xe-ni.
 one day Antu ship from inside walking got out
 ある 日 アントウは 船の 中から 歩いて 出てきた。

(55) diake zhulezhige-du-ni ili-re iche-kechi-ni. (56) diake-de goru-zhi
 ship front stand watches ship far
 船の 前方に 立って 見る。 船は 遠くは

ene-rchi-n, zho-ni ichi-u-mi bi-ren. (57) antu mura
 not went house be seen be Antu very much
 進んではおらず、彼の家が 見えて いる。 アントゥは たいへん

tiaxele-rshi-ni, asen xile-tiki xesui-ni. (58) su emachi
 be dissatisfied girls says you for a while
 不満に思い、 女の子たちに 言う。 お前たち しばらく

teine-busu, bi edin-me gelemichie-mi*. su kotile-we tate.
 take a rest I wind try to find you sail pull
 休みなさい。 私が 風を 捜してみる。 お前たちは 帆を 引いてくれ。

One day, Antu goes for a walk from the inside of the ship and looks around,
 standing on the bow. The ship doesn't proceed far and his house can be seen.
 Antu is quite dissatisfied with it and says to the girls, "Take a rest for a
 while. I seek a wind. Pull the sails."

Note *) *gelemichiemi* < *gele-mi ichie-mi* ' (literally) I see seeking'

(59) xesu-mi odi-mi-du antu zho-i erge-tiki-ni gemurshi-mi,
 say finish Antu house direction pray
 言い 終えるや アントゥは 家の 方向に向かって 祈る。

seuen-i belechieu-kunei-ni. (60) teni xesu-mi odi-mi-du sagedi edin
 god help just say finish strong wind
 自分の神が 助けるように、と。 今や 言い 終えるや 大きな 風が

edine-mi deriu-xe-n. (61) diake emeti edin fuligi-ni kechi ene-ren.
 blow began ship as if wind blow alike goes
 吹き 始めた。 船は まるで 風が 吹くかの ように 進む。

(62) diake kunbielekui-ni ashichime mangge, eme nio-de kute-mi
 ship roll very badly a person steer
 船が 揺れること とても 激しく、 誰も 舵をとることが

mete-rshe-n. (63) esi antu nati gemurshi-ren,
 not can now Antu again prays
 できない (ほどである)。 今 アントゥは また 祈り、

seuen sauli-re kuteu-kunei-ni.
 god invoke make steer
 神を 呼び、 舵をとらせる。

After he finishes speaking, Antu prays in the direction of his house that his god shall help him. As soon as he finishes praying, a violent wind begins to blow. The ship proceeds, as if a wind would blow. The ship rolls so badly that nobody can steer the ship. Now Antu prays again, invokes his gods so that they would steer the ship.

(64) teni gemurshi-mi odii-zhi-ni, suliau-zhi eme fashi shanggin
 just pray finish from west a group white
 ちょうど 祈り 終わると、 西から ひと 塊の 白い

tukusu degede-xe-n, diake uizhige-le-ni ishia-mi-du sarte-xe-n.
 cloud fly ship above reach was scattered
 雲が 飛んで来て、 船の 上空に 至るや 四散した。

(65) tuinemi diake amizhige-du-ni jame zhake tiofur te-xe-n.
 so ship stern some thing (onomatopoeia) sat down
 そうして 船 尾に 何かが 座った。

(66) diake eshi uendeke otu-xe-n, edin-du fuligie-u-mi ue-u
 ship now tranquil became wind be blown wave
 船は 今や 平穏と なり、 風に 吹かれて 波を

koletile-mi guguda gamun gula-mi niekete ba-ue
 cutting high hill fill (with water) hollow place
 切りつつ 高い 丘を 水で満たし、 窪んだ 所を

nielebe-mi nioru kechi zhule-shiki enei-ni.
 fill (with water) arrow alike forward goes
 あふれさせ、 矢の ように 前へと 進む。

As soon as Antu finishes praying, there come flying a group of white clouds from the west. Hardly coming above the ship, they are scattered. Then something sits down on the stern. Now it becomes tranquil in the ship. Blown by the wind and cutting waves, the ship proceeds like an arrow and fills high hills and low places with water.

(67) ekechi emadi inin ene-xe-ti. (68) eme inin eme xotun-dule
 so some day they went one day a town
 こうして 何 日か 彼らは行った。 ある 日 ある 街に

ishia-xe-ti. (69) tigurun diake-i aku-xe-n, darun-dule
 arrived at they ship brought to the shore pier
 至った。 彼らは 船を 接岸させ、 波止場に

tukuti-xe-n, xotun do-shiki-ni enei-ti. (70) xotun tokun-dule-n
 went up town to inside go town center
 上り、 街の 中へと 入って行く。 街の 中心部に

ishian-xe-n. (71) malexun nio ichie-xe-ti. (72) eme
 arrived at many people saw a
 着いた。 多くの 人たちが (彼らを?) 見た。 一人の

chiarnexen mafa nio tokun-du-ni ili-re bi-ren.
 gray-haired old man people center stand be
 白髪の 老人が 人々の 真ん中に 立って いる。

So they go for some days. One day, they arrive at a town. They bring the ship to the shore, go up on the pier, and go into the town. They arrive at the center of the town. Many people see them. A gray-haired old man stands in the middle of the people.

(73) ei mafa ei xotun ezhien-ni, (74) ti geren
 this old man this town leader he all
 この 老人は この 街の 首領である。 彼は すべての

gurun-tiki xesu-ren.
 people say
 人たちに 言う。

(75) xerile xerilenani xerigeige

(spell)

(呪文)

(76) mergen muxan, ai-zhi doledi.

mergen brave man well listen to

勇敢な男たちよ、よく聞いてくれ。

(77) mini eme asen xite-i zhuan zhiakun se da-xe-n.

my one daughter eighteen age became

私の一人娘は十八歳になった。

(78) medeleai nio ashichime malexun.

propose people quite many

求婚する人たちはかなり多い。

(79) bi-de ni-du bu-rshi-ki-de exele.

I too to anybody not give undesirable

私も誰にも与えないのも良くない。

(80) elezhimachi-mi xodie-u gelete-i.

competing son-in-law seek

競いあって婿を探す。

This old man is the leader of the town. He says to all people.

Xerile Xerilenani Xerigeige.

Brave men, listen to carefully.

My only daughter has become eighteen years old.

Quite many people propose her.

It is also undesirable for me to give her to nobody.

I seek my son-in-law by competition.

(81) bi eshi ilan zhiake gele-i.

I now three thing seek

私は今三つの物を求めている。

(82) zhulexi erge mo keun-du-ni eme kiakechin bi-ren.

south direction tree hole an eagle be

南の方角の木の穴に一羽の鷲がいる。

(83) eikizhige muke-du-ni eme aishin dawu bi-ren.
 east lake ? a golden salmon be
 東の 湖に 一匹の 金の 鮭が いる。

(84) suliazhige ureken gamun-du-ni eme kumake bi-ren.
 west mountain hill a deer be
 西の 山 に 一匹の 鹿が いる。

(85) ni ei ilan zhake-we gazhi-ki-ni, bi asen xite-i
 who this three thing bring I daughter
 誰か この 三つの 物を 取ってきたなら、私は 自分の娘を

ni-du bu-i.
 whom (him) give
 その誰かに [その人に] 与える。

(86) doledi-xe-n, ezhi-xe-so, arna arang ...
 heard memorized (spell)
 聞いたこと 覚えたか。 (呪文)

Now I want three things.

There is an eagle in the hole of a tree in the south.

There is a golden salmon in a lake in the east.

There is a deer in a mountain in the west.

I will give my daughter to the man who has brought these three things.

Have you memorized what you have heard ? Arna arang ...

(87) geren gurun ei ilan zhiake doledi-keche, shiaxu meife-i
 all people this three thing heard all neck
 人々は この 三つの 物のことを 聞いてのち、 みな 首を

modirshi-re dili-i ushikachi-re emeken-de ene-i gisun
 stroke head scratch anyone go word
 撫で 頭を 搔き、 誰ひとり (自分が) 行くという 言葉を

xesu-rshe-n. (88) ei teni ti zhiake mura mangge,
 not say this just that thing very difficult
 言わない。 これは まさに その 物が とても 厄介で、

bake-mi meteu-rshe-n.

get not can

得ることが できないということである。

After they have heard about these three things, everybody stokes their necks and scratches their heads. Nobody says to go. This means that it is very difficult and impossible to get the things.

(89) xesui-ti, ti mafa asen xite-ni baledi-xe-ni mura
(they) say that old man daughter growth very
噂によれば、その 老人の 娘の 成長ぶりは たいへん

guzhukuli, seun-de katen. (90) ei ilan zhiake bakei-du mura
beautiful god too powerful this three thing get big
美しく、 神もまた 強い。 (しかし) この 三つの 物を 得るには かなりの

mangge. (91) tuineren-de geletan-kechi nio-de bi-ren.
trouble nevertheless want to seek person be
困難がある。 そうはいつでも 探してみようと思う 人も いる。

It is said that the daughter of the old man has grown very beautiful and her (guardian) god is powerful, too. Although it is very difficult to get these three things, there is also a man who wants to seek them.

(92) ei burgin-du-ni eme chocho nio do-zhi-ni xuli-mi
this time a young man people from inside walking
この 時 一人の 若者が 人々の 中から 歩き

niu-xe-n, xesu-re-n, "bi enemichie-mi" (93) geren gurun
got out said I try to go all people
出て、 言う。 私が 行ってみる、と。 すべての 人々は

maketeuchi-ti, na dengshinei-ti, seun-me ai-zhi
admire as well as worry god well
称賛しつつも、 また 心配し、 神に (対し) (彼を) よく

etemachieu-kenei-ni.

make protect

保護させる [神が護るようにと祈る?]

At this time, a young man comes out from the people and says, "I will try to go." All the people admire him, while they worry about him and wish that the gods shall protect him well.

(94) ei chocho zhogu-dule-i eni-mi-du omiliekete-mi gulune-xe-n.
 this young man house go tie a girdle left
 この 若者は 家に 行くや、 帯を締めて 出発した。

(95) ene-xe-n-zhi eme bia dulune-xe-n, zhiashixen-de anchi.
 went a month passed news not be
 行ってから 一カ月が 経ったが、 何の便りも ない。

(96) amile geren gurun nio xesui-ni doledi-xe-ti.
 later all people person say heard
 後に 人々は 人が 話すのを 聞いた。

(97) ei chocho xokutu aleden-du-ni neleuki tasxe-du zhef-u-xe-n.
 this young man root on way wolf tiger was eaten
 この 若者は 道の 途中で 狼や 虎に 食べられた、と。

As soon as he goes to his house, this young man ties a girdle and leaves the house. A month passes, since he left. There are no news about him. Later the people hear other people tell that this young man has been eaten by wolves and tigers on the way.

(98) xotun ezhin ei baite-u sa-mi-du na xotun gurun-me-ni
 town leader this thing know again town people
 街の 長は この ことを 知るや 再び 街の 人々に

xudalergi-xe-ni. (99) ti-gurun-tiki giserei-ni, "etiki ni
 appealed to to them says from now who
 呼びかけた。 彼らに 言う。 「これから 誰かが

tiaxe-le-ki, ni enemiche-busu." (100) esi eme nio-de
 wants who should try to go now one person
 望むなら その人が 行ってみるがいい。」 今や 一人も (自分が)

ene-i nemi xesu-rshe-n. (101) ei burgin-du-ni antu nio
 go so not say this time Antu people
 行く と 言わない。 この 時 アントウが 人の

do-zhi-ni niu-mi-du xesu-ren, (102) "su ni-de
 from inside come out say you nobody
 中から 出てくるや 言う。 あなたたちが 誰も

ene-rsh-ki-su, bi ene-re ichia-mi."
 if you don't go I try to go
 行かないのなら、 私が 行ってみよう。

The leader of the town, soon after knowing this, appeals to the people of the town again. He says to them, "From now on, who wants, should try to go." Now nobody says to go. At this time Antu comes out of the people and says, "If none of you goes, I will try to go."

(103) antu guchixin neu-tiki gisere-xe-ni, ei ba-du niani-me-ni
 Antu (younger male relative) this place him
 アントゥは 表 弟に 言った。 この 場所で 彼を

emadi inin alechieu-kunei-ni. (104) xesu-mi odi-mi-du gulene-xe-n.
 several days should wait say finish departed
 何 日間か 待つように、と。 言い 終えるや 出発した。

(105) eme inin niani ekechi bishi ba-le ishia-xe-ni.
 one day he such being place arrived at
 ある 日 彼は このような 場所に 着いた。

(106) na xorun-du-ni jalun bude-xe-n nio giamuse-ni,
 ground on many dead people bone
 地 上に たくさんの 死んだ 人の 骨 (がある)。

mura ebuchukuli. (107) katen antu ezhi emachi-de nele-rsh-n.
 very terrible brave Antu never a bit not fears
 とても 恐ろしい。 勇敢な アントゥは 決して 少しも 恐れない。

(108) antu bute-xe-n nio gaimuse xoru-me-ni xeiki-mi emachi
 Antu dead people bone on step a bit
 アントゥは 死んだ 人の 骨の 上を 踏みつつ 少し

ene-xe-ni. (109) emeadi nio-de tebeli-mi bakezhirgi-rshe-n
 went some people hold not seize
 進んだ。 何人かの 人でも 抱えて 捉えることのできないほど

bediun bude-xe-n mo dulian-du-ni eme folutuku bi-ren.
 big withered tree middle one hole be
 太い 枯れた 木の 中に 一つの 穴が ある。

Antu says to his younger male relative that he should wait for him for several days. Having said this, he soon departs. One day, he arrives at a place where there are many bones of dead people on the ground. It is very terrible. But the brave Antu never fears. Antu walks a bit stepping on the bones of dead people. There is a hole in a withered tree which is so big that even several men cannot hold it in their arms.

(110) antu ichekechi-mi-du eme nio dili giamese-u-ni zhiafu-mi
 Antu see one person head bone catch
 アントゥは 見るとすぐ 一人の 人の 頭蓋骨を 掴み、

mo folutuku do-shik-ni nodu-xe-n. (111) emachi bi-mi-du do-zhi-ni
 tree hole into threw a while be from inside
 木の 穴の 中に 放り投げた。 しばらく して 中から

eme kaiakechen degede-mi niu-xe-n. (112) kiakechen mura sagedi,
 one eagle flying came out eagle very big
 一羽の 鷲が 飛びながら 出てきた。 鷲は とても 大きく、

chauketen-de onimu tebetin. (113) ichie-ki emachi sagedine-xe-n.
 talon long sharp seemingly a bit grew old
 爪も 長く 鋭い 見れば 少し 老いていた。

Having seen it, Antu catches the skull of a person and throws it into the hole of the tree. After a while, an eagle comes flying out of the hole. The eagle is very big and its talons are long and sharp, too. Seemingly it is somewhat old.

(114) kiakechen antu-we ichie-mi-du meifun sarchi amennge-i turachi-mi
 eagle Antu see neck extend beak stretch
 鷲は アントゥを 見るや 首を 伸ばし 嘴を 張りつつ

xesu-ren;

says

言う。

(115) xerile xerilenani xerigeige.

(spell)

(呪文)

(116) chocho shi doledi-ro, beti kimu-de anchi.

young man you listen we grudge not have
若者よ 聞きなさい。我々は 恨みも ない。

(117) shi iau ne-mi eme-xe-shi.

you what do came
お前は 何を しに 来たのか。

(118) mine-we zhiafan-xe-shi, beti bakechi-mai.

me came to get we fight each other
私を 捕らえに来たのか。(それなら)我々は 打ちあおう。

(119) bi sagedine-xe-n-de shin-du bai daxu-rshe-i. arang ...

I grew old-even by you easily not be beaten
私は 老いたとはいえ お前に 簡単に 負けはしない。

When it sees Antu, the eagle, extending his neck and stretching his beak,
says to him;

Xerile xerilenani xerigeige.

Listen, young man, we have no grudge against each other.

What have you come to do ? If you have come to get me, let's fight each other.

Although I am old, I'm not beaten by you easily. Arang ...

(120) kiakechin xesu-mi odi-mi-du antu bei-le-n xukuchui-ni.

eagle say finish Antu body fall
鷲は 言い 終えるや アントウの 身体に 倒れかかる。

(121) antu kiakechin zhu dekese-u-ni zhafu-mi-du bakechi-mi

Antu eagle two wing catch beat
アントウは 鷲の 二つの 羽を 掴むや 叩き

deru-xe-n. (122) na-du bunburi-ti, eshdu kiakechin xorun-du
 began ground roll about for a while eagle upper part
 始めた。 (彼らは) 大地に 転げ回る。 しばらくは 鷲が 上に

odurgi-ren, eshdu antu xorun-du odurgi-ren. (123) ekechi
 becomes for a while Antu upper part becomes in this manner
 なり、 しばらくは アントウが 上に なる。 こうして

ibe guida-mi bakechi-xe-ti. (124) kiakechen emachi terimete-rshe-n
 very long time beat eagle a bit not withstand
 かなり 長いこと 彼らは叩きあった。 鷲は 少し 耐えられなく

da-xe-n, antu-du farxe-u-mi digeda-u-xe-n. (125) zhu
 became Antu be beaten down be held both
 なり、 アントウに 叩き倒され 押さえられた。 (アントウは鷲の) 両

begede-le zhu dekesee-u-ni xeruke-mi-du xinale-re xotun-dule
 paw both wing tie shoulder town
 脚に 二つの 羽を 巻きつけるや 背負って 街に

emergi-ni.
 comes back
 戻る。

Soon after having said this, the eagle falls on Antu's body. Antu catches both wings of the eagle and begins to beat it. They roll about on the ground. For a while the eagle is on Antu, for a while Antu is on the eagle. In this manner they beat each other for a long time. The eagle begins to not withstand it and is beaten down and held by Antu. Antu ties both the eagle's wings to its paws and shoulders it and brings it back to the town.

(126) xotun gurun antu kiakechen-me zhafu-re gazhirgi-xe-n
 town people Antu eagle get brought
 街の 人たちは アントウが 鷲を 捕らえて 持ってきた

nemi doledi-re shaxu maketeuchi-ti. (127) antu erile-mi ili-re
 so hear all admire Antu surround stand
 と 聞いて みな 称賛する。 アントウを 囲んで 立ち

ei-ue medele-re ta-ue medele-re nei-ti. (128) xotun ezhin mafa
 this ask that ask do town leader old man
 これを 尋ね あれを 尋ね する。 街の 長の 老人は

mura agedene-ren, antu-we sauli-xe-n. (129) antu-we xibukuchi-mi
 very be glad Antu invited Antu encourage
 たいへん 喜び、 アントゥを 招いた。 (彼は) アントゥを 励まして

na aishin da-u zhafau-kunei-ni.
 again golden salmon make get
 再び 金の 鮭を 捕まえさせる。 [金の鮭を捕まえるようにと励ます。]

(130) zhutin inin antu na eiki gulune-xe-n. (131) emadi
 next day Antu again eastward left several
 翌 日 アントゥは また 東へ 出発した。 何

inin dulune-xe-n, antu aishin da-ue zhafu-re gazhirgi-xe-n.
 day passed Antu golden salmon get brought
 日か 経って、 アントゥは 金の 鮭を 捕らえて 持って来た。

Having heard that Antu had got and brought the eagle, all the people of the town admire him. Surrounding him, they ask Antu about one thing or another. The old man, the leader of the town, is very glad and invites Antu. He encourages Antu again to get the golden salmon. The next day, Antu leaves for the east again. Several days pass. Antu gets the golden salmon and comes with it.
 (To be continued)

References

- An, Jun (1986): *Hezheyu jianzhi* (= Compact Hezhen Grammar). Peking (Minzu Chubanshe). [安俊：赫哲語簡志。北京（民族出版社）]
- Chaoke (1997): *Man-Tonggusizhuyu Bijiaoyanjiu* (= Comparative Study of Manchutungus Languages). Peking (Minzu Chubanshe). [朝克：滿一通古斯諸語比較研究。北京（民族出版社）]
- Sunik, O.P. (1958): *Kur-Urmijiskij dialekt*. Leningrad (Akademia nauk SSSR).
- Tamura, Kenichi (1996): Die elativische Funktion des tungusischen Instrumentals — Unter besonderer Berücksichtigung des Nanai —. In: *Meijo-Shogaku (The Journal of Commerce and Economics)*, vol.45, Humanities Number, pp.137-151, (The Society of Commerce, Meijo University, Nagoya, Japan). [名城商学, 第45巻別冊, 137-151 頁, 名城大学商学会]

Zhang, Yanchang/ Zhang, Xi/ Dai, Shuyan (1989): *The Hezhen Language*. Changchun
[長春] (Jilin University Press [吉林大学]).

文法関係に関わる格付与の原理について ーフィンランド語における主格表示の分析を通してー

佐久間淳一

(名古屋大学大学院文学研究科)

jsakuma@lit.nagoya-u.ac.jp

0. はじめに

フィンランド語には、主格・属格・分格・様格・変格・内格・入格・出格・所格・向格・離格・共格・欠格・具格の14の格があるが、その大半は名詞句の表す意味に対応して選択されている¹⁾。例えば、語尾 *-sta/-stä* を持つ出格は、(1)では「～からの」という意味を表しており、(2)では「～について」という意味を表している。

(1) *juna* *Helsingistä*
列車-単主 ヘルシンキ-単出
ヘルシンキからの列車

(2) *tieto* *onnettomuudesta*
情報-単主 事故-単出
事故についての情報

それに対して、主格・属格・分格は、少なくともその一部の用法において、名詞句の表す意味に直接対応するのではなく、その名詞句が文中で果たす文法機能に対応して選択されている。例えば、主格は主語を表示することができるが、主語が持つ意味役割は動作主であったり経験者であったりするので、主格は特定の意味役割に対応しているわけではない。その名詞句が文中で主語の働きをしているために、意味役割に関わらず主格で表示されているのである。

このこと自体は、フィンランド語に限らず、比較的多数の格を有する多くの言語に見られることであり、さほど珍しい現象ではない。フィンランド語の格表示で問題になるのは、例えば主格が、主語ばかりでなく目的語も表示することができることである。例えば、次の命令文(3)、不定人称受動文(4)では、それぞれ目的語の *kirja*「本」が主格で表示されている。

(3) *Lue* *kirja* *loppuun!*
読め(命-2 単) 本を(単主) 最後まで(単入)
本を最後まで読め。

(4) *Kirja luettiin loppuun.*

本は(単主) 読まれた(受過) 最後まで(単入)

本は最後まで読んだ。

逆に、これらの文では、目的語を、通常目的語を表示するのに用いられる属格で表示することはできない。それでは、なぜフィンランド語では、主格が主語ばかりでなく目的語を表示するのに用いられるのであろうか。

論者は、拙論(1999、2001)において、その理由を、主格で表示される名詞句が文中で担う役割に求めた。すなわち、主格は、ある項が文中で「第一の参与項(primary participant)」である場合、そしてその場合にだけ、その項に付与されると考えたのである。フィンランド語における主格の分布に意味的な条件が関わっていることは明らかであり、上記の拙論で示したように、この概念を用いれば、フィンランド語の主格の分布に関わる現象を一通り説明することができる。しかし、「第一の参与項」とは具体的になんであろうか。この概念の一応の定義は、「ある文で描写されている状況に最も深く関与している項」が「第一の参与項」であるというものである。それでは、いかなる場合に、ある項が、文で描写されている状況に最も深く関与していると言えるのであろうか。そのように考えると、「第一の参与項」という規定には曖昧なところがあると言わざるを得ない。論者は、本研究の研究分担者として、フィンランド語における主格の分布のより適切な説明を追究するとともに、そのことを通して、言語一般における格表示のあり方についても考察を進めた。

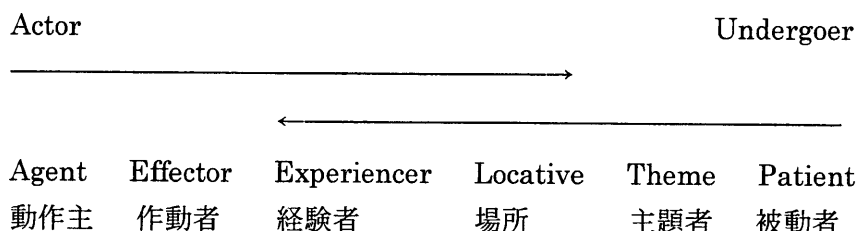
1. 意味的マクロロール

上で述べたように、フィンランド語の主格は目的語を表示することもでき、その場合の目的語の意味役割は、明らかに動作主や経験者ではない。文(3)や文(4)の場合であれば、目的語 *kirja*「本」の意味役割は被動者である。しかし、このことは、主格表示と項の持つ意味役割がまったく無関係であることを意味しているのではない。フィンランド語といえども、最も典型的に主格で表示される項の意味役割は動作主であり、また、最も典型的に属格で表示される項の意味役割は被動者なのである²⁾。

文法関係を表示する格が、意味役割と 1 対 1 で結びついているのではなく、複数の意味役割に対応し、しかしながら、ある特定の意味役割を持っている項を表示するのが最も典型的であるという状況を記述するには、「意味的マクロロール」という概念が有効であろう。意味的マクロロールは Actor と Undergoer からなり、それぞれ、他動詞がとる二つの項、すなわち主語と目的語が持つ意味役割に対応している。意味的マクロロールという所以は、Actor、Undergoer のそれぞれが複数の意味役割を包摂しているためである。Van Valin(1993:43)によれば、「マクロロールを設定する根拠は、文法構造において一群の意味役割が同列に扱われることに求められる」。例えば、格の付与において、異なる意味役割である動作主(Agent)、作動者(Effector)、経験者(Experiencer)がいずれも主格で表示される

現象は多くの言語で観察される。このことは決して偶然ではない。この現象は、マクロロールを用いることで適切に説明することができる。すなわち、動作主も作動者も経験者も Actor というマクロロールに包摂することができ、このことが主格表示の理由なのである。同様に、多くの言語では、被動者(Patient)、主題者(Theme)、経験者(Experiencer)がいずれも対格で表示されるが、これは、これらの意味役割が Undergoer というもうひとつのマクロロールに包摂されているためである。そもそも意味役割については、言語の一般理論において、いったいいくつを区別すれば適当か、明確な答えを出すのは容易ではない。しかし、意味役割の間にある種の階層関係が成り立っていることは確かであろう。Van Valin(1993:44)は以下のような階層を提案している。

(5) Actor-Undergoer Hierarchy



この階層が意味するのは、「スケール上、左に現れる意味役割ほど Actor になりやすく、右に現れる意味役割ほど Undergoer になりやすい」(同上)ということである。どれだけ典型的な Actor あるいは Undergoer であるかという観点に基づく意味役割間の上記の階層関係は、Van Valin(1993)の他、多数の研究が示すように、さまざまな言語における事例によって裏付けることができる。

それでは、この意味的マクロロールは、フィンランド語の主格や属格による格表示をも適切に説明することができるのであろうか。確かに、フィンランド語でも、最も典型的に主格で表示されるのは動作主の意味役割を持った項であり、一方、上記の階層からわかるように、動作主は最も典型的な Actor である。しかし、文(3)や文(4)に見るように、主格は被動者の意味役割を持つ項にも付与されることがある。被動者は階層の右端にあり、Undergoer ではあっても Actor ではあり得ない。したがって、フィンランド語では、主格が、Actor である項も Undergoer である項も表示していることになり、意味的マクロロールは、フィンランド語における主格の分布の説明に有効でないように思われる。

2. 主格で表示される項

それでは、ここで、フィンランド語ではどんな項が主格で表示されるのか、振り返ってみることにしよう。まず、主語は通常主格で表示される。

(6) *Pekka luki kirjan.*

ペッカが(単主) 読んだ(3 単過) 本を(単属)

ペッカは本を読んだ。

この文の主語である文頭名詞句 *Pekka* は動作主であり、明らかに Actor として働いていて、主格で表示されている。

存在文や所有文で動詞の後に現れる項も主格で表示することができる。

(7) *Pihalla on lapsi.*

庭に(単所) いる(3 単現) 子供が(単主)

庭には子供がいる。

この文において主格で表示されている *lapsi* が持っている意味役割は主題者であり、これは明らかに Actor ではない。

上で述べたように、フィンランド語では目的語も主格で表示される場合がある。文が命令文であったり、不定人称受動文であったりする場合がそのひとつで、もう一度例文を繰り返せば、次のような例がこれにあたる。

(8) *Lue kirja loppuun!*

読め(命-2 単) 本を(単主) 最後まで(単入)

本を最後まで読め。(=(3))

(9) *Kirja luettiin loppuun.*

本は(単主) 読まれた(受過) 最後まで(単入)

本は最後まで読んだ。(=(4))

しかし、目的語が主格で表示されるのはこの場合だけではない。例えば、次のような義務を表す構文(necessive construction)においても、目的語が主格で表示されることがある。

(10) *Sinun täytyy lukea kirja loppuun.*

君が(2 単属) ねばならない(3 単現) 読む(1 不) 本を(単主) 最後まで(単入)

君は本を最後まで読まなければならない。

この構文は常に第 1 不定詞を伴い、第 1 不定詞の目的語 *kirja* が主格で表示されている。注目すべきことに、この文では文全体の主語である *sinun* はむしろ属格で表示されており、一見、主語と目的語の表示が逆転しているように見える。

第 1 不定詞の目的語が主格で表示されるのは義務を表す構文ばかりではない。義務を表

す構文でなくても、命令文であれば、主動詞が取る第 1 不定詞の目的語が主格で表示されることがある。

- (11) *Yritä keksiä uusi kone!*
試みよ(命・2 単) 発明する(1 不) 新しい(単主) 機械を(単主)
新しい機械を発明してみよ。

この文で不定詞の目的語 *uusi kone* が主格で表示されるのは、上の(8)と同じく、命令文であることによると考えられる。しかし、命令文でも不定人称受動文でも、また義務を表す構文でもないのに、不定詞の目的語が主格で表示される場合もある。例えば、次の文では、第 1 不定詞が直前の名詞を修飾していて、その目的語が主格で表示されている。

- (12) *Lautakunta hyläsi suunnitelman manipuloida geeni.*
委員会が(単主) 却下した(3 単過) 計画を(単属) 操作する(1 不)
遺伝子を(単主)
委員会は遺伝子操作の計画を却下した。

この文では、不定詞句が修飾している名詞句の方は属格であるのに、不定詞句の目的語 *geeni* は属格でなく主格になる。

目的語が主格で表示されることがあるのは第 1 不定詞ばかりではない。次の文はやはり命令文であるが、第 3 不定詞の目的語 *uusi kone* が主格で表示されている。

- (13) *Kehota Pekkaa keksimään uusi kone!*
励ませ(命・2 単) ペッカを(単分) 発明する(3 不入) 新しい(単主) 機械を(単主)
新しい機械を発明するようペッカを励ませ。

一方、次の文の第 3 不定詞は、目的語と共に主節の付加句として働いている。

- (14) *Se tapahtuu manipuloimalla geenin.*
それが(単主) 起こる(3 単現) 操作する(3 不所) 遺伝子を(単主)
それは遺伝子を操作することによって起こる。

この文でも、第 3 不定詞の目的語 *geeni* は主格で表示されているのである。

さらに、第 2 不定詞具格形の目的語も主格で表示されることがある。例えば、次の文では、第 2 不定詞の目的語 *virhemarginaali* が主格で表示されている。

- (15) *Virhemarginaali huomioon ottaenkin ero on*
 誤差を(単主) 考慮に(単入) 入れる(2 不具) 差が(単主) である(3 単現)
raju.
 著しい(単主)
 誤差を考慮に入れてもなお差が著しい。(SK87:22-203)³⁾

上の例文(7)~(15)で主格で表示されている目的語はいずれも Actor ではない。また、例文(7)のような存在文や所有文で主格で表示されている項の意味役割は主題者であるが、存在文や所有文の意味内容を考えれば、この項は、Actor でないのはもちろん、Undergoer であるとも言い難い。つまり、存在文や所有文における主題者項は、Actor と Undergoer の対立に関して中立的であると言うことができる。ならば、フィンランド語では、Actor である項と共に、Actor と Undergoer の対立に中立的な項も主格で表示されると考えればよいのであろうか。つまり、フィンランド語で文法機能を担っている項は、Undergoer でさえなければ、主格で表示され得ると考えてよいのであろうか。

この仮説は、上の例文(8)~(15)を見れば、直ちに成り立たないように思われる。なぜなら、これらの例文で主格で表示されているのは目的語であり、これらが Undergoer であるとすれば、Undergoer である項が主格で表示されていることになるからである。ここで注意しなければならないのは、これらの例文で目的語が主格で表示されている動詞の主語は、文中に現れないか、また現れても主格形では現れないということである。例文(8)(9)では主動詞が主格の目的語を取っているが、この動詞の主語は文中に現れない。また、例文(11)(12)(14)(15)では不定詞が主格の目的語を取っているが、この不定詞の(意味上の)主語も文中に現れていない。例文(10)では確かに不定詞の意味上の主語 *sinun* が現れているが、属格で表示されているし、例文(13)でも、不定詞の意味上の主語 *Pekkaa* は分格で表示されている。例文(13)の場合、主節の動詞 *kehottaa* は、いわゆる目的語コントロール動詞であり、不定詞の意味上の主語 *Pekkaa* はむしろ主節の動詞の目的語として機能しているので、不定詞の主語は表面上表されていないということもできる。というように、これら目的語が主格で表示される動詞の主語は、主格で現れることはないのである。このことは、これらの文あるいは不定詞句において、主語である Actor 項が抑制されていることを意味している。そして、そうであるならば、これらの文で主格で表示されている目的語を、完全な Undergoer であると言うことはできないであろう。なぜなら、Undergoer は Actor の存在を前提として成立しているからである。これは、例文(10)のように、主語が属格で表示されている場合も同様である。なぜなら、例文(10)の主語 *sinun* は省略可能であり、また、この場合、主語の指示対象である 2 人称単数代名詞すなわち聞き手は、自発的に行動するのではなく、義務づけられて行動するのであるから、完全な意味での Actor 項であるということとはできない。したがって、目的語の方も完全な意味での Undergoer 項と言うことはでき

ないのである。

なお、主語が属格で表示されれば、いつでも目的語が主格で表示されるわけではない。例えば、次のような分詞構文では、従属節である分詞節の主語が属格で表示されていても、その属格主語がある限り、分詞節の目的語が主格で表示されることはない。

- (16) *Pekka kertoi Liisan keksineen uuden koneen.*
ペッカが(単主) 語った(3 単過) リーサが(単属) 発明した(過分) 新しい(単属)
機械を(単属)
ペッカは、リーサが新しい機械を発明したと言った。

これは、従属節で描写されているのが、従属節の主語の指示対象によって遂行された行為であり、この場合の主語は属格で表示されていても、完全な意味での Actor であると考えられるからである。したがって、従属節の目的語は Undergoer であり、主格で表示することはできないのである。

以上のことから、次のように仮定することができるだろう。すなわち、例文(8)~(15)では、存在文や所有文の場合と同じように、Actor と Undergoer の区別が中和されており、これらの文で主格で表示される目的語は、存在文や所有文で主格表示される項と同様、意味役割として主題者の役割を担っているのである。

この想定を正当化するためには、目的語が主格で表示される文や不定詞句がどのような意味内容を持っているかを考える必要がある。まず、例文(8)(11)(13)のような命令文で描写されているのは、行為そのものではなく、その行為をしなければならないという義務である。このことは、命令文においては、行為そのものの過程よりも期待される状態が行為によってもたらされることの方がより重要であることを意味している。同様のことは、例文(10)のような義務を表す構文についても言うことができるだろう。一方、不定人称受動文でも、描写されているのは行為そのものではない。なぜなら、不定人称受動文では行為者が特定されないからである。不定人称受動文でも、行為の結果もたらされる状態が描写されているのである。さらに、例文(12)の不定詞句も行為そのものを描写しているのではない。なぜなら、この不定詞句は先行する名詞句を修飾していて、その名詞句の中身を説明しているからである。最後に、例文(14)(15)の不定詞句も、行為そのものを描写しているとは考えられない。どちらの不定詞句も、主節の動詞の項として働いているのではなく、付加句として働いている。例文(14)の場合、不定詞句は、主節で述べられている内容が成立するための前提を述べており、したがって、不定詞句は行為そのものではなく、行為によってもたらされた状態を描写しているということができる。また、例文(15)の不定詞句は、主節で述べられている内容が実現する際の付随的な状況を述べている。したがって、不定詞で表される行為の過程そのものは、文全体の意味にとって重要なものではないのである。

以上のことから、目的語が主格で表示される文や不定詞句では、述語が表す行為の過程そのものが描写されているのではないことがわかる。ゆえに、これらの文や不定詞句では、その目的語を完全な意味での Undergoer であると考えすることはできない。これらの文や不定詞句では、多かれ少なかれ行為の結果もたらされる状態が描写されており、状態が描写されているという点では、存在文や所有文と同様である。存在文や所有文で主格で表示されている項は主題者項であるから、これらの文や不定詞句で主格で表示される目的語も、同じように主題者項であると考えことは可能であろう。

3. 第一の参与者項

拙論(1999, 2001)において、論者は、主格で表示された目的語を第一の参与者項と規定した。上で見たように、主格で表示される目的語が現れる文あるいは不定詞句には、本来第一の参与者項たるべき主語が現れないのであるから、主格で表示された目的語を第一の参与者項と見なすことはあながち不当なことではない⁴⁾。加えて、その文あるいは不定詞句で描写されているのが行為の過程ではなく行為の結果としての状態であるなら、主語よりも目的語を第一の参与者項とみなす十分な理由がある。

しかしながら、主格で表示された主語と同じく主格で表示された目的語の間には、大きな違いがあることにも注意しなければならない。すなわち、目的語のみが、指示対象の量的性質に合わせて分格と交替できるである。次の文に見られるように、目的語の指示対象が量的に不定である場合、目的語は主格でなく分格で表示される。

- (17) *Sinun täytyy lukea kirjoja.*
君が(2 単属) ねばならない(3 単現) 読む(1 不) 本を(複分)
君は本を読まなければならない。

この文は義務を表す構文であるが、目的語の *kirjoja* は分格になっている。例文(10)と比較されたい。ここで目的語が分格になっているのは、目的語の指示対象が複数であるため、量的に不定であるからである。指示対象が量的に不定である場合に主格と分格が交替する現象は、存在文、所有文の動詞の後に現れる項でも観察される。例えば、次の存在文では、動詞の後に現れる項の指示対象が複数で、量的に不定であるため、分格で表示されている。例文(7)と比較されたい。

- (18) *Pihalla on lapsia.*
庭に(単所) いる(3 単現) 子供が(複分)
庭には子供が(何人か)いる。

一方、Actor である主語は、その指示対象がたとえ量的に不定であっても、分格で表示されることはない。たとえば、次の文の主語 *opiskelijat* は、人数が特定されていないため量的に不定であるが、分格ではなく主格で表示されている。

(19) *Opiskelijat marssivat soihtu kädessä.*

学生が(複主) 行進した(3 複過) 松明を(単主) 手に(単内)

学生たちは松明を手を持って行進した。

これらの例文からわかることは、主題者の意味役割を担っている項は分格で表示することができるが、Actor である項は分格で表示することができないということである。ちなみに、Undergoer である項は分格で表示することができる。例えば、次の文では、目的語の指示対象が複数で量的に不定であるため、目的語が分格で表示されている。例文(17)と比較されたい。

(20) *Lomalla luen kirjoja.*

休暇に(単所) 読む(1 単現) 本を(複分)

休暇には本を読む。

この文の目的語 *kirjoja* は明らかに Undergoer である。このことは、文法機能を担っている項は、Actor でない限り分格で表示することができるということを意味している。そうだとすれば、第一の参与者項という概念は、フィンランド語で文法機能を担っている項の格表示を説明するには不十分と言わざるを得ない。なぜなら、第一の参与者項である Actor は分格で表示することができないのに、同じ第一の参与者項である主題者項は分格で表示することができるからである。

それではなぜ、Actor は分格で表示することができないのであろうか。分格は、文、節あるいは不定詞句が無限界の状況(unbounded situation)を表しており、項の指示対象がその状況に部分的に関わっている場合に付与される。Leino(1991)は、限界性の状況を次のように定義した⁵⁾。すなわち、ある行為あるいは事態に何らかの限界が想定されるならば、それは限界性の状況である、というのである。限界性の状況の場合、項はすべてその状況に全体的に関わっていると見なすことができる。一方、無限界の状況の場合、限界が想定されないからといって、すべての項がその状況に部分的にしか関わっていないわけではない。無限界の状況であっても、Actor は常に状況に全体的に関わっている。無限界の状況において、Undergoer や主題者項を分格で表示できても、Actor を分格で表示することができないのは、このことと関わっているだろう。

ところで、次の文では、主語が分格で表示されているのではないだろうか。

(21) *Pihalla leikkii lapsia.*

庭で(単所) 遊ぶ(3 単現) 子供が(複分)

庭で子供たちが遊んでいる。

この文のように、主語が動詞の後に現れると、それを分格で表示することができる。もし、上で述べたように、Actor は分格で表示することができないのであれば、なぜこの文の主語は分格で表示されているのだろうか。実は、この文の主語は、存在文や所有文で動詞の後に現れる項とある種の共通性を持っているのである。というのも、この文の主語 *lapsia* も、文(18)で動詞の後に現れている項 *lapsia* も、その指示対象は既知のものではなく、文脈に新しく導入された要素であるからである。つまり、文(21)のように主語が動詞の後に現れている文は、存在文や所有文と同種の語用論的情報を伝達しているのである。そうであるならば、文(21)の主語は、Actor というよりはむしろ主題者項に近く、したがって分格で表示することができるのである。

以上のことから、目的語の格表示には、その項が主題者項であるかどうかに関わっていることがわかる。つまり、目的語は、主題者項である場合にのみ主格で表示することができるのである。主題者項は、このように目的語である場合もあるが、文(21)のように主語であることもある。また、存在文や所有文で動詞の後に現れる項のように、主語でも目的語でもないこともある。いずれにせよ、主題者項は、Actor と Undergoer の区別が中和される環境に現れる。したがって、完全な意味での Actor が存在する場合には、目的語が主題者項になることはない。同じように、動詞が他動詞であれば目的語が存在するので、その場合には、主語が主題者項になることはないのである。

4. 結論

ここで要点をまとめてみよう。Actor と Undergoer の区別は、フィンランド語で文法機能を担う項の格表示を説明するのににも有効である。しかし、次のような単純な図式では、文法機能を担う項の格表示を十分に説明することはできない。

(22)

Actor	Undergoer
主語	目的語
主格	属格

フィンランド語では、Actor でも Undergoer でもない主題者項が一定の文法機能を担っている。そして、主格は、Actor や主題者項には付与することができるが、Undergoer には付

与することができない。一方、分格は、Undergoer や主題者項には付与することができるが、Actor には付与することができない。したがって、主題者項は、主格でも属格でも表示することができる。他方、属格は Undergoer にしか付与することができない。例文(10)や例文(16)では主語が属格で表示されているが、主語が属格で表示されるのは、その主語が非定形動詞の主語である場合に限られている。非定形動詞はいわば動詞の名詞的形態であり、非定形動詞の主語の属格表示は、この名詞性によって説明することができる。なぜなら、次の例からもわかるように、フィンランド語では、名詞的要素の意味上の主語は一般に属格で表示されるからである。

- (23) *koneen tulo*
 飛行機(の単属) 到着(単主)
 飛行機の到着

したがって、この種の属格表示は目的語の属格表示とは性質を異にしているのである。

以上のことから、フィンランド語で文法機能を担う項の格表示は、次のような図式によって説明することができる。

(24)

Actor	主題者	Undergoer
主語	目的語	
	非主語・非目的語	
主格 ⁶⁾	主格	属格 ⁷⁾
	分格	分格

注

- 1) 伝統文法では、単数の目的語を表示する格は対格と呼ばれる。しかし、対格としての独自の形式を持っているのは人称代名詞だけで、他の名詞の対格は、単数では属格と、複数では主格と同じ形式になる。よって、本稿では人称代名詞以外の名詞に関しては、「対格」という述語を用いない。
- 2) 属格は所有者も表すが、ここではその用法については考慮しない。
- 3) ‘SK87’は、この例文を、週刊誌 *Suomen kuvalehti* 誌の 1987 年度の本文データから構成されたコーパスから引いたことを示す。コロンの後の数字は、号数とその号の中で文番号を表している。
- 4) 文(10)のような義務を表す構文には主語が現れるが、この属格で表示される主語を第一の参与者項と見なすのは難しい。なぜなら、この主語は省略可能であり、また、この

主語の指示対象は、自発的に行為を遂行するのでなく、義務としてその行為を行うに過ぎないからである。

- 5) 限界性の概念については Heinämäki(1984)や Sakuma(2000)も参照のこと。
- 6) 述語が定形でないとき、主格は属格に交替する。
- 7) 項の指示対象が複数のとき、属格は主格に交替し、人称代名詞のときは対格に交替する。ただし、項の指示対象が複数の場合は、普通分格が用いられ、主格が使われることはほとんどない。これは、指示対象が複数の場合、通常は量的に不定になるためである。次の文に見られるように、指示対象の定性の度合いが極めて高い場合にのみ、主格で表示することができる。

i) *Luin nämä kaikki kirjat loppuun.*
 読んだ(1単過) これら(複主) すべての 本を(複主) 最後まで(単入)
 私はこれらすべての本を最後まで読んだ。

略号

単 - 単数	複 - 複数	主 - 主格
属 - 属格	分 - 分格	内 - 内格
入 - 入格	出 - 出格	所 - 所格
具 - 具格	現 - 現在	過 - 過去
受 - 不定人称受動	命 - 命令法	不 - 不定詞
過分 - 過去分詞		

参考文献

- Heinämäki, Orvokki. 1984. Aspect in Finnish. C. de Groot & H. Tammola(eds.), *Aspect Bound. A voyage into the realm of Germanic, Slavonic and Finno-Ugric aspectology*: 153-176. Dordrecht: Foris.
- Leino, Pentti. 1991. *Lauseet ja tilanteet*. Helsinki: Suomalaisen Kirjallisuuden Seura.
- Sakuma, Jun'ichi. 1999. On the Mechanisms of the Non-lexical Case Assignment In the Finnish Language. 『名古屋大学言語学論集』 15: 171-195.
- Sakuma, Jun'ichi. 2000. On Adverbial Phrases Expressing Duration or Distance in the Finnish Language. 『名古屋大学文学部研究論集』 136: 71-82.
- Sakuma, Jun'ichi. 2001. The Nominative and the Genitive in the Finnish Language. *Proceedings of the Ninth International Congress for Finno-Ugric Studies*. Pars VI 113-121.
- Van Valin, Robert D., Jr. 1993. A Synopsis of Role and Reference Grammar. Robert D. Van Valin, Jr. (ed.), *Advances in Role and Reference Grammar*: 1-164. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.

北ゲルマン語後置定冠詞の分布について

櫻井 健

愛知県立大学外国語学部

0. 導入

言語を基準としたヨーロッパの地図を考えてみる。たいていの場合、言語の系統的関係が想起されるものである。共通してロマンス諸語を用いているイタリア、フランス、スペイン、ポルトガルなどは、物理的に隣接していることを除外しても、統一的に見られる傾向があるし、ドイツ、オランダあたりも地理的のみならず言語的にある種の連続体をなしているともみなされがちである。こうした見方はけっして誤りではなく、類型的視点をもってしてもこれらの言語間の差異が多く、点で少ないのも事実である。しかし当然のことながら言語間の類似は系統によるものだけではない。系統的には関連性の薄いバルカン半島の諸言語では類型的な共通特長が多く発達しており、非系統的な類似の典型的な例を提供してくれる。⁽¹⁾ Sandfeld(1930)をはじめ、これらのバルカン諸言語でのいわゆる定冠詞後置などの共通特性の発達については多くの研究がなされ、こうした共通特性獲得の環境として「言語帯 Sprachbund」という概念が導入されている。

バルカン半島に限らずヨーロッパではこのような現象を数多く認めることができる。なかにはマクロ的に見るべき例もあり、例えば Pisani(1974)は西ヨーロッパ諸語における固定アクセントと東ヨーロッパ諸語における移動アクセントとの境界線を言語帯の現象として挙げている。この境界線はバルト海からフィウメ湾まで延びていて、スラブ諸語を大きく2つに分けている。このスラブ語の分類はいわゆる系統的な3つのグループへの分類とは一致しない。⁽²⁾西ヨーロッパ諸語にもこのような特性の共有現象は多く観察される。⁽³⁾そうした視点からの再分析の結果引かれる境界線は系統的な言語グループを分断するし、逆に系統的に無関係な言語群を統合したりする。こうした現象が時間的・空間的に重複すれば系統関係は次第に見えにくくなる。もちろん隣接した言語間には、それが言語帯の形成には至らなくても、言語接触による言語変化の可能性が常に存在する。言語変化そのものによって、系統関係はあまり大きな意味を持たない。同系の言語で同様の現象が起こるのは、系統が同じだからではなく、類似した環境に動機付けられているからと考えるほうが妥当だろう。本論文では北ゲルマン諸語の定冠詞に着目し、その由来と分布について他の大陸諸語との共通性の獲得という視点で分析を試みる。定冠詞を基準に考えると西ヨーロッパは周辺部と異なる位置特性を統一的に持っている。北ゲルマン諸語は西ヨーロッパとその周辺部の境界によって分断されているともいえるのである。

1. ゲルマン語の分類

19 世紀以来、ゲルマン語の分類にはさまざまな提案がなされてきた。⁽⁴⁾もちろん、ゲルマン諸語が東、西、北の 3 グループに大分類されることは一般に受け入れられているといつてよいが、それでも西ゲルマン諸語を他のグループと同じレベルで見てよいかについて疑問がないとはいえない。分類における主たる論点は、これら 3 つのグループ間の相互関係である。ある特徴に関しては東と北は共通性を示し、また他の特徴では西の一部と東が共通性を示していたりする。要するに、相互に言語的に近く地理的にも隣接する言語間の分類に系統樹のような関係を想定するのが無理なのだともいえよう。現代において直接観察できる言語帯の現象などを考えれば理解は容易である。

西ヨーロッパにおける言語帯的現象はさまざまなレベルで生じている。伝統的な言語境界線を越えて分布する現象としての分析つまり言語帯であるという認定のほうが、言語群の分析という用途に対してより高い妥当性を示す場合もあるだろう。いずれせよ完全な意味での言語境界線は存在しない。ある言語現象の等語線が存在し、その東がおおよそその言語境界線を形成していると考えたほうが正確である。ここでは定冠詞の位置という言語現象の成立過程を概観する。これによって伝統的な言語境界線ではない境界線が示唆する意味を考えたい。

2. ユトランド半島におけるデンマーク語方言

ユトランド（デンマーク語でユラン Jylland）半島を東西に北ゲルマン語と西ゲルマン語の言語境界線、つまりデンマーク語とドイツ語の境界が走っている。⁽⁵⁾境界線より北側で使用されている現代デンマーク語の方言は次のように分類される。

- (1) 北東ユラン方言 Nordøstjysk
- (2) 東ユラン方言 Østjysk
- (3) 北西ユラン方言 Nordvestjysk
- (4) 西ユラン方言 Vestjysk
- (5) スレスヴィ方言あるいは南ユラン方言 Slesvigsk / Sønderjysk⁽⁶⁾

ユラン方言全体の言語的特長としてまず挙げるべきなのは、いわゆるユラン方言語末音消失 jyske apokope である。全体に音声的な摩滅の進行度合い高いデンマーク語諸方言の中でもユラン方言ではこの過程が標準語などと比較してさらに進んでいる。スカンジナビア全体でとくに語末音消失が進行しているのはスウェーデン北部やノルウェー北部の辺境とこのユトランド半島である。

3. ユラン方言の定冠詞位置

音的現象以外でユラン方言の特徴でもっとも人目を引くものは、北ゲルマン諸語で一般的な定冠詞後置がここでは認められないことである。ユラン方言すべてで定冠詞後置がないわけではない。上記の(3)～(5)が定冠詞後置をしない方言に該当し、(1),(2)では定冠詞は後

置されうる。したがって定冠詞を前置するか後置するかを基準としてデンマーク語ユラン方言は大きく二分されることになる。そればかりでなく、この等語線はヨーロッパ全域をも分けている。前置する地域は低地ドイツ語地域に隣接しており、定冠詞前置という北ゲルマン語としては破格の現象が生じた動機は言語接触によるという指摘もある。⁽⁷⁾直接言語接触の結果だとはいえなくとも、この現象がヨーロッパ全域から俯瞰して定冠詞がヨーロッパ諸語における言語帯的分布を示しているなら、定冠詞前置は西ヨーロッパ的特長であり、後置はその周辺部に見られる現象とみなすことについて問題はないだろう。

4. 北ゲルマン諸語における定冠詞位置

定冠詞の位置について、すべてを前置するユラン方言の一部を除いて、北ゲルマン語地域では名詞のみの規定に対してはかならず後置されるという点は共通する。一方形容詞を含んだ名詞句の規定となると事情は異なってくる。標準デンマーク語では

定冠詞・形容詞・名詞

のようにドイツ語や英語などの西ゲルマン諸語とまったく同じ語順となる。これに対して他の大陸北ゲルマン諸語では

定冠詞_k・形容詞・名詞+定冠詞_j

のように名詞に定冠詞が後置されることが名詞が裸で現れる場合と一貫する上に、さらに定冠詞を前置することが一般的に行われている。これを剩余的規定と呼ぶ。⁽⁸⁾

北ゲルマン語では、定冠詞カテゴリーが統語論的に二分されている。標準デンマーク語では前置定冠詞と後置定冠詞は補完的に分布し、それ以外では分布が部分的に剩余的である。形容詞を含む名詞句の場合、北ゲルマン諸語の定冠詞は大陸の西ゲルマン諸語との連続性を示すが、名詞のみの規定の場合にはまったく分断されている。次図の示すように、ユラン方言は西ゲルマン諸語と標準デンマーク語を結びつける役割を果たしている。

位置	West Germanic languages	Jysk ⁽⁹⁾	Other Danish Dialects	Other North Gmc languages	Icelandic
N+Art	-	-	+	+	+
Art Adj N	+	+	+	-	-
Adj N+Art	-	-	-	-	+
Art Adj N+Art	-	-	-	-	+/-

このような分布がいかにして成立したかを考えることで、どのようにして文法的特長が伝播してゆくかのモデルを立てることも可能になる。

5. 北ゲルマン諸語の定冠詞成立過程

定冠詞を名詞に後置するのは一部を除いて現代北ゲルマン諸語に共通する現象である。この特徴は他のゲルマン諸語には見られないもので、北ゲルマン諸語を他のゲルマン諸語と分類する基準となる。他の西ヨーロッパ諸語の定冠詞と同様、最初から範疇として成立していたわけではなく、最古層の文献では定冠詞は体系的に使用されているとはいいがたい。もちろんゲルマン祖語の再建に際して定冠詞の範疇は想定しようがなく、北ゲルマン諸語においても定冠詞は分化後に個別に発達したものである。他のゲルマン諸語やロマンス諸語と同様に、指示性の強い代名詞から次第に文法化されていく過程を経て北ゲルマン諸語の定冠詞も発達したと考えられる。北ゲルマン諸語の場合これが他の西ヨーロッパ諸語と異なり後置される点がユニークなのである。

しかしながら少し観察する地域を広げてみると、定冠詞後置はさほど珍しい現象ではないことに気づく。最初にも述べたが、バルカン諸語は後置定冠詞の共有という特徴を持ち、これはバルカン言語帯の現象中もっともよく知られている。この地方の南スラブ諸語以外にも、ロシア語口語（標準的ロシア語には定冠詞は存在しないが）など、またアルメニア語などにも認められる。これら定冠詞の発達過程は、何語の場合でもそれほど違った形では想定されない。ヨーロッパ地域で最古の定冠詞範疇はギリシャ語であろうが、この文法範疇を文法家ごと導入したラテン語にはまだ定冠詞は存在していなかった。⁽¹⁰⁾

前述のように前置定冠詞しか持たない北西ユラン方言、西ユラン方言、南ユラン方言の各方言を除いた現代北ゲルマン諸語は定冠詞のカテゴリーには、前置されるもの、後置されるものの2つの形態的変種が含まれる。大陸北ゲルマン諸語では前置の要素は、すべて dental の破裂音を語頭に持つ点で共通している。島嶼北ゲルマン諸語のうちフェロー語は同様に dental の破裂音を語頭に持つが、アイスランド語ではこれとは違う h-で始まる要素が用いられる。後置定冠詞の形態的要素は語末が dental である点はすべての言語で共通するが、島嶼と大陸では、前者では摩擦音、後者では破裂音と多少の差がある。次の例で概観する：

Danish	korn·et	det gode korn
Icelandic	korn·ið	hið góði korn / góði korn·ið
Faroese	korn·ið	tað goða korn·ið
New Norwegian	korn·et	det gode korn·et
Swedish	korn·et	det goda korn·et
	‘the grain’	‘the good grain’

後置される要素は共通といってよい。各言語における差は、前述の剰余的規定が見られるかどうか、語頭音が dental か h-かどうか、に集約される。剰余規定については後述する。

アイスランド語の語頭音の *h* は他の言語に見られる要素と明らかに異なる。現代アイスランド語のいわゆる規範文法では、後置定冠詞は前置定冠詞から語頭音を取り除いたものと説明されるのだが、本来的に同じ要素が前置も後置もされていたという証拠はない。むしろ *h* を持つ系列(*hinn*)と持たない系列(*inn*)とは本来ある程度用法に差のある要素であった。なんらかの動機で前者は前置、後者は後置に出現個所を限定されたのであるが、この点をここで少し検証しておきたい。

5. 1. 初期北ゲルマン語

ゲルマン語の古い段階では、いわゆる形容詞の弱変化(*n-stem*)⁽¹¹⁾が限定に関わる機能に特化した最初の形態的カテゴリーであったと考えられる。現代のゲルマン諸語においてもこの特徴は保たれていると解釈できないこともないが、その機能は減じられており、他に限定辞のない単独使用は見られない。限定に関する機能は文法化された定冠詞などの限定辞に移行し、弱変化形容詞はそれらと共に起する場合にのみ現れる。

古層の北ゲルマン語文献では、次のような例が見られる：

- (1a) Gormr gamli
- (1b) Gormr hinn gamli
'Gorm the old'

どちらも意味的には差はないと思われる。前者では形容詞の弱変化によって先行する固有名詞を限定し、後者では指示代名詞 *hinn* によってこの限定がさらに補強された。時代が下るにつれ、このような指示代名詞との共起の機会は増加し、これが定冠詞の発達と関連性があるのは確かである。ただし、統語的特長がこの例に見られるような構成要素の順序に由来するかどうかを示す具体的な証拠はない。

その後定冠詞は各言語でさらに発達していくのだが、ある程度統計的に処理できる量の文献が発生するのはかなり時代が下ってからとなる。定冠詞の頻度は文法化の度合いを示すともいえるのだが、西ヨーロッパ諸語でもそれぞれに異なる。⁽¹²⁾19世紀にもなるとデンマーク語では名詞句の6割以上に定冠詞が伴っている例があるが、デンマーク語としては初期の13世紀の法文献ではせいぜい8~10%程度にとどまっており(Skautrup 1970)、この間に定冠詞の文法化が進行したことがわかる。デンマーク語はこの時期に多くの文法カテゴリーを失っており、定冠詞という新しい一致の文法形式を生産的に用いることでこれを補完してきたという側面もある。これに対して同時期に文法カテゴリーを失わなかったアイスランド語では相対的に定冠詞の頻度は低く、かつ類型論的に定冠詞の文法化を条件とする(と思われる)不定冠詞は発達していないなど、デンマーク語とは対照的な様相を示している。

北ゲルマン語の古層では一般名詞である *konungr* (王) が年老いている特長を持つ場合

の表現として

- (2a) konungr hinn gamli
(2b) konungr inn gamli
‘king the old’ or ‘the old king’

のような二つ異なった指示詞を用いることが可能だった。いうまでもなく hinn と inn という2つは現代語の前置定冠詞と後置定冠詞に見られる要素である。(2b)のように名詞に指示詞を後置することは最古層にも認められ、文献以前からの習慣と思われる。この指示詞 hinn と inn は印欧祖語として*-eno-と再建される要素をとともに含むのだが、前者にはさらに別の要素が組み合わさっていて、その点で異なる。この要素は*egh-のゼロ階梯で、一人称代名詞とも同じ由来を持つ、本来かなり強い意味を持つ限定辞である。⁽¹³⁾ *-eno-は一般的な指示代名詞的要素であり、たとえばギリシャ語の定冠詞もこれを含む。hinn と inn とでは明らかに指示の強さが異なることには留意が必要である。

先述のように、限定辞を伴うような環境で形容詞が名詞句に含まれる場合、かつては n-stem によってその限定辞と同様の機能が果たされていた。だからより限定辞への必要が高まってのとは形容詞を含まない裸の名詞への限定を示す場合であった。古い文献では inn 系列の限定辞は前置も後置も可能ではあったが、主として後置される例が多い。これが後置定冠詞の原型であろう。一方固有名詞の限定に見られた限定辞の形容詞に対する前置は、後に(2a)のような場合にも拡大されたと考えられる。これが前置定冠詞の原型で、後置定冠詞とは異なる由来を持つことになる。最古層では固有名詞に対する形容詞に限定辞が付く例しか認められないが、裸の名詞に限定辞が後続する例は見られる。このことは後置定冠詞と前置定冠詞とでは発達時期に多少ずれがあることを示唆する。両者の意味的、形態的特長もこれを支持する。後置定冠詞の原型は指示性も弱く、形態音韻論的にも強くない。これに対して前置定冠詞の原型はより強い指示性を持ち、形態音韻論的にもより強い。

この解釈は Grimm, Delbruck などの伝統的なものとは異なるが、⁽¹⁴⁾現代アイスランド語の hinn góði konungur ないし góði konungr-inn (どちらも ‘the good king’) という表現形がなぜ出現したかの説明がより合理的になされる点で妥当性が高いだろう。彼らのいうように、konungr inn góði のような場合から（前置後置と問わず）定冠詞が発達したとするならば、現代の表現との連続性は一度失われなければならない。一方 konungr hinn góði のような場合から前置定冠詞が生じたとするなら、元来 konungr = hinn góði と（意味論的にも統語論的にも）解釈できる。一般的な名詞句内の順序を取るようになる過程さえ想定できれば hinn góði konungur の出現は容易に想定できる。一方、góði konungr-inn のように後置定冠詞付きの名詞に形容詞が共起する場合、アイスランド語では剩余的規定が支配的ではない。デンマーク語以外にもこのような言語が存在すること、つまり名詞あるいは形容詞のどちらかに定冠詞がついていればよい言語が北ゲルマン諸語にあることは、後

置定冠詞と前置定冠詞の由来の違いを間接的に示す証拠である。

5. 2. 現代諸方言に至る過程

これまで北ゲルマン諸語の前置定冠詞と後置定冠詞の由来が異なることについて述べてきた。アイスランド語には大陸諸方言に見られるような dental の語頭音を持つ定冠詞は見られないが、一般に同じものと解釈される hinn/inn の 2 系列の定冠詞は、もともとの異なる由来を継承してきたための区別を保ってきたものであることを示した。それならば大陸諸語で見られる区別、つまり dental の系列とアイスランド語 inn に相当する系列の区別、もアイスランド語の区別と同じレベルで扱えることになる。問題は、大陸諸語ではなぜ dental の要素が特徴となっているか、に尽きる。

由来の異なる 2 つの定冠詞形式、hinn と inn は現代アイスランド語にはそのまま継承されている。これに対して他の北ゲルマン諸語では、アイスランド語と同じ島嶼諸語であるフェロー語まで、hinn 系列の前置定冠詞は用いられず、dental を語頭に持つ前置定冠詞形式（古層の北ゲルマン語での対応形式 þann で代表させておく）が一般化されている。歴史的に見ると、þann は hinn と同じレベルで指示内容の異なる指示代名詞であって、アイスランド語ではこれと同じレベルの使い分けが現代語でも保たれている。これに対して他の北ゲルマン諸語では hinn の系列は失われている。これら諸語には þann の系列が定冠詞の原型として新たに出現し、hinn の系列と競合し、最終的にこれを駆逐して定冠詞となる過程が認められる。たとえば 13 世紀後半まで遡るスウェーデン語として最古の文献では明らかに hinn と þann に由来する thæn とが競合しているし、デンマーク語の den でも事情は違わない。デンマーク語では 14 世紀になると than が明らかに優勢となる(Falk and Torp 1900:61)。13 世紀のノルウェイの文献では þann の系列はまだ定冠詞の原型と認められるような用法は見られず、スウェーデン語やデンマーク語の 13 世紀後半と同じ状況になるのはようやく 14 世紀に入ってからで、アイスランド語ではさらにこれより遅く、結局この島では定着しつつあった hinn 系列の前置定冠詞との交替は見られなかった。時間的地理的分布は、定冠詞の原型に þann 系列を用いる習慣はデンマークやスウェーデンといったヨーロッパよりの地域から伝播し、最終的にはアイスランドには到達しなかった、ということを示している。ノルウェイ山間部の保守的な方言の中にはアイスランド語と同様 hinn 系列の前置定冠詞を用いる習慣が残っている場合があり、こちらのほうが本来の前置定冠詞形式であったことを裏付ける。

使われ出した当初の dental を語頭音とする限定辞は hinn と部分的に競合していたわけだが、Falk and Torp(1900)によればこの用法は北ゲルマン語としては不自然であり、「ドイツ語的」であったという(p.63)。hinn 系列は古い層のどこにでも見られる本来の用法なのに対して、þann 系列は後から使い始められたのは確実であり、かつこの習慣が南方から伝播したと考えるのは上で見たような分布からも正しいだろう。アイスランド語で þann 系列が定冠詞とならなかったのは、新しい習慣がここまで到達した時点で、すでに普及する余

地がなかったからと推測できる。この新しい習慣が伝播した時期に、北ゲルマン諸語では *hinn* 系列の前置定冠詞はまだ文法化の途上であったことを無視することはできない。デンマーク語とそれ以外の北ゲルマン諸語とを分類する基準である剰余的規定の成立過程の観察で、定冠詞文法化の進行と新しい習慣の伝播の交錯する様子を明らかにできるだろう。

6. 剰余的規定

前置定冠詞と後置定冠詞とが同時に使用される剰余的規定は 15 世紀以来認められ、スウェーデン語やノルウェー語では一般に広く使われるようになっている。これに対してデンマーク語では 15～6 世紀には認められるものの一般化しなかった。

デンマーク語とスウェーデン語での剰余的規定と後置定冠詞の関係は次のようである：

- (1) デンマーク語ユラン方言の大部分 後置定冠詞なし 剰余的規定なし
- (2) 標準デンマーク語 後置定冠詞あり 剰余的規定なし
- (3) 標準スウェーデン語 後置定冠詞あり 剰余的規定あり

限定辞後置の起源そのものは印欧語的にかなり遡るものだが、定冠詞としての文法化の動機はそれほど古く遡ることはなく、後置の規定辞が定冠詞として文法化され始めたのは前置定冠詞より後と考えられる。形容詞は一貫して前置定冠詞と共に起る。剰余的規定は後置定冠詞の文法化を前提とする。

剰余的規定という習慣が普及する過程と *þann* 系列の使用が広がる時期は、それぞれの地域で事情は異なるものの、多くの地域で重なっている。上述のように *hinn* と *inn* の位置による交替は、形容詞の限定により強い指示が求められたことを反映している。前置定冠詞の発達には、*n-stem* の弱変化形容詞による規定が弱まったことを動機とし、強い規定の限定辞 *h-inn* がリクルートされ、最終的には文法化がなされた過程が想定できる。剰余的規定はこの前置定冠詞による規定が名詞に後置定冠詞をつけることによる規定より強いからこそ生じた現象である。そして *hinn* と *þann* の交替は前者の規定がより弱かったことを前提に考えなくてはならない。Falk and Torp(1900)の指摘するように *þann* を使用することが当初「ドイツ語的」というように新奇なものであったなら、これは本来の文法化されつつあった *hinn* よりは明らかに強い指示の機能を持っていただろう。分布的には、*dental* の語頭音を持つ規定辞を定冠詞化する習慣は南方から北ゲルマン語地域の大部分を覆っている。

7. 定冠詞要素の交替

これらを考慮した上で定冠詞要素の交替するプロセスを考える。西ゲルマン語の定冠詞は [DET [NP]] という単純な統語関係を持つ。定冠詞の要素は *dental* を語頭音に持つ限定辞が果たしている。本来限定辞としては北ゲルマン語にも存在していたこの要素そのものが借用語として持ち込まれたわけではなく、この要素と結びついた統語関係が北ゲルマン諸語にもたらされたと考えべきだろう。ユラン方言の定冠詞は次のように西ゲルマン諸語のそれとまったく同じ統語構造を示している：

前置[ART a [NOUN]]

前置[ART a [ADJ [NOUN]]]

ただし、ここでは語頭音が dental ではないことに注意しなければならない。

標準デンマーク語の定冠詞は次のように示される。原型と前置定冠詞となる要素が異なるのみである。

後置[[NOUN]ART -en]

前置[[ART den [ADJ][NOUN]]]

これに対して標準スウェーデン語では前置される定冠詞に関してはデンマーク語と同様であるが、剰余的規定が見られる点が異なる。

後置[[NOUN]ART -en]

前置[[ART den [ADJ]][[NOUN]ART -en]]

定冠詞の文法化がどの程度進行していたかが、ここに示したような差の発生に大きく影響したものと考えられる。Dental の語頭音を持つ限定辞の統語関係が持ち込まれた時期、ユラン方言では後置定冠詞の文法化はまだ途上であった。すでに前置される定冠詞が dental の語頭音ではなく、限定辞の前置、後置による区別が明確には保持されていなかったこの方言では、新しい統語関係の導入によってこの区別は完全に失われ、形容詞にも名詞にも等しく前置による規定が行われるようになった。限定辞の位置による区別が保持されている方言と比較すると、当該方言では新しい限定辞の統語関係の新奇さの程度はより低かったと考えられる。

標準デンマーク語に新しい統語関係を持つ定冠詞の原型が持ち込まれたのは後置も含めて定冠詞の文法化が進行している最中であった。伝播の方向を考えるとユラン方言より若干時間的に遅い時期であっただろう。ユラン方言と異なり限定辞の位置による区別は保たれていたため、後置定冠詞の原型には影響がなく、前置定冠詞の要素が hin < hinn から den に交替しただけである。新奇的な限定辞である前置定冠詞の原型 den と後置定冠詞の原型 -en とは位置のほかに形態的にはっきりと異なる形式を得た。この時期のデンマーク語では剰余的規定が認められるが、hin が den に交替するに伴って一般化する動機を失っていったと考えられる。hin と -en が相互補完的であるという状況であったからこそ、den と -en も同じ分布を保つことができたのである。

スウェーデン語でも限定辞の位置による区別は保持されていた。デンマーク語よりもさらに遅く到達した新しい統語関係は定冠詞の文法化には間に合わなかった。標準デンマー

ク語と同様後置定冠詞は新しい定冠詞の原型には影響されなかった。デンマークより遅く新しい統語関係が入ってきたので、その時点で定冠詞は成立していた点が異なった。このような時期に剰余的規定が始まったことは、後置定冠詞の語彙的意味が完全に失われていたことを示している。標準デンマーク語では hin に取って代わりつつあった den と en で定冠詞のペアが定着したのに対し、スウェーデン語ではまず hin/en のペアで定着していたところに hin と den の交替が起こった。このことが剰余的規定の一般化を促すこととなったと推測される。

8. 結論

以上見てきたように、北ゲルマン諸語に西ヨーロッパから定冠詞の統語関係が伝播してきた時期、まさに北ゲルマン諸語でも自律的に定冠詞のカテゴリーが発達しつつあった。この二つの流れが交錯したことによって、北ゲルマン諸語は剰余的規定に関する等語線によって二分され、またヨーロッパ諸語は定冠詞の前置・後置に関する等語線によってさらに分割される動機を得た。規定辞の後置はヨーロッパ周辺部においては珍しいものではなく、むしろ印欧語の古い特徴を保持したものともいえる。定冠詞の文法化はヨーロッパ各地で並行的に生じた現象であり、北ゲルマン諸語においてもこれを外部からの影響と考えるには及ばない。今日の定冠詞に関する特徴の分布は、基本的な（言語的）共通性と小さな部分での言語接触による影響とに動機づけられている。いくら共通性が高くても、小さな圧力によって全体の姿が大きく規定されるのは、他の人間の活動によるさまざまな現象と同様である。言語帯と呼ばれる現象の伝播は大方このような過程を共有しているものと思われる。

ここで考察したような背景を考えれば、19 世紀以来研究者を悩ませているゲルマン語の分類が困難なのは当然といえる。こんにちのヨーロッパのように国家間の境界が明確に規定され、かつ国家内部の教育が画一的指向性を持って行われるならば、今後このような現象の発生はある程度は抑制されるかもしれない。しかし、規範によっていくら言語変化を抑制しようとも、言語はかならず変化する。変化は自律的にも発生するが、隣からもやってくる以上、言語帯のような現象はかならず生じるだろう。⁽¹⁵⁾

注

- (1) ここでいうバルカン半島の諸言語とは印欧諸語に属するが、それぞれに異なった下位分類をされるものをいう。
- (2) Pisani はこれは新たに印欧語を受け入れた基層が自由アクセントは受け入れなかったことに由来する現象だと解釈している。
- (3) 西ヨーロッパにおける「言語帯」現象をいくつか挙げる。
 - ① 人称代名詞の義務的使用とゲルマン語タイプの語順の固定。櫻井(2000)参照。冠詞は

古いところでは古ギリシャ語ですでに確立していた範疇で、ロマンス諸語では歴史時代における発達が不完全とはいえ観察できる現象である。

- ② 前舌円唇母音の存在。ロマンス語の特徴とは異なりフランス語にはこの種の音が存在し、ドイツ語を経てさらに東までこの音の分布は広がっている。より広い視野で見るとこの音の存在する範囲は比較的限定されることがわかる。ウラル諸語の母音調和との関連を指摘するべきかも知れない。
- ③ フランス語、ドイツ語、デンマーク語に共通する r 音。これは系統とは無関係の分布を示し、おそらくフランス語から西へ広まった習慣である。
- ④ 過去形式の交替、複合未来形式の導入。動機としてはもっと基本的な言語変化の特性を反映している可能性も指摘できるが（櫻井 2001 参照）、明らかに西ヨーロッパ諸語の共通特性といえる。
- (4) たとえば Kufner(1972) Nielsen(1979)などを参照
- (5) もちろん正確にはこの地域の国境付近は言語が混在する地域であるのだが、あくまでも利便性を考えてここではこのように表現する。
- (6) ここには独丁国境以南のデンマーク語方言も含まれる。
- (7) cf. Haugen 1984:377
- (8) スウェーデン語 Overbestemthet
- (9) ここでいう Jysk は次の方言である：北西ユラン方言、西ユラン方言、南ユラン方言
- (10) ギリシャからの文法家の大量流入がラテン文法の基礎となったことは疑いようがない。ラテン文法が後の西ヨーロッパ諸語の文法に多大に影響しているのも事実である。現代の(規範)文法はギリシャ人のギリシャ語に対する分析という枠に依然としてとらわれているといえる。
- (11) n-stem は印欧語的には nomen agentis を形成する機能を持っていたと考えられる。
- (12) 定冠詞は指示代名詞とは異なり文脈から独立して使用される必要がある。定冠詞がたんなる文法的マーカとなるまでにさまざまな文法化のステップがある。
- (13) 人称代名詞 hann,hún の語頭音とも同じ由来と考えられる。
- (14) 伝統的解釈とは次のようなものである：
hinn, inn とともに形容詞に先行する指示代名詞であった。
 - ・ 形容詞に先行する場合のみ指示性が弱まった。たとえば konungr inn gamli の inn
 - ・ こうしたケースが再解釈の対象となり、konungr-inn のような結合が成立した。
 - ・ さらにここを出発点として形容詞が伴わない場合にも inn が前置定冠詞となった。inn は当初通称名にのみ頻繁に現れていることから、ここから一気に後置定冠詞の原形が成立したとは考えにくい。少なくとも定冠詞付きの固有名詞は生じていない。
ルーマニア語やアルバニア語などのバルカン諸語の後置定冠詞発達プロセスも重要な傍証となる。
- (15) 現代においては英語との接触による変化も想定しなければならない。

参考文献

BJERRUM, Anders

- 1953 Om det danske Dialekter i Sønderjylland. *Sønderjydske Arbøger*: 101-124.

CHRISTOPHERSON, Hans

- 1985 *Sprog i Sydslesvig*. Rostras: Sorø

FALK, Hjalmar and Alf TORP

- 1900 *Dansk-Norskens Syntax*. Aschehoug: Kristiania

HAUGEN, Einar

- 1984 *Die Skandinavischen Sprachen*. Helmut Buske: Hamburg

KUFNER, Herbert L.

- 1972 The Grouping and Separation of the Germanic Languages. In van COETSEM, Frans and Herbert L. Kufner(eds). *Towards a Grammar of Proto-Germanic*. Max Niemeyer: Tübingen.

LÖFSTEDT, Einar

- 1942 Zur Vorgeschichte des Romanischen Artikels. In *Syntactica. Studien und Beiträge zur historischen Syntax des Lateins I*: Lund.

NIELSEN, Hans Frede

- 1979 *De Germanske Sprog Baggrund og gruppering*. Odense Universitetsforlag: Odense.

NIELSEN, Niels Åge

- 1980 *Dansk Dialektologi II. Jysk*. Hernov: Odense.

PISANI, Vittore.

- 1972 *Indogermanish und Europa*. Fink: München..

SANDFELD, Kr.

- 1930 *Linguistique Balcanique, Problème et Résultats*. Champion: Paris.

SEEBOLD, Elmar

- 1984 Der postponierte Artikel in den Nordgermanischen Sprache In UNTERMANN, Jürgen and Bela BROGYANYI(eds). *Das Germanische und die Rekonstruktion der Indogermanischen Grundsprache*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.

SKAUTRUP, Peter

- 1944-70 *Det Danske Sprogs Historie I-V*. Gyldendal: København.

櫻井 健

- 2000 「言語の進化とフランス語の成立」『ロマンス語研究』33: 98-107.
2001 「複合完了形式の文法化プロセス」『愛知県立大学外国語学部紀要』33: 369-393

RESEARCH ON THE PRINCIPLES GOVERNING THE DENOTATIONS OF GRAMMATICAL FUNCTIONS IN NATURAL LANGUAGE

Results of the Research Project

Grant-in-Aid for Scientific Research (C) (2): 2000-2002, No. 12610554

Head Investigator:

MACHIDA, Ken (Graduate School of Letters, Nagoya University)

Collaborative Investigators:

YANAGISAWA, Tamio (Graduate School of Language and Cultures,
Nagoya University)

TAMURA, Kenichi (Faculty of Education, Aichi University of Education)

SAKUMA, Junichi (Graduate School of Letters, Nagoya University)

SAKURAI, Takeshi (Faculty of Foreign Studies, Aichi Prefectural
University)

Published by the Department of Linguistics, Graduate School of Letters.

Nagoya University

Furo-cho, Chikusa-ku, 464-8601 Nagoya, JAPAN

E-mail:kmachida@lit.nagoya-u.ac.jp

自然言語の文法的機能の表示を支配する原理の研究

平成12—14年度科学研究費補助金

基盤研究 (C) (2) 研究成果報告書

課題番号 12610554

研究代表者 町田 健

2003年3月31日発行

© 名古屋大学大学院文学研究科言語学研究室

464-8601 名古屋市千種区不老町